

長野県飯山市

KAMABUCHI KITAGOUDO SITE
釜渕・北顔戸 遺跡

1988・3

飯山市教育委員会

長野県飯山市

KAMABUCHI

KITAGOUDO

SITE

釜淵・北顔戸 遺跡

1988・3

飯山市教育委員会

刊行にあたって

飯山市内には埋蔵文化財包蔵地として約400箇所の遺跡が確認されております。約2万年の太古より連綿と営みが続けられ今日の飯山市へと発展してきました。

飯山市教育委員会では、これら祖先の残した貴重な文化遺産を後世に残すべく文化財の保護を進めております。

今回の発掘調査は、農村総合モデル事業の一環として行われた開場整備事業に伴うもので、県立飯山南高等学校教諭の高橋桂先生に団長をお願いして緊急発掘調査を実施しました。

調査によって、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世の各期に亘る遺構・遺物が出土し、原始・古代の外様平がより明らかとなりました。特に、中世の祭祀遺構と思われる場所より出土した鳥形や木簡は、中世民間信仰を知る上で極めて貴重な資料を提供いたしました。また、多数の木製品は当時の木工技術の高度さに改めて驚いた次第です。

この報告書が学術報告書として活用されるとともに、市民の方々に広く親しまれ、飯山市の埋蔵文化財に対する関心と愛着の念が一層深められるよう祈念いたします。

最後になりましたが、御協力いただいた市民の方々、並び文化庁、県文化課をはじめ関係各位に厚く御礼申しあげます。

飯山市教育委員会

教育長 浦野昌夫

例　　言

- 1 本書は、農村総合モデル事業の一環で行った額戸地区調査整備事業に伴う、埋蔵文化財蓋跡・北額戸遺跡の緊急発掘調査報告書である。なお、北額戸遺跡については当初額戸第5遺跡としたものを新たに独立させたものである。
- 2 蓋跡は飯山市大字寿字江下地籍に、北額戸遺跡は同寿字小原地籍にそれぞれ位置する。
- 3 調査は、飯山市の委託金並びに国庫補助事業補助金を受け、飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。
- 4 発掘調査は、昭和62年5月11日より6月18日まで行った。調査にかかる組織は第2章第1節に記した。
整理作業は、高橋調査団長指導のもとに調査員全員があたった。なお、図版作成については石黒京子の協力を得た。
- 5 本書の執筆は、調査員が分担して行い高橋調査団長が総括した。なお、文責は次に記した。
- 6 調査から報告書作成にあたっては下記の方々に格別なる御指導を得た。記して感謝申し上げます。

(五十音・敬称略)

浅田貞由（愛知県陶磁資料館）　芦部公一（県文化課）　嶺村宏（奈良国立文化財研究所）　太田啓幸（県文化課）　河原純之（文化庁）　木下正史（奈良国立文化財研究所）　小林秀夫（県文化課）　坂井秀弥（新潟県文化行政課）　佐沢浩（県文化課）　田川幸生（県埋蔵文化財センター）　竹内一徳（丸子町公民館）　竹内順一（五島美術館）　廣瀬昭弘（国分寺市教委）　仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）　野澤則幸（名古屋市見晴台考古資料館）　平出紀男（名古屋市見晴台考古資料館）　松澤芳宏（日本考古学協会会員）　水野正好（奈良大学）　宮下健司（県史刊行会）　矢島宏雄（更埴市教委）

- 7 本書の編集は望月が行った。
- 8 出土遺物・実測図は飯山市教育委員会で保管している。

目 次

序
例 言

第1編 釜淵遺跡

| | |
|---|------------|
| 第I章 環 境 | 1 |
| 第1節 遺跡の位置と自然環境 | (田村 沢城) 1 |
| 第2節 歴史的環境 | (常盤井智行) 4 |
| 第II章 経 過 | (望月 静雄) 9 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 9 |
| 第2節 調査経過 | 10 |
| 第3節 調査概要 | 11 |
| 1. 調査の方法 2. 調査区の概要 | |
| 第III章 遺 構 | (望月 静雄) 14 |
| 第1節 堀立柱建物 | 14 |
| 第2節 土 壤 | 14 |
| 第3節 その他の遺構 | 25 |
| 第IV章 遺 物 | 26 |
| 第1節 楔文時代 | (望月 静雄) 26 |
| 1. 土 器 2. 石 器 | |
| 第2節 弥生時代 | (常盤井智行) 31 |
| 1. 土 器 2. 小 括 | |
| 第3節 平安時代 | (常盤井智行) 37 |
| 1. 土 器 2. 小 括 | |
| 第4節 中 世 | (望月 静雄) 41 |
| 1. 陶磁器 2. 木製品 3. 銭 貨 4. 小 括 | |
| 第V章 総 括 | (高橋 桂) 59 |

第2編 北顔戸遺跡

| | |
|---------------------------|------------|
| 第I章 遺跡の概要 | (望月 静雄) 61 |
| 第1節 遺跡の位置 | 61 |
| 第2節 歴史的環境 | 61 |
| 第II章 調 査 | 63 |
| 第1節 経 過 | (望月 静雄) 63 |
| 第2節 遺 物 | (常盤井智行) 63 |
| 1. A地区出土遺物 2. B地区出土遺物 | |
| 第III章 ま と め | (常盤井智行) 68 |

挿図目次

釜淵遺跡

| | | |
|------|----------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡の位置 | 1 |
| 第2図 | 遺跡位置図 | 2 |
| 第3図 | 釜淵遺跡付近の積雪量 | 3 |
| 第4図 | 周辺遺跡分布図 (1:25,000) | 5 |
| 第5図 | グリッド設定図 (I区) | 11 |
| 第6図 | 調査区 (1:1,000) | 13 |
| 第7図 | I区遺構全体図 (1:160) | 15 |
| 第8図 | SK 1・2実測図 (1:20) | 17 |
| 第9図 | 遺構実測図1 (1:100) | 18 |
| 第10図 | 遺構実測図2 (1:100) | 19 |
| 第11図 | 遺構実測図3 (1:100) | 20 |
| 第12図 | 遺構実測図4 (1:100) | 21 |
| 第13図 | SK 4・5遺構 遺物分布図 (1:40) | 22 |
| 第14図 | SK 6 (祭祀遺壙) 遺物分布図 (1:40) | 23 |
| 第15図 | SK 7・8遺構 遺物分布図 (1:40・1:20) | 24 |
| 第16図 | 縄文土器括影図1 (1:3) | 27 |
| 第17図 | 縄文土器括影図2 (1:3) | 28 |
| 第18図 | 石器実測図1 (1:3) | 29 |
| 第19図 | 石器実測図2 (1:3) | 30 |
| 第20図 | SK 4出土弥生式土器 (1:4) | 32 |
| 第21図 | 包含層出土弥生式土器 (1:4) | 34 |
| 第22図 | 平安時代の土器 (1:3) | 39 |
| 第23図 | 中世の遺物1 中玉陶磁・古瀬戸 (1:3) | 41 |
| 第24図 | 中世の遺物2 球窓系陶器1 (1:4) | 43 |
| 第25図 | 中世の遺物3 球窓系陶器2 (1:4) | 44 |
| 第26図 | 中世の遺物4 木製品 (1:2) | 45 |
| 第27図 | 中世の遺物5 杖1 (1:2) | 47 |
| 第28図 | 中世の遺物6 杖2 (1:3) | 48 |
| 第29図 | 中世の遺物7 柱根1 (1:6) | 49 |
| 第30図 | 中世の遺物8 柱根2 (1:6) | 50 |
| 第31図 | 中世の遺物9 柱根3 (1:6) | 51 |
| 第32図 | 中世の遺物10 柱根4 (1:6) | 52 |
| 第33図 | 中世の遺物11 柱根5 (1:6) | 53 |
| 第34図 | 中世の遺物12 柱根6 (1:6) | 54 |
| 第35図 | 中世の遺物13 漆器椀 (1:2) | 55 |
| 第36図 | 銭貨拓影図 (1:1) | 55 |
| 第37図 | 中世陶磁および平安時代遺物分布図 | 56 |

北顔戸遺跡

| | |
|----------------------------|----|
| 第38図 調査区 (1 : 1,000) | 62 |
| 第39図 出土遺物1 (1 : 3) | 65 |
| 第40図 出土遺物2 (1 : 4) | 66 |
| 第41図 出土遺物3 (1 : 4) | 67 |

表 目 次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 7 |
| 第2表 鰐山地方の弥生土器編年表 | 36 |
| 第3表 鰐山地方土器器種・法量比較表 | 40 |
| 第4表 出土古錢一覧表 | 56 |

図 版 目 次

| | |
|-----------------|---------------------------|
| 図版一 1 遺跡付近の航空写真 | 21 遺物出土状態 |
| 二 2 遠景 | 22 遺物出土状態 |
| 3 近景 | 23 調査風景 |
| 三 4 調査開始式 | 九 SK 6 (中世) |
| 5 I 区調査風景 | 24 烏形・不明木製品出土状態 |
| 6 II 区調査風景 | 25 烏形出土状態 |
| 四 7 打製石斧出土状態 | 26 木製品出土状態 |
| 8 打製石斧出土状態 | 27 木簡出土状態 |
| 9 漆椀出土状態 | 28 漆椀出土状態 |
| 10 木筒状木製品出土状態 | 29 杖打ち込み状態 |
| 11 柱根出土状態 | 十 SK 7 (中世) |
| 12 P44櫛板出土状態 | 30 遺構 |
| 五 13 遺構 | 31 珠洲系陶器片・太型蛤刃石斧出土状態 |
| 14 SB 2 | 32 小形磨製石斧出土状態 |
| 六 15 SK 1 | 十一 SK 8 (中世) 珠洲系陶器(鉢)出土状態 |
| 16 SK 2 | 34 SK 9 遺物出土状態 |
| 17 SK 3 | 35 SK 9 (中世) |
| 七 SK 4 (弥生) | 十二 36 遺構全休図 |
| 18 遺物出土状態 | 十三 37 遺構全体図 |
| 19 遺物出土状態 | 十四 38 打製石斧 |
| 20 遺物出土状態 | 39 打製・磨製石器 |
| 八 SK 5 (平安) | 十五 40 SK 4 出土弥生式土器 |

| | | | | |
|-----|----|--------------|-----|-----------------|
| 十六 | 41 | 遺構外出土弥生式土器 | 60 | 木製品 |
| 十七 | 42 | 平安時代の土器 | 二十六 | 61 S K 8 出土木製品 |
| 十八 | 43 | 平安時代の陶器 | 62 | S K 6・8出土種子 |
| | 44 | 中世の中国陶磁 | 二十七 | 63 柱 根 |
| | 45 | 古瀬戸 | 二十八 | 64 柱 根 |
| 十九 | 46 | 珠洲系陶器（甕・壺） | 二十九 | 65 柱 根 |
| | 47 | 珠洲系陶器（片口鉢） | 三十 | 66 柱 根 |
| 二十 | 48 | 珠洲系陶器（片口鉢） | 三十一 | 67 柱 根 |
| 二十一 | 49 | S K 6 出土木簡 | | 68 銭 貨 |
| 二十二 | 50 | S K 6 出土漆器椀 | 三十二 | 69 調査スナップ |
| | 51 | 26E出土漆器椀 | 三十三 | 北領戸遺跡 |
| 二十三 | 52 | S K 6 出土鳥形 | | 70 遠 景 |
| | 53 | S K 6 出土木製品 | | 71 近 景 |
| | 54 | 木製品 | 三十四 | 72 A地区（弥生式土器） |
| | 55 | 曲 物 | | 73 B地区（弥生式土器） |
| 二十四 | 56 | S K 6 出土 杖ほか | | 74 B地区（土師器） |
| 二十五 | 57 | S K 6 出土 杖 | 三十五 | 75 B地区（平安時代の土器） |
| | 58 | 木製品 | | 76 B地区（須恵器長頸壺） |
| | 59 | 木製品 | | 77 B地区（土師器甕） |

第1編 釜湧遺跡

第一章 環 境

第1節 遺跡の位置と自然環境

千曲川流域において県内最下流に飯山盆地がある。この飯山盆地は、中央を北流する千曲川によって東西に二分され、東側の平地を木島平と呼んでいる。西側の平地は川と平行して走る笠ヶ丘陵(416m)によってさらに二分され、丘陵の東側を常盤平、西側を外様平と呼んでいる。外様平は東西1.5km~2km、南北約8kmの平地である。

笠ヶ丘陵跡は、この外様平のはず中央西側に位置し、黒岩山(938m)の東麓に広がる頬戸地区・飯山市大字寿字江下・笠瀬地籍に存在する。

外様平の西側には斑尾山(1382m)から延々北北東に信越を分かって走る標高1000m内外の関田山脈が聳えている。この関田山脈は、褶曲運動や火山活動などによって出来た山脈であり、第三紀層の崩壊物が堆積して出来た旧期洪積層や、火山活動によって吹き出した安山岩の崩壊転落したものなどの地層から出来ている。その後山日横川断層など数次の断層活動により山の東側が滑落し急峻な斜面を形成している。遺跡のある頬戸地籍の北西に聳える黒岩山などは、あたかも石の屏風を建てたようである。この様に外様平の西側の山は東斜面が急で、平地と650m内外の標高差を持っている。山脈から発する川は標高1000mの山地から、350m内外の平地へ一気に流れ下るため、浸蝕作用が強く、崩落などもあって、土砂を山腹に大量に運搬し、いたる所に小崩状地を形成している。その最大なもののは中条滝沢川崩状地である。大雨や春の雪融け水などの流入被害を防ぐため両岸に堤防を築いてきた結果、今では天井川の様相を呈するに至っている。

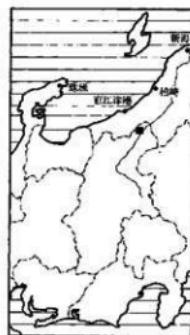
遺跡のある頬戸地籍の、北西に聳える黒岩山の頂上付近は安山岩が露出し、すこぶる急峻な斜面を待っているが山から流れ下ちる川はない。しかしその山麓には、豊富な湧水が三ヶ所あり、通年を通して安定した水利に恵まれている。

釜瀬遺跡(第2図1)は、この恵まれた湧水が合流して流れ下る沢筋にあり、平地と接する所に位置しており、生活環境は非常に恵まれた地形である。

北戸戸遺跡(第2図2)は、飯山市大字寿字小原地籍にあり、釜瀬遺跡から北東へ頬戸の集落をはさんで約500mの位置にある。このあたりは、長橋川の扇状地上である。長橋川は、黒岩山扇形(918m)あたりに源を発し、急峻な斜面を一気に流れ下る川であるが、春の融雪時ののみ流れる川である。黒岩山は冬期間4~5mの積雪があるので、これが春先一気に融け出して流れ下る様はものすごく、山腹に堆積した土砂を山崩れを伴って平地に運搬することは容易である。最近においても、昭和22年初春に大規模の山崩れがあり集落内に押出している。長橋川扇状地はこうして初春、雪融け時期に活発に形成されたものと思われる。北側には中世城館址の頬戸館が存在している。

なお、頬戸地区より越後の平九に至る平九峰が存在し、今ではほとんど交流はないが、近世においては物質の交流が盛んであったことが記録に残されている。

外様平の冬の気候は、一言にして言えば裏日本型である。冬が訪れると、大陸は急に冷却して厳しい寒さとなる。東アジアの中でもシベリアには世界の極寒と言われる所がある位に非常に寒い。そこでシベリアを中心として非常に寒冷な気圧が発生し、それが太平洋方面に向って流れ出して来る。これが冬の季節風で、一般には北西風となる。この季節風は元氷乾燥した大陸の内部から吹いて来るのであるから水分が乏しいのであるが、途中日本海上を吹きぬけてくる間に多量の水蒸気を供給され、日本に上陸して、山脈によって上昇され、裏日本に雨や雪を降らせる様になる。



第1図 遺跡の位置

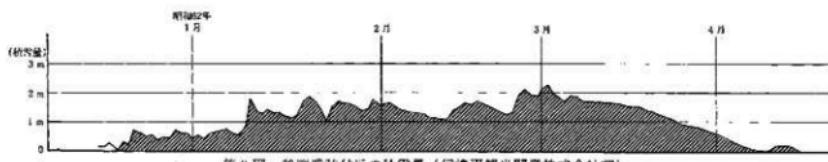


第2図：道路位置図（1.益溝遺跡 2.北根戸遺跡） 1:50,000

飯山盆地（外様平）の背梁山脈である関臼山脈は、高さ1000m内外で浅い山なので、裏日本に吹きつける季節風がこの山脈を越えて吹き下すために、当方は湿度の高い雪が降り、深雪地帯となる。飯山地方の積雪量を言い表わす言葉に「一里一尺」という言葉があり、南から北に向って一里進むと一尺雪が多くなることを意味している。東西的にはこの差が一段と強く常磐平から西に向って半里進むと一尺雪が多くなると言われる程である。屋根の雪下しの回数を例にとって見ると、外様平西側山麓側の頬戸地区が5回ならば、東側の尾崎地区では3回で済むという具合である。この様に冬の降雪量は、せまい外様平でもかなりの差があるのである。

次に夏の気候は内陸盆地型であり、夏の日盛りには高温となり、4月～9月までは雨が少なく乾燥する。特に4、5月は雪消えと同時に著しく乾燥する時期で、しばしばフェーン現象が起り火災発生の時期でもある。

この様に外様平の気候は、冬は裏日本型で北西季節風によって降雪（雨）量が多く雪天の日が多い。春4月から秋10月ごろまでは降雨量が少なく内陸盆地型の気候であり両者の特徴を持っているのである。



第3図 並木道路付近の積雪量（信濃平観光開発株式会社作成）

参考文献

外様村史 1957

第2節 歴史的環境

ここでは、釜淵遺跡のある額戸を中心とした外様平の歴史的環境を、考古学的遺跡・遺物とともに述べることとする。(第4図・第1表)。

先土器時代 人間が外様平に姿を現したのは今のところ、約2万年前の先土器時代のことと推測される。柳原地区^{北原}の東源守遺跡や、針湖池、長峰遺跡、尾崎南遺跡、大塚遺跡などの長峰丘陵を中心とした各所で、彼らの使用したと思われる刀器や彫器などの石器がみつかっている。関田山謎も彼らのフィールドとして山の幸・川の幸を求めて頻繁に歩きまわっていたにちがいない。

縄文時代 人々が煮炊きができる器「土器」と、よりすばしこい獲物が採れる弓矢を発明した時代で、縄目の文様がある土器が多いので縄文時代と呼ばれている。

外様平で最も古い縄文時代の遺跡は、今の柳原公民館のある台地上の小佐原遺跡で、縄文時代草創期の土器や石器が出土している。

縄文時代前期には岡峰遺跡がある。岡峰遺跡は、今の青少年ホームのある所で、昭和50年、51年に黒丘高校教諭(当時)小林幹男・児玉卓文氏および同校生徒による発掘が行われ、少量ではあるが縄文前期の有尾式土器が出土している。

縄文時代中期は、柳沢A遺跡・額戸道下遺跡・馬遺跡・甚川遺跡・別府原遺跡と、関田山脈東麓に点々と遺跡がみられる。額戸道下遺跡は、昭和27年に神田五六氏によって発掘された遺跡で、現足立警治氏宅と県道銀山曾根線との間の畠地に位置し、住居跡1棟と、中期後葉の土器深鉢、猪・鹿などの骨片が出土している。

縄文時代後・晚期は、柳沢A遺跡・額戸南木ノ下遺跡・額戸第5遺跡・当釜淵遺跡がある。額戸南木ノ下遺跡は額戸蓮華寺境内を中心とする遺跡で、縄文晚期のはば完形の浅鉢などが出土しており、遺物は蓮華寺に保管されている。

弥生時代 弥生時代は、大陸から稻作が伝來した時代で、日本人が米を作り始めた時代である。飯山地方に稻作が伝えられたのは、きびしい自然条件にはばまれてか、北九州に遷れること約300年、弥生時代中期中葉のことである。

外様平は飯山で最も早く稻作が始められた所で、岡峰・柳沢B・小境・押出・田原里小学校・光輪寺前・飯丘・大塚・小原・笛島・西長峰・甚川・法寺・水沢や、額戸北木ノ下遺跡・当釜淵・北額戸遺跡・柳原銀治田・北原遺跡などの弥生時代中期の遺跡が、関田山脈東麓と長峰丘陵上に点々と数多くみつかっている。

続く弥生時代後期になると先の、岡峰・柳沢B・北額戸・額戸北木ノ下・釜淵遺跡や、柳原の銀治田・北原遺跡などの関田山脈東麓の遺跡が姿を消すのに代って、甚川・額戸南木ノ下・額戸出口・柳町・尾崎南・東長峰遺跡などの長峰丘陵を中心に新たに遺跡が出現する。

弥生時代の遺跡で発掘された主な遺跡をみてみると、岡峰遺跡では、方形プランの住居跡が第1次調査で4軒が第2次調査で2軒以上が著しく重複してみつかっており、中期後葉の栗林II式および中期末の百瀬式土器が出土している。

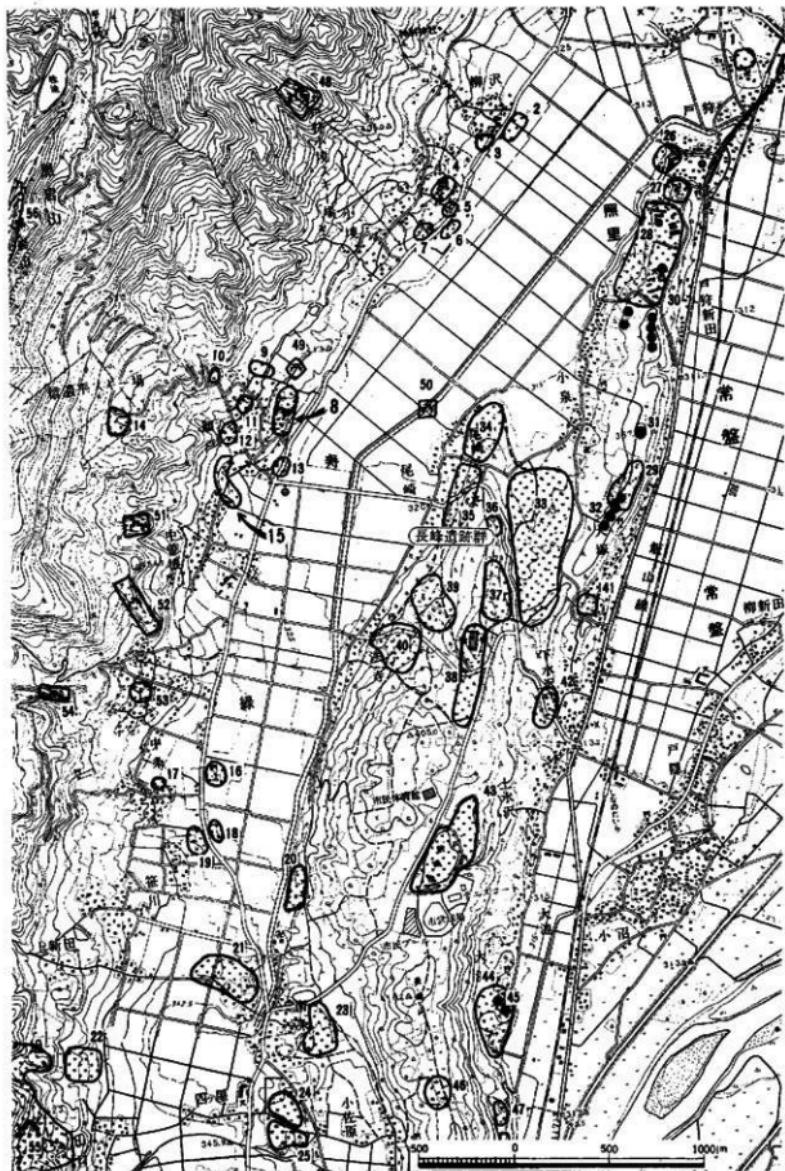
押出遺跡は、栗林式期の土壙と土器が出土しており、飯山で最も古い中期中葉の栗林I式土器(小境期)が出土している。

黑丘遺跡は、現在の黒丘高校庭整地の際に発見された遺跡で、堅穴式住居が検出され、中期の土器とともに、注目すべきものとして建築用材と推定される木製品が出土している。

東長峰遺跡は、方形プランの住居跡10軒が検出され、後期猪清水式の土器、鐵器、土製勾玉が出土している。

柳町遺跡は弥生後期の方形プランの住居跡2軒と、それに重複して古墳時代前期の方形プランの住居跡3軒が検出されている。

柳原地区的銀治田・北原遺跡は、円形プランと推定される弥生中期の住居跡が検出され、中期後~末の土器が出



第4図 周辺遺跡分布図 (1/250000)

土している。

以上の発掘された遺跡を概観すれば、中期には関田山脈東麓および戸狩周辺に中心があり、後期は長峰丘陵を中心移動するようである。また、住居跡は、中期には円形プランであったが、後期になると方形プランになる傾向がうかがえる。今後の調査によりくわしく解明されるであろう。いずれにせよ、外様平は飯山地方で最も早く稻作が始められ、かつ集落が集中して營まれた所であり、千曲川本流の洪水を被ることのない安定した地盤と、関田山脈の豊富な源水がその要因であったと思われる。

古墳時代 原則として1人の首長を葬るために応神天皇陵古墳・仁德天皇陵古墳などの巨大な墳墓が造られた時代を古墳時代と呼んでおり、階級社会が成立し、日本という「画家」が形づくられてゆく時代である。

飯山地方最古の古墳は、今のところ秋津郡筋山古墳と推定される。山頂に築かれた全長35mの前方後方墳で、その立地・墳形から前期に遡る可能性が指摘されている。

長峰丘陵は飯山でも有数の古墳密集地である。前方後円墳(帆立貝式)有尾古墳、直径40mの大円墳大塚茶臼山1号墳などの著名な古墳の他に、直径10m内外の円墳が數多く知られている。しかし、横穴式石室墳でないことが推定される他は、内容の知られているものではなく、測量調査も行われていない。今後の研究課題の一つである。なお、黒丘遺跡では前期の方形周溝状構造が検出されている。

また、尾崎の丸山徳夫氏所有の法寺下林の畠から出土した直刀および管玉・勾玉などの玉類が同氏宅に所蔵されている。かつて古墳があったものと推定されている。

古墳時代の生活跡は、古墳に比べ知られているものは案外少なく、外様平では、小堀押出遺跡で前期の土器が採集されている他、柳町遺跡で先の弥生時代の項で述べたように、弥生時代の住居と重複して古墳時代前期の住居跡が検出されている。このように古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡に比べ極めて少ない。今後の発見・調査に期待される。

歴史時代 古墳時代に続く飛鳥・奈良時代以降を歴史時代と総称しておく。

飯山地方では今のところ飛鳥・奈良時代の遺跡は知られていない。あるいは面場整備等によって消滅したのか、未だ発見されないだけのことなのだろうか、今後の調査・研究にまつところが大きい。

続く平安時代になると再び遺跡が知られるようになる。代表的なものとして当益瀬遺跡の他、柳原の北原・鐵治田遺跡、温井長者清水遺跡、飯山有尾遺跡、秋津郡草川尻遺跡がある。特に北原遺跡は、鐵治遺跡が数多く発見され、鐵治が行っていたことを物語っており、外様平が高い技術と文化をもった地域であったことが推測される。

なお、これらの平安時代の遺跡はいずれも平安時代中期(9世紀後半~11世紀)を中心とした年代に出現しており、全国各地に「莊園」と呼ばれる私有地が経営される時期にあたる。また、外様平が「常岩の牧」と呼ばれる官営牧場の中心であり、「吾妻鏡」文治2年(1186)3月の条に「常岩牧」がみえることから、外様平の平安時代における開発が、莊園あるいは常岩の牧に関連していた可能性が指摘されている。

中世・近世(鎌倉~江戸時代)の遺跡はこれまで考古学的にはあまり注目されていなかったが、近年ようやく目がむけられるようになった。そして古文書では知ることの少ない庶民の生活や、土器をはじめとする日常品の流通形態などが多く明らかにされつつある。

中・近世の代表的な遺跡は、当益瀬遺跡、北原戸造跡の他、温井長者清水遺跡、飯山有尾遺跡などがあり、倒立柱建物や、珠洲鏡、中國鏡、中國製陶磁器などが出土している。

特に今回の収集の調査で、永仁四年(1296)銘の祝符木簡が発見されたことや、大量の柱根が出土したこと、漆桶が出土したことなどは全国的にみても極めて注目すべきことである。

また、関田山脈東麓には、小堀城・頬戸館・中条城・中条館などが点々と存在し、外様平中央にも尾崎城などが存在している。古文書によれば、外様平には、常岩氏・泉氏・尾崎氏・頬戸氏・中曾根氏などの氏族が盤踞していたことが知られているが、先にあげた城跡や館跡の調査や、益瀬遺跡などの遺跡が発掘調査されることによって、よりくわしく彼らの動向が解明され、また、現在の頬戸・中曾根などの集落の歴史もより鮮明になるものと思われる。

第1表 周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺 跡 名 | 時 代 | 発掘 |
|----|-------------|------------------------|----|
| 1 | 岡 峰 | 縄文(前)・弥生(中)・平安 | ○ |
| 2 | 柳 沢 A | 縄文(中・後)・古墳 | |
| 3 | 柳 沢 B | 弥生(中) | |
| 4 | 鶴 屋 敷 | 弥生(後) | |
| 5 | 桜 沢 | 平安 | ○ |
| 6 | 小 境 | 弥生(中・後)・平安 | |
| 7 | 押 山 | 弥生(中)・古墳(前) | ○ |
| 8 | 北 顛 戸 | 縄文(晚)・弥生(中)・平安 | ○ |
| 9 | 顛 戸 第 5 | 縄文(晚) | |
| 10 | 顛 戸 天 犬 | 弥生(後) | |
| 11 | 顛 戸 北 木 / 下 | 弥生(中) | |
| 12 | 顛 戸 南 木 / 下 | 縄文(晚)・弥生(後) | |
| 13 | 顛 戸 道 下 | 縄文(中) | ○ |
| 14 | 顛 戸 出 口 | 弥生(後) | |
| 15 | 蓋 調 | 縄文(中・後)・弥生(中)・平安・中世 | ○ |
| 16 | 右 施 田 神 社 | 平安 | |
| 17 | 島 川 | 縄文(中・後) | |
| 18 | 笠 川 | 縄文(中) | |
| 19 | 別 府 原 | 縄文(中)・古墳・平安 | ○ |
| 20 | 正 行 寺 北 | 縄文(前)・平安 | |
| 21 | 旭町遺跡群北原 | 縄文(晚)・弥生(中)・平安 | ○ |
| 22 | 旭町遺跡群鐵治田 | 縄文(草)・弥生(中)・平安・中世 | ○ |
| 23 | 東 源 寺 | 先土器・平安 | |
| 24 | 鬼 ケ 峰 | 弥生(後)・平安 | |
| 25 | 小 佐 原 | 縄文(草・前・中)・弥生(中・後) | ○ |
| 26 | 旧 照 里 小 学 校 | 弥生(中) | |
| 27 | 光 明 寺 前 | 弥生(中) | ○ |
| 28 | 照 丘 | 弥生(中・後)・古墳(前) | ○ |
| 29 | 大 塚 | 先土器・弥生(中・後)・平安・中世・近世 | ○ |
| 30 | 照 里 古 墳 群 | 円墳 8基 | |
| 31 | 茶 白 山 古 墳 群 | 円墳 3基・1号墳 径42.5m 高5.5m | |
| 32 | 大 塚 古 墳 群 | 円墳 14基 | |
| 33 | 小 泉 | 弥生(中・後) | ○ |
| 34 | 柳 町 | 弥生(後)・古墳(前) | ○ |
| 35 | 山 峰 | 弥生(中・後) | ○ |
| 36 | 尾 嶺 南 | 先土器・弥生(後) | |
| 37 | 東 長 峰 | 弥生(後) | ○ |
| 38 | 西 長 峰 | 弥生(中・後) | ○ |

| | | | |
|----|-------|----------------------|---|
| 39 | 下林 | 弥生(中・後)・古墳 | |
| 40 | 法寺 | 弥生(中・後) | ○ |
| 41 | 水沢 | 弥生(中・後) | |
| 42 | 下水沢 | 平安 | |
| 43 | 針尾池 | 先土器・繩文(前)・弥生(中・後)・平安 | |
| 44 | お茶屋 | 繩文・弥生(中・後)・土師器? | |
| 45 | 大池古墳群 | 円墳2基 | |
| 46 | 長峰 | 先土器 | |
| 47 | 長者深 | 繩文(前)・弥生(中)・平安 | |
| 48 | 小境城 | 連郭 | |
| 49 | 頭戸館 | 単郭 | |
| 50 | 尾崎館 | 消滅 | |
| 51 | 中小屋城 | 連郭 | |
| 52 | 中条城 | 複郭 | |
| 53 | 中条館 | 複郭～安土桃山 | |
| 54 | 馬の峯城 | 連郭～戦国 | |
| 55 | 山口城 | 複郭～安土桃山 | |
| 56 | 黒岩城 | 単郭 戦国 | |

参考文献①、②、③より作成(S 63. 3月現在)

*北木ノ下遺跡は今回新たに確認した遺跡で、堀川龍夫氏所有の畠より
弥生中期の土器が採集されており、同氏宅に保管されている。

参考文献

- ① 岐山市教育委員会 1986 「岐山の遺跡」
- ② 長野県飯山北高等学校地歴部OB会 1977 「遺跡分布調査報告Ⅰ」
- ③ 江口善次 1957 「外様村史」
- ④ 岐山市教育委員会 1980 「長野県飯山市旭町遺跡群鍛冶田」
- ⑤ 岐山市教育委員会 1985 「長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅳ」
- ⑥ 岐山市教育委員会 1980 「長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査報告書」
- ⑦ 信濃史料刊行会 1966 「信濃史料」第1巻上下
- ⑧ 長野県史刊行会 1982 「長野県考古資料叢書1巻(2)主要遺跡(東北信)」
- ⑨ 岐山市教育委員会 1976, 1977 「岡峰遺跡発掘調査報告書」「岡峰遺跡等2次発掘調査報告書」
- ⑩ 高橋桂 1962 「岐山市原丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃』14-11
- ⑪ 松沢芳宏 1983 「岐山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35-3

第二章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

釜沢遺跡は飯山市大字寿字釜沢に所在し、弥生時代を中心とする遺跡であることで既知されていた。場所は田外様小学校北の中曾根区北半及び北側の頬戸区に近接する地域であるが、今まで頬戸地内まで拡張を持つとは予想していなかった。

昭和61年、農村総合モデル事業の一環として頬戸地区内において圃場整備事業の計画があがった。

9月4日、某文化課小林・太田両指導主事に米袋をいただき現地協議を行う。その結果、釜沢遺跡と頬戸南木ノ下遺跡の間の地区が対象地区となっていた。水田地帯であるが、一部畠地となっている部分があり、そこで収穫した土器細片を探集した。またもう一地区は、頬戸館社の南側にあたり、すぐ上方は繩文後期の遺跡として周知されている頬戸第5遺跡（仮称）に近接していた。

10月30日 県教育委員会より、「飯山市釜沢遺跡他の保護について」の通知があり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図るようにとの指示を受けた。計画としては、二遺跡で1000m以上を調査し、その費用として4,908,000円の予算書が示された。

昭和62年

4月6日 文化庁長官あて速成文化財発掘通知を提出する。

4月21日 頬戸地区圃場整備実行委員会委員と発掘調査について説明会を開催し協力を求める。

4月24日 調査会・調査団の委員の委嘱を行うとともに、頬戸公会堂において調査会を開催する。調査会・調査団の組織は以下のとおりである。

調査会名簿

| | | |
|-----|--------|---------------|
| 顧問 | 小野沢 静夫 | (飯山市長) |
| 〃 | 平井 佐平 | (圃場整備実行委員長) |
| 会長 | 浦野 昌夫 | (飯山市教育長) |
| 副会長 | 佐藤 清 | (飯山市教育次長) |
| 委員 | 上原 幸夫 | (飯山市文化財専門委員長) |
| 〃 | 高橋 桂 | (飯山市文化財専門委員) |
| 〃 | 栗 岩 勇 | (頬戸区長) |
| 〃 | 平井 宏 | (圃場整備副実行委員長) |
| 〃 | 足立 光延 | (頬戸区公民館長) |
| 事務局 | 小川 恵一 | (教育委員会社会教育係長) |
| 〃 | 望月 静雄 | (教育委員会社会教育係) |

調査団

| | | |
|-----|--------|---------------|
| 団長 | 高橋 桂 | (県立飯山南高等学校教諭) |
| 調査員 | 望月 静雄 | (飯山市教育委員会) |
| 〃 | 常盤井 智行 | (飯山市常盤小沼) |

調査員 田村滉城（飯山市外様顕戸）

作業協力者（順不同・敬称略）

足立てい 久保田すみ子 足立草苗 久保田ミユキ 栗巣敏子 小林千恵子 足立まさ子 平井ゆきを 栗巣春子 平井澄子 平井京子 北原清了 足立とみの 平井芳 清水カズエ 栗巣とわ 島津千代 佐藤良子 清水重利 上野松雄・市ノ瀬正人（飯山市教育委員会職員） 飯水社会科研究会 高澤秀徳（飯山市公民館）

協力者

石田清和（戸狩郵便局） 丸山一男（飯山市公民館） 岸田文彦（飯山市税務課） 栗巣時雄（飯山市議会議員） 北原隆（顕戸区） 足立商店 山本貞夫・滝沢道代・清水啓子・宮本宣子（飯山市教育委員会） 鈴木三郎助（民宿鈴庄） 顕戸八日会 大島重機 団場整備実行委員会 清水誠一（外様郵便局） 坪根まだか 青木彰（飯山市公民館外様分館）

第2節 調査経過

調査は昭和62年5月11日より6月18日にかけて実施した。器材搬入・天幕設営などの事前準備は5月7・8両日を行った。

5月11日 午前9時より調査開始式を行い、安全祈願祭を執り行った後、調査方法などの説明を行う。作業員の方は地元の主婦を中心として18名である。20時区より着手するものの、約15cmで水田床上となり、その下層は地山の黄褐色混埋土層であった。遺物・遺構は確認できなかった。14日には28Hグリットまで調査を進めたが、縄文式土器・中世珠洲系陶器片が若干出土したのみで、遺構等の痕跡は認められなかった。そのため、すでに水田にするための土地改変により破壊されているのではないかと懸念された。

17日には28I区より珠洲系陶器体の出土をはじめ、縄文後期土器片が多量に出土しはじめた。土層は南に向って徐々に傾斜を増し、旧地形が谷状地であったことを示している。そのため27~30・H~K区の谷状地を調査することにした。遺物はこの旧谷状地に堆積した黒色土層中に包含されており、中世~縄文各時代に亘る遺物が混在して出土した。またこの地区的調査と併行して、周辺地域の試掘調査を実施した。(II~IV区)。しかし、II・III区で弥生式土器片が若干出土したものの他区ではほとんど遺物ではなく、遺構も認められなかった。したがって、27~30・H~K区を中心として北側へ調査区を拡張することとした。

5月27日には26B区において漆碗が単独出土した。付近より縄文後期土器片・打製石斧が出土したが、若干の珠洲系陶器も出土したことから、中世の漆碗と推定した。また同時に柱底も続々と出土したため中世の建物の存在を予測するに至った。

5月31日には外様公民館等との共催により現地見学会を開催する。

6月1日 27G区において二個目の漆碗がほぼ完形で出土。付近より杭・種子など多数出土し、翌2日には同一遺構内と考えられる地点より木簡が出土した。

6月6日 奈良国立文化財研究所木下氏・県文化課笠置指導主事・更埴市教委矢島氏が視察、木製品の保存等について指導を受ける。また、市内松澤芳宏氏・県埋文センター田川氏が来訪、それぞれ指導をいただく。

6月7日 30G区P42より礎板出土。また29H区検出のSK7は当初縄文期と考えていたが、塙底より珠洲系陶器片が出土し、中世の竪穴遺構であることが判明する。翌8日は北側をさらに拡張するためパックホーを投入。Y~H・20~24区。

6月10日 市教育委員会視察。この頃までは全調査区の精査に入る。

6月12日 木簡・漆碗出土遺構(SK6)の精査によって鳥形木製品を検出する。

6月13日 文化庁河原主任調査官米跡、指導を受ける。

6月14日からは、確認遺構の未掘部分の掘り下げ及び、全体測量に入る。18日には全地区を完掘し、全体写真の撮影を行う。総面積は約1500m²である。

また19日～23日まで柱根の取り上げを行い、一点ずつ水の入ったビニール袋に入れ調査室に搬入した。

整理作業は他の遺跡調査もあったため10月中旬より実施した。多量の木製品の管理も大変で水槽に水没けにし、定期的に水を入れ替えた。遺物の洗浄・注記などは調査員2・3人で行い、同時に木製品の写真撮影を行った。水没けのため撮影には時間がかかったが、11月20日頃まで完了した。11月下旬からは遺物の接合・復元・実測作業にとりかかったが、12月中旬より1月末まで県スキー大会週間の準備・大会のため全面的休止を余儀なくされた。2月に入り、調査員3名により実測・ト雷斯・写真撮影などを精力的に行う。3月下旬に至りようやく図版が完成、同時に原稿も一通間ほどで仕上げた。

第3節 調査概要

1. 調査の方法

(1) 調査区の設定 (第5図・第6図)

調査区の設定にあたり、事前に対象区域内を踏査し、任意に試掘を行ったが水田のため明確な範囲は把握できなかった。ただ調査区北側(Ⅰ区)において一部の畑地で土師器片を採集でき、この付近を中心と調査することとした。3×3mグリッドを1列(Hライン)設定、番号を後の括弧を考慮して20より付した。結果的に座標軸の第三象限を使用し、X軸を20～、Y軸をX～となった。なお呼称はX-20グリッド等とすべきであったが、当初より20X等と呼称していたためそのまま踏襲することとした。

また、遺跡の拡がりを把握するため他地区において7箇所の調査区を設けた。Ⅱ・Ⅲ区は同グリッドで設定したが、他は地区は水田の形状にあわせ任意に設定した。

(2) 発掘方法

遺跡の範囲が不明確のため、まず遺跡の拡がりを把握することを第1目的とした。前項で触れたとおり、3mの1本トレチ(Hライン)から着手することとした。

また、遺物の取り上げについては、検出面まではグリット一括とし、まとまって検出された場合は分布図・レベルの記録作成を行う。さらに遺構が検出された場合はセクションの観察、分布図等を1/20で作成することとした。ある程度遺跡の拡がりを把握できた時点で、出る限り全面調査を行うこととした。結果的には500m²以上調査予定としていた3倍の1500m²を調査したが、遺跡範囲及び面的な調査は遺跡のごく一部であろうと思われる。

2. 調査区の概要 (第6図)

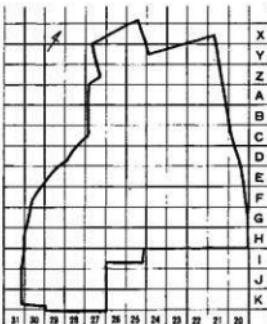
(1) Ⅰ区

今回の調査の中心となった地区である。本地區は東・南に向って傾斜しており、水田が段階上に並んでいる。層序は水田耕作上約15cm下が黄褐色粘土層の基盤および青白色粘土質層の英縫となる層であった。ただし南側の28～30・I～K区付近は旧谷状地であり、30K区南壁では耕作土下層は約100cmの黒色土層が堆積している。逆に調査区上方の20X付近は田直しにより基盤まで削平されていた。

検出された遺構は、掘立柱建物6・土塙(小豊穴)9、その他溝状遺構などがある。柱穴が多数検出されているが、これは高文・弥生・平安・中世の各時期の遺構が後世の地形改変に伴い破壊を受けたものと考えられる。

(2) Ⅱ区・Ⅲ区

調査対象地区的南端に位置する。從来の釜塗遺跡の範囲に近接する地区であり、付近の深掘りしたゴミ穴より赤



第5図 グリッド設定図(Ⅰ区)

生式土器片が出土していた。層序は北側が約30cmで茶盤の黄褐色粘土層に到達するものの、南側では150cm以上 の黒色土が堆積している。遺物は弥生式土器片が出土したが層としてまとまった出土はない。遺構についても検出されなかった。

(3) IV区

本地区はバックホーによって土質調査を行った。1.5mの深さまで調査したが、グライ土壤が続き生活面は認められなかった。

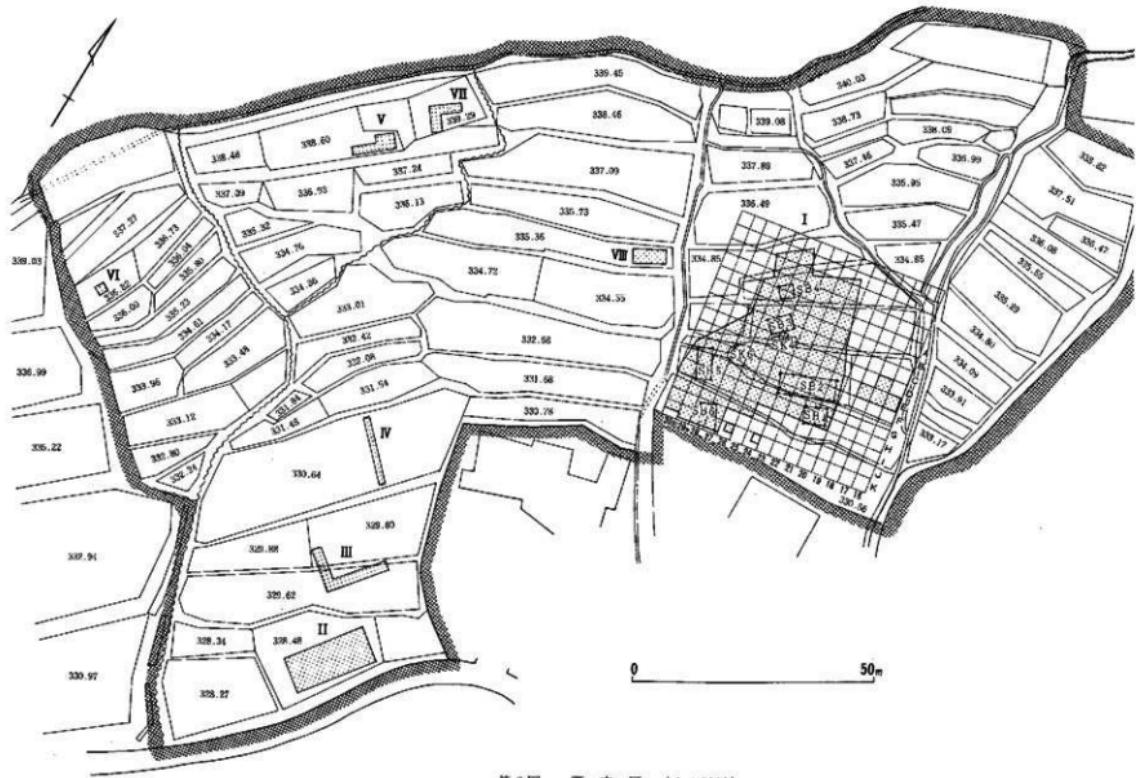
(4) V～VI区

対象地区の斜面上部で、本地區より上部は急峻な山地となる。比較的地形の安定した地区であるが地山面はかなり急であった。珠洲系陶器片が少量出土したが、遺構は確認されなかった。

(5) VII区

I区より比高差3m上位に位置する。西側に向って傾斜している。珠洲系陶器などの中世遺物が若干出土したが遺構は明確でなかった。

以上、並河遺跡の全調査地区について概述してきた。縄文時代～中世の生活の拠点となった場所はI区を含めた周辺と推定される。



第6図 調査区 (1:1000)

第三章 遺構

I区における遺構の検出は、傾斜地の水田地帯ということで階段状に地形変化が加えられており、多くの遺構がこれによって削平されていた。最も破壊を受けていたのは20~24ラインで、特に20~24・X~C区は耕作土の下はグレイ土壤となっており、地表面がかなり削平されたことを示している。なお30K区からほぼ北へ向って26B区に至る間は、旧谷状地と思われる黒色土が厚く堆積している。

このように遺構の検出状況は必ずしも良好ではなかったが、現時点での整理された遺構について触れてゆくこととする。

第1節 掘立柱建物

S B 1 (第10図)

20~21G H区にある梁行2間(3.8m)×桁行2軒(4.48m)の掘立柱建物である。柱間寸法は梁行が1.36m・2.48m、桁行は2.20~2.28mである。ピットの深さは一様ではないが平均約40cmを測る。

東側の桁行中央ピットより木製品(第28図15)が底面より出土している。

S B 2 (第10図)

20~21G II区にある梁行1間(4.11m)×桁行4間(11.5m)で、北側に龜が付く可能性がある。柱間寸法は桁行が2.12~2.36mである。本建物に附属するかどうか不明であるが、周間に多数の柱穴が存在する。本建物とした柱穴は深さ平均30cmで、60cmに達する柱穴もある。柱穴覆土は、暗黄褐色土層では一様である。

S B 3 (第11図)

24~26・B~D区に位置する。2軒(3.32~3.6m)×2軒(4.0m)で、柱間寸法は梁行が2.0m、桁行は2.6mである。西側は柱の配列がはっきりしない。柱穴深さの平均は30cm。

柱根はP15・P22・P23・P17・P18・P26で計6本出土している。

S B 4 (第11図)

25~26Z A区に位置する。調査区内において最も上段にある建物である。2軒(3.32~3.6m)×2軒(1.6~1.8m)で、柱穴の配列は悪い。

柱根は3本検出されている。建物内にも柱根を有するピットが存在しているが、おそらく建替などによるものと考えられる。

S B 5 (第9図)

28~29F~H区にある。1軒(3.4m)×4軒(6.92m)の建物で、柱穴がSK7の壁を切って構築される。桁行の柱間寸法は1.32~1.88mでは対応する。

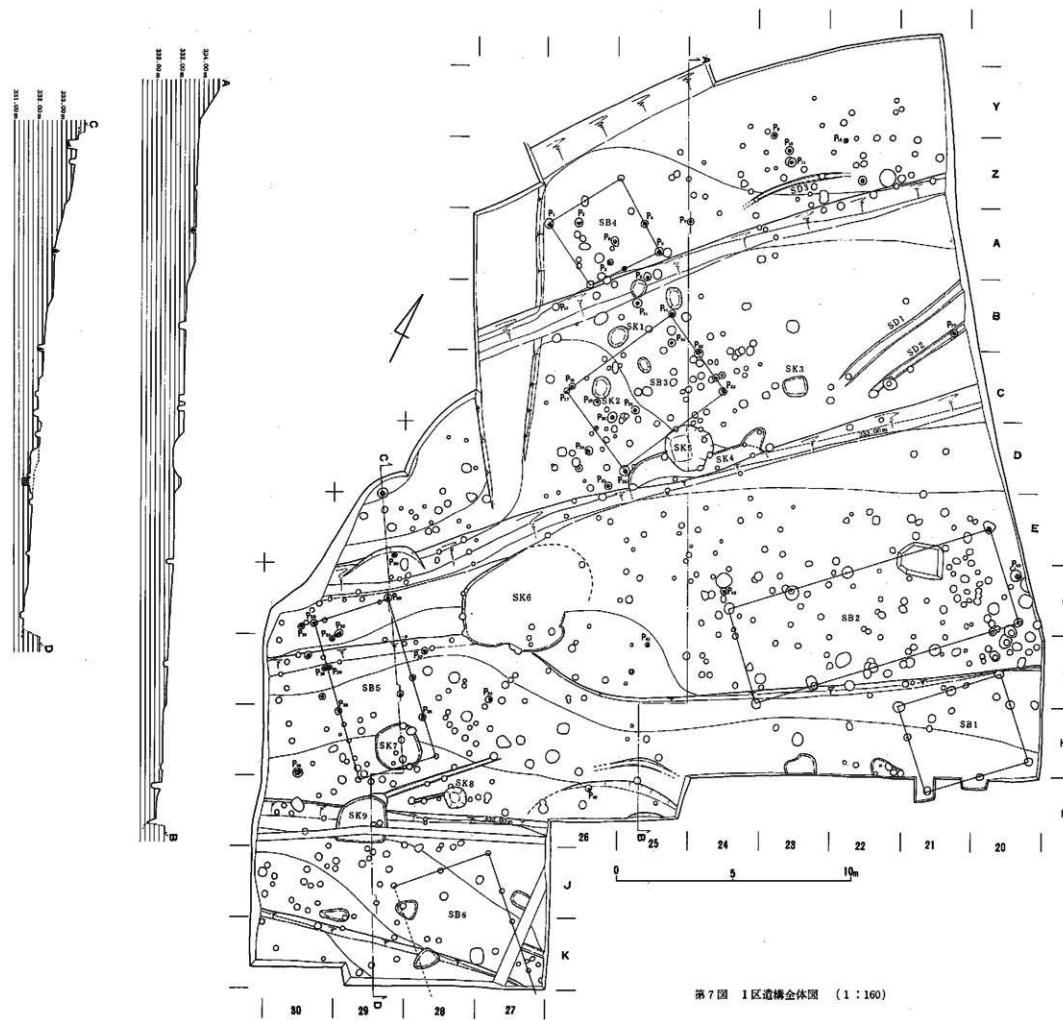
柱根は6本検出されている。下端附近に切り込みを入れた例があり特徴的である。

S B 6 (第9図)

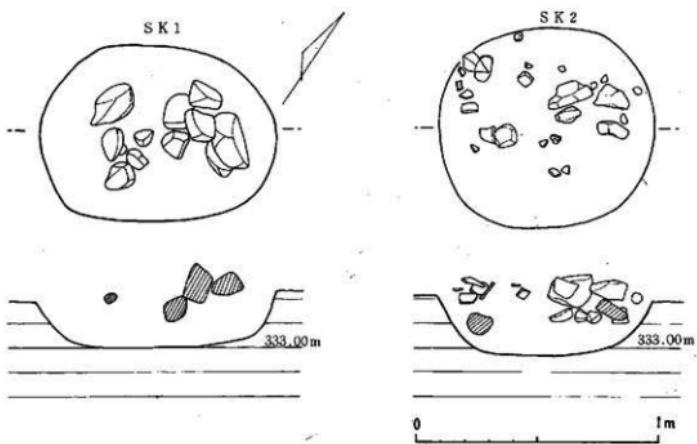
27~29J Kに位置する。全体を検出できなかったが2軒(4.2m)×4軒以上と思われる。柱間寸法は梁行が2.0~2.1m、桁行は1.32~1.76mである。以上、6軒の掘立柱建物は中世に位置づけられる。

第2節 土 壤

土壤は9基検出されているが、土壤と呼べるのはSK1~3で、他は豊穴造構とした方が妥当である。時期的に出土遺物によりSK1・2が縄文時代、SK4は弥生時代、SK5は平安時代、SK3・6~9は中世にそれぞ



第3圖 J区遺構全體圖 (1:160)



第8図 SK1・SK2実測図(1:20)

れ位置づけられる。

SK1 (第8図)

25・26B区に位置する。97×73cmの楕円形プランを呈し、深さ35cmを測る。確認時に周辺より多數縄文後期土器片が出土している。壇内より幼児頭大の石が約10点出土したが、特別に配石された状態ではなかった。

SK2 (第8図)

26C区に位置する。82×88cmのはば円形なプランで、深さは30cmを測る。壇内より縄文後期土器片・礫が出土している。

SK3 (第12図)

23C区に位置する。90×82cmの楕円形プランを呈す。深さは85cmを測り、断面は鍋底状を呈す。壇内にはば土壌が埋まる大きさの大石が入っており、周囲には小礫が土壤との隙間を埋めるようにぎっしりと入っていた。

なお小礫に珠洲系陶器片が混入しており中世期の遺構と考えた。

SK4 (第11・13図)

水田の段差によって切られ、また平安期土壌SK5によって一部切られている。一辺580cmを測る。住居址とも考えたが、床面が軟弱であること、プランが不定形であること等により住居址以外の遺構であろうと予測している。覆土および底面より多くの弥生中期上器片が出土している。完成品が少ないが、これは水田造成時に破壊されたものと思われる。むしろ水田区画の端にあったためかろうじて残存したと解釈した方が妥当であろう。

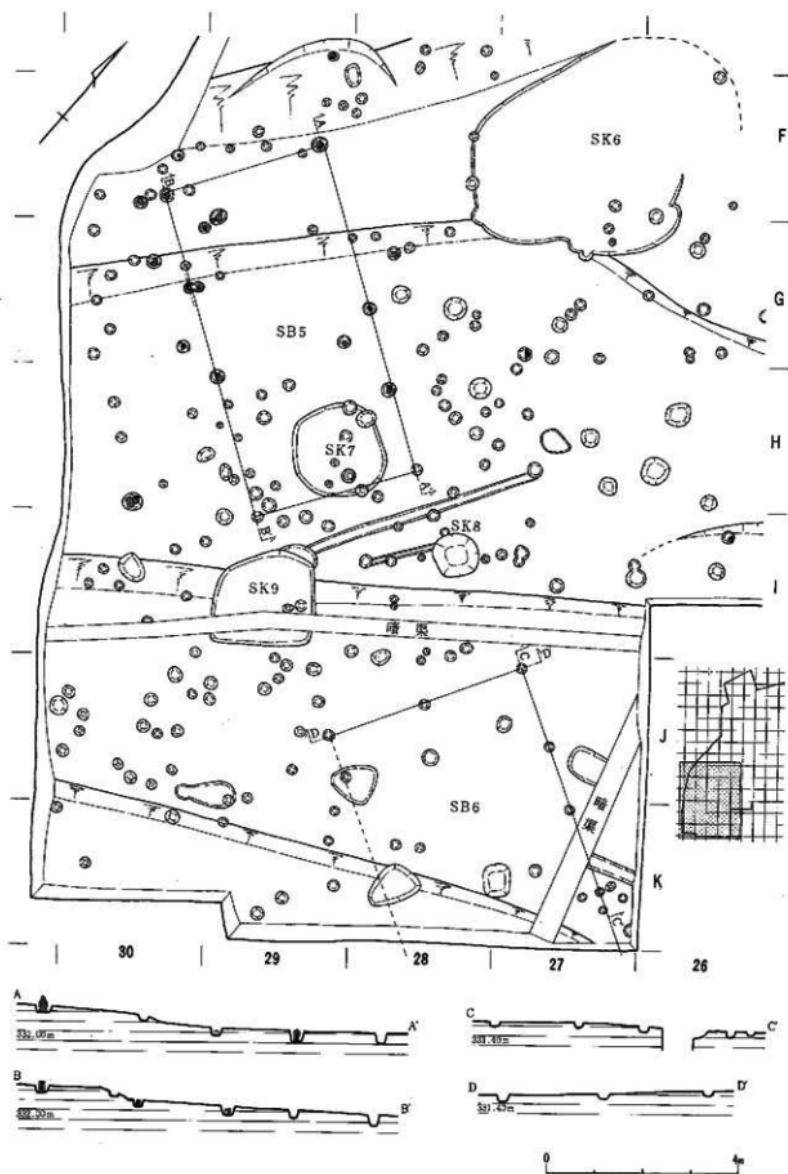
(遺物は、多くがそのまま漬された状態で出土している。)

SK5 (第11・13図)

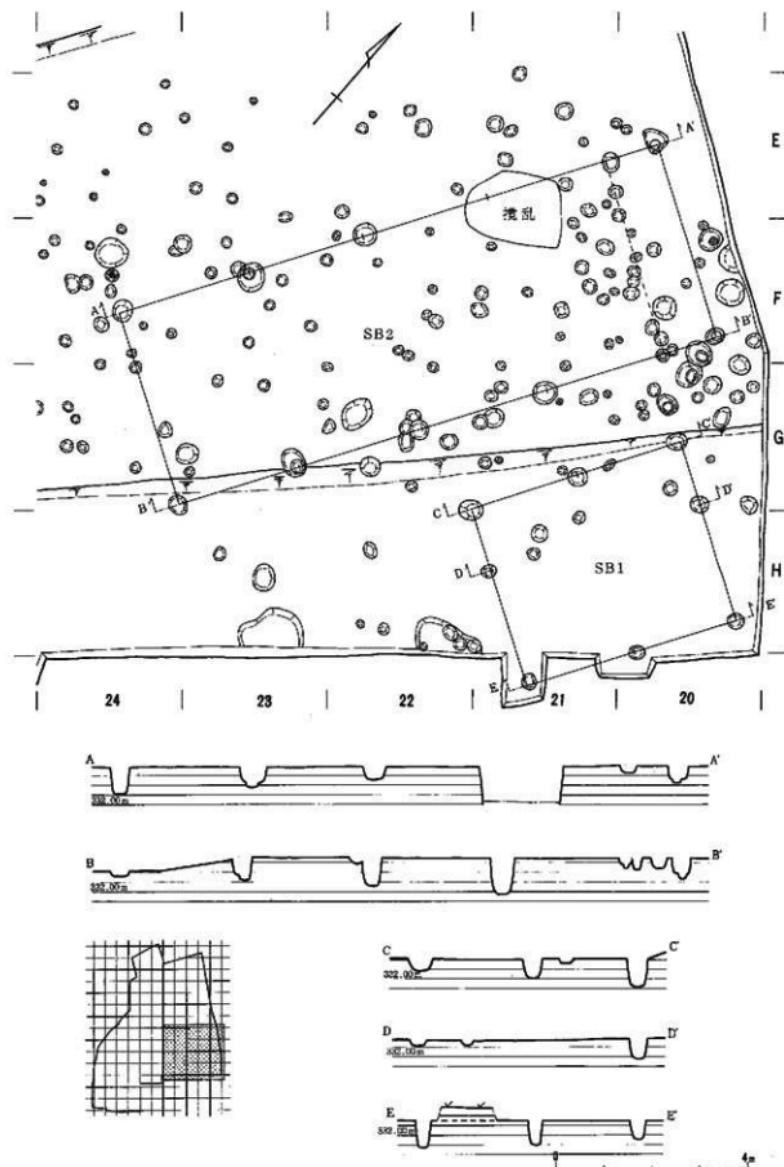
24・25D区に位置し、SK4を切る。198×180cmの不定形な隅丸方形プランを呈す。断面はすり鉢状を呈し、扁平な大石は地表面に入っている。壇内には人頭大の礫から小礫まで多く含まれているが、比較的遺存率の高い塊を中心に遺物が出土している。平安期。

SK6 (祭祀遺構) (第14図)

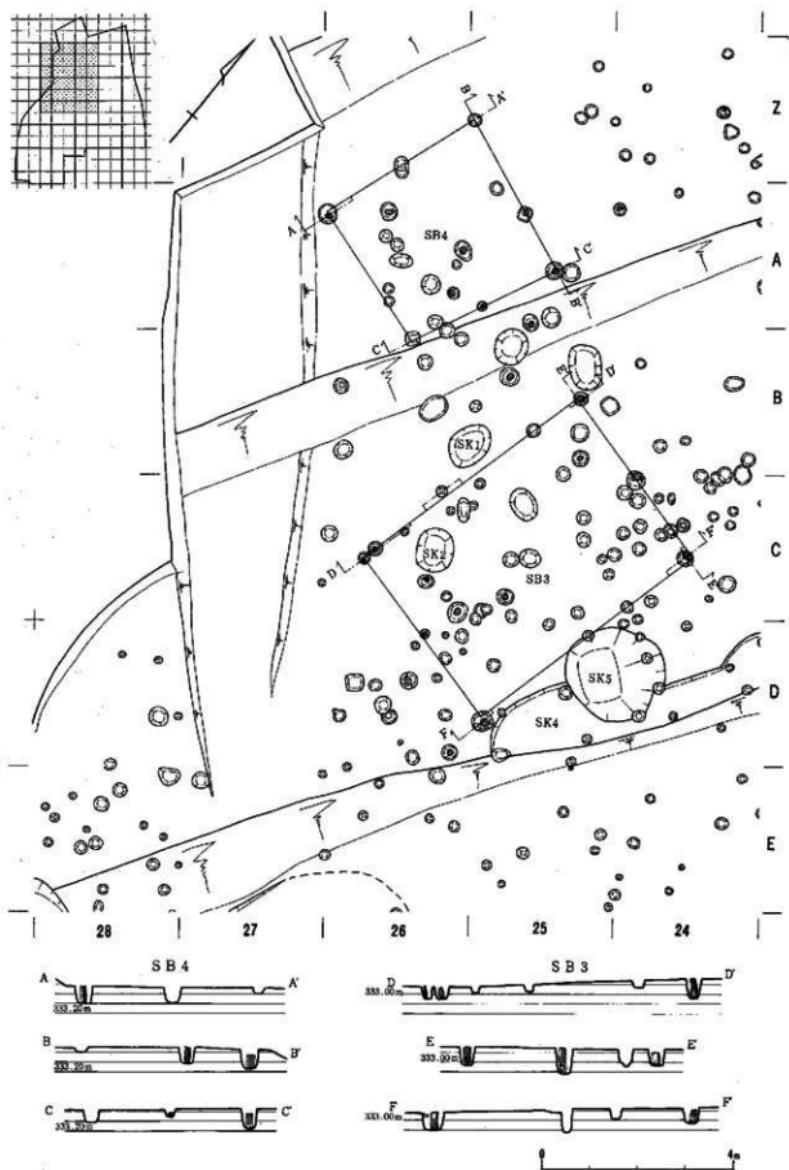
26・28F・D区に位置する。水田区画の端部にかろうじて残っていたもので、西側は比高差2mで上位水田、南東側は比高差1mで下位水田となっていた。プランは500×400cmの楕円形プランを呈するものと思われる。西側は直線的な形態を示し、および南側は比較的立ち上がりが明確である。東・北側は削平されたためかプランは明確でな



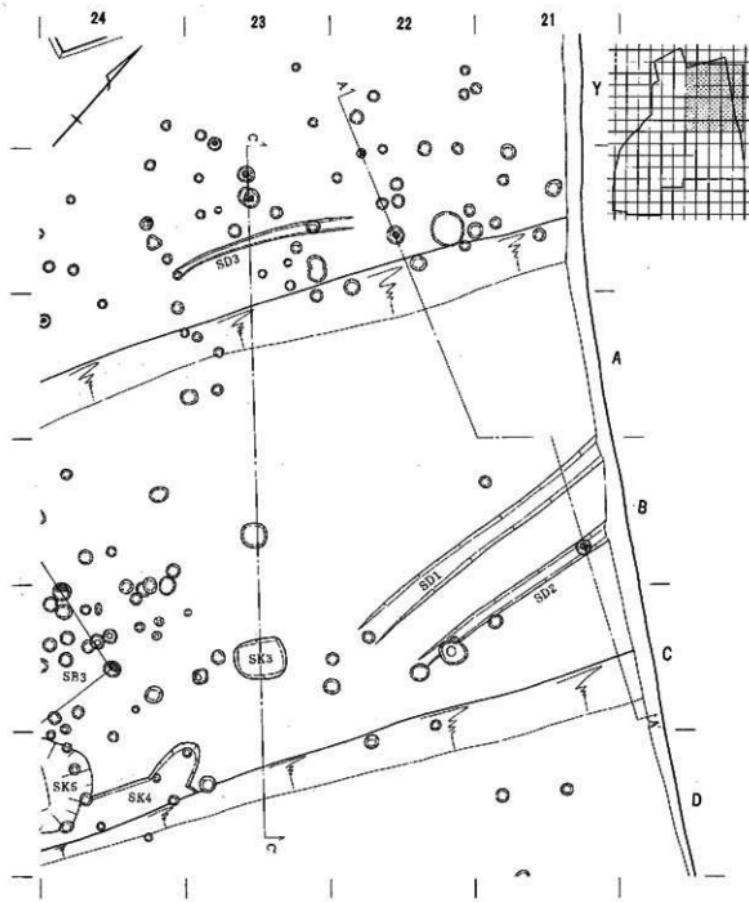
第9図 遺構実測図1 (1:100)



第10図 遺構実測図 2 (1 : 100)

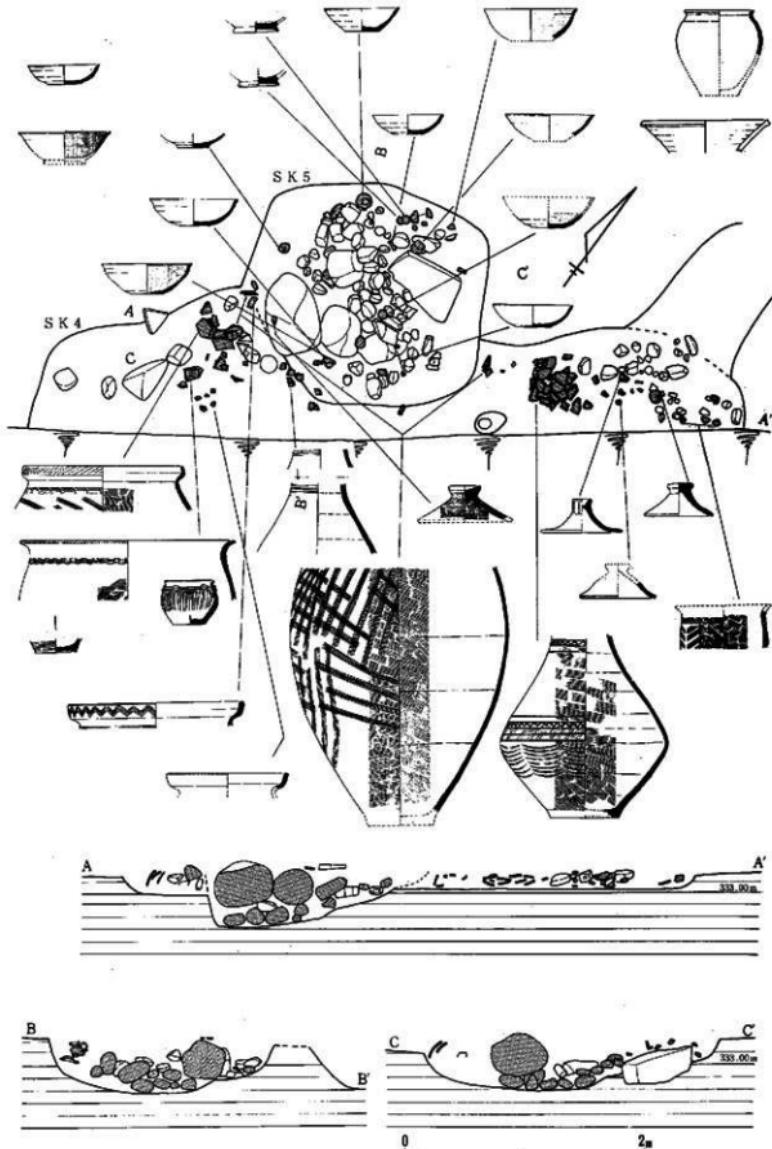


第11図 遺構実測図 3 (1 : 100)

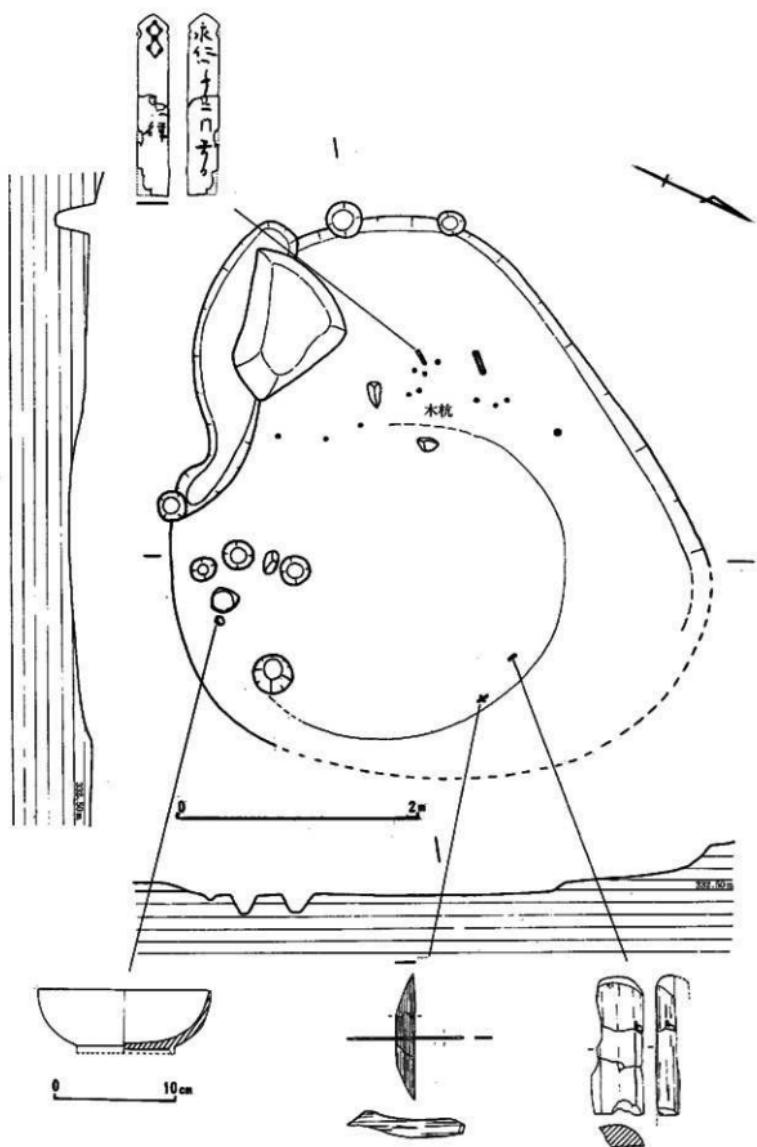


第12図 遺構実測図4 (1:100)

0 4

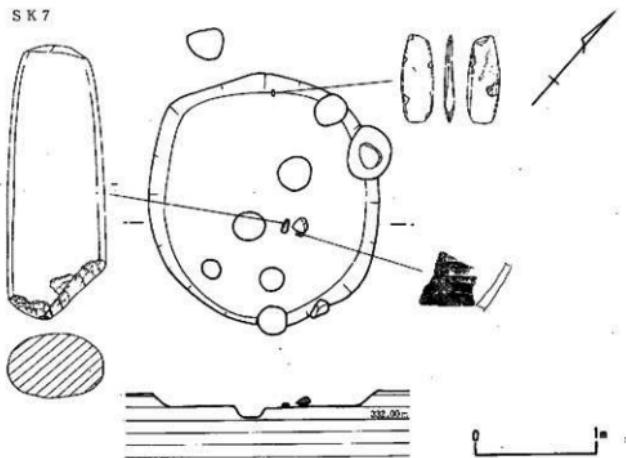


第13図 SK 4・5遺構 遺物分布図 (1:40)

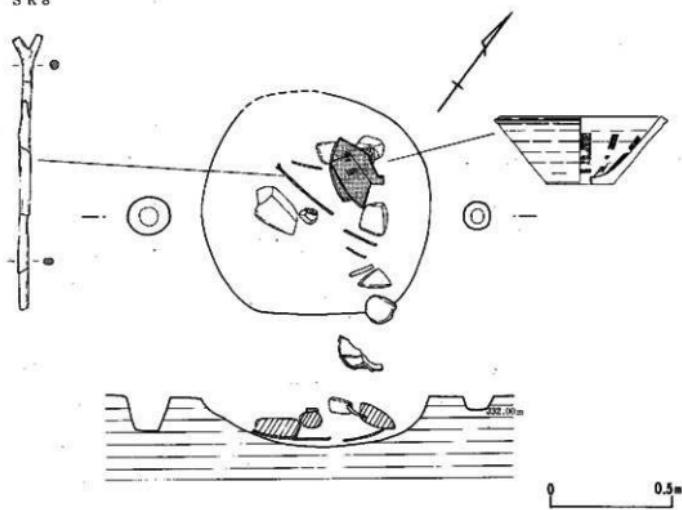


第14図 SK 6 (祭紀遺構) 遺物分布図 (1 : 40)

SK 7



SK 8



第15図 SK 7・8 造構・遺物分布図 (1:40)・(1:20)

い。なお、南側の大石は地山面に入っており、搬入されたものではない。柱穴は7ヶ所認められるものの、不規則な配列である。遺物は南側に況木簡が頭部を壇内に向けてほぼ水平に出土。木簡上位の面は「永仁4年□月□日」である。木簡の壇内側（東）は枕が12本以上壇底に打ち込まれている。東壁側には鳥形および製品名不明の木製品が壇底に接して出土。南側には幼児頭大の扁平な礎に接して漆碗が出土している。また、梅と思われる様子が壇内全域から出土している。壇底は軟弱である。

S K 7 (第15図)

28・29H区に位置する。200×190cmのほぼ円形なプランを呈す。深さは約15cmで壇底は平坦である。出土遺物は覆土より繩文後期上器・小形磨製石斧が、壇底より大型蛤刃石斧・珠洲系陶器が壇底より出土したため中世以降と考えておきたい。

S K 8 (第15図)

28I区に位置する。188×180cmの円形プランを呈し、深さ45cmを測る。断面はすり鉢状を呈す。壇底には薄く砂が敷いてあった。

遺物は上位より珠洲系陶器のすり鉢が、壇底より木製品が少量出土した。

S K 9 (第9図)

29I区に位置する。104×90cmの不正方形を呈す。一部暗渠によって破壊されているが深さ約35cmを測る。壇底にはビットが2ヶ所近接して埋り込まれているが、中より柱状の木片がわずかに出土した。遺物は木片の他珠洲系陶器片が出土している。

第3節 その他の遺構

掘立柱建物・土壙の他、溝状遺構などが検出されている。また他にも多くの遺構があるが整理されていないのでここでは省略する。

S D 1 (第12図)

22・21B・C区に位置する。幅約48cm、深さ25cmで、長さは調査区外へ延びているため不明であるが6m確認している。

本遺構より元祐通寶が1枚出土している。

S D 2 (第12図)

22・21B・C区にあり、SD1の東側90cmにほぼ平行して延びる。深さは5~15cmである。底面および壁を切って4ヶ所のビットが認められる。このうち壇中央のP27内より芯持ちの丸太材が出土している。

その他の遺物では青磁碗片（第23図4）が出土している。

S D 3 (第12図)

23・24J区にあり、長さ3.8mまで確認できる。幅20cm、深さ8cmで、ビットが2ヶ所埋り込まれている。付近より弥生中期土器破片が出土している。

第IV章 遺 物

はじめに

調査によって出土した遺物には、縄文時代・弥生時代・平安時代・中世の各期に属する遺物が出土した。量的に最も多いのは縄文式土器であるが、遺構等は破壊されて大部分は不明となっており旧谷状地と思われる黒色土の包含層よりまとめて出土したもののが中心である。弥生時代に属する遺物もSK4以外は旧谷状地の出土であり、遺構はほとんど削減している。平安時代遺物も同様で、SK5以外は谷状地の出土。

中世の遺物は比較的遺構に伴っており、生活址の中心部分よりの出土と思われる。

以下に各時代毎にその概要を説明する。

第1節 縄文時代

遺物収納箱で10箱程度出土した。本稿では時間的制約から未整理となっており、一部の土器・石器について説明しておきたい。(第16~19図)。

1. 土 器 (第16~17図)

(1) 称名寺様式 (第16図1~20)

本遺跡から得られた称名寺様式に比定される土器群はいずれも小破片であり、その文様モチーフの全体を知ることのできるものはない。

口縁部が波状口縁を呈し、微隆起文と円形の列点文に画された棒状の口縁部文様帯を持ち、その下部より「J」字状文の反転により、「J」字状文内に縄文が施文される類が多い。

1は、口縁部から腹部に至る部分で、波状口縁を呈し、胴部がくびれ下半が張る深鉢形の器形となるものと思われる。口縁部は無文帶となり、その下に微隆起文に画された列点文が配される。さらにその下位は「J」字状文の反転により「J」字状文内に縄文が施文される。

2、3は1と同一個体と思われ、口縁部が無文帶!微隆起文に画された円形列点文で、その下位には沈線によって画された縄文施文が行われている。本個体は治土・焼成ともに良好・堅敏である。

4~6・8・9は同一個体と考えられ、1~3と同様な文様モチーフを構成すると思われる。

10~20は腹部破片で、称名寺様式独特の様々な文様モチーフが施文される。

(2) 三十種葉様式 (第16図21~33・第17図34~36)

新潟県長岡市関原町三十種葉遺跡出土土器を模式としている。

本遺跡出土例は、各種刺突文が施文される。21は口縁部で無文帶の下位に瓜形文が施される。22は小橋状把手を付し口縁部は無文である。その下位には花弁状の刺突文が配される。23は頭部に隆帯をめぐらし肩目が施される。24は同様に頭部に隆帯をめぐらし列点が施される。25~33は各種瓜形文が施される腹部破片である。

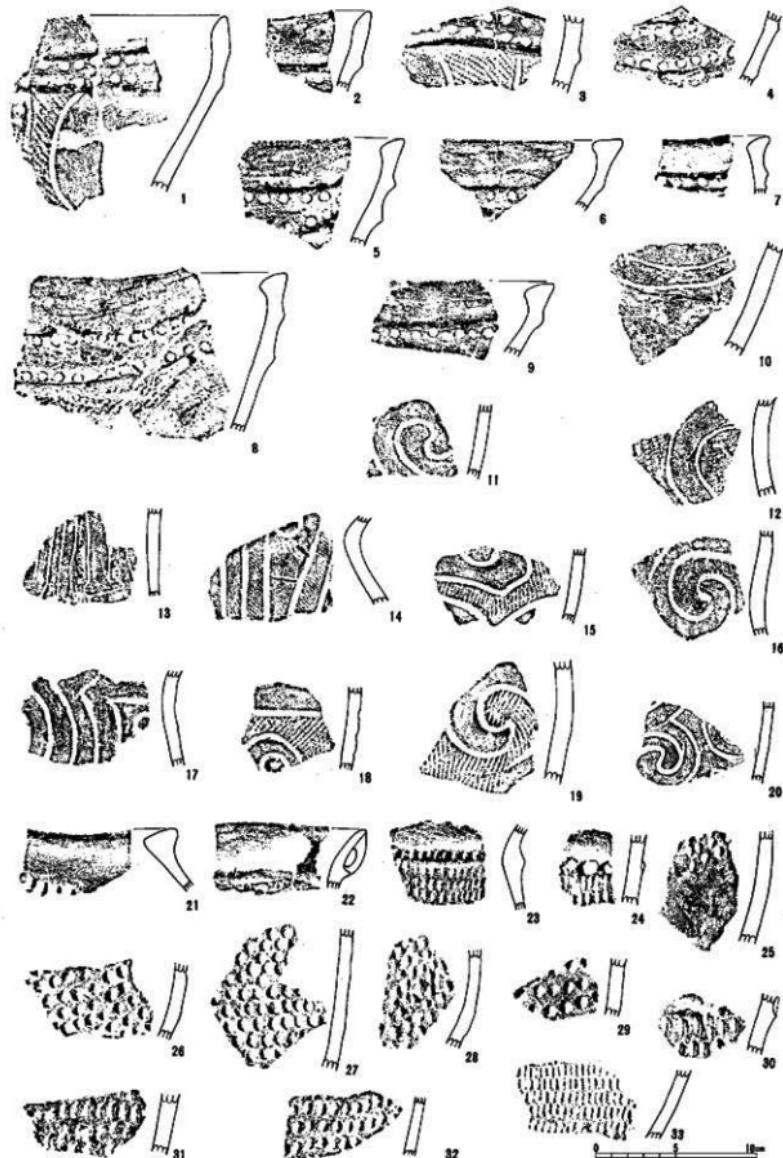
第17図34~36は頭部に曲線の条痕文を施す例で、後期中葉の三仏生様式に入る可能性もある。胎土焼成は悪い。

(3) 番ノ内様式 (第17図37~40)

数個的には多く出土している。

いずれも口縁部分で、「八字状」「C字状」の文様を施す例(37~39)で、焼成は悪い。40は太い沈線で口縁部文様帯を構成している。

本調査によって得られた資料は、数量的にも多く北信濃北半地域における後期初頭~前葉における良好な資料を提供している。本報告では時間的制約から一部を公表したにすぎなく、今後さらに整理を行い報告したいと考えて



第16圖 楊文化土器拓影圖1 (1:3)



第17図 繩文土器拓影図2 (1:3)

いる。

2. 石 器 (第18・19図 図版十四・十五)

調査によって検出された石器は、打製石斧・磨製石斧・石皿・砥石等であり種類は比較的少ない。また本稿では便宜上縄文時代の項へ一括して報告するが、すべて当該時期に属するものでなく、弥生時代以降に属する石器も存在している。これは遺構外遺物が後世の構築あるいは田直しなどによって各時期が混在して出土したため、明確に所属時期を決定し得ないという理由による。

(1) 打製石斧 (第18図)

多くは安山岩系の剥片を素材として作成している。1は分離形に似た形態を示し、第1次剥離面も丁寧に二次加工を施している。2・3は縦長剥片にほとんど二次加工を施さず、刃部を簡単に作出して仕上げている。4~7は刃部の部分が半磨製になっている。使用によるものと思われる。5が弥生時代の遺構 (SK4) より出土しているので、この類は弥生時代の所産と考え良いのかもしれない。9~11は小形品であるが、打製石斧の範囲に入るものと思われる。形態からすれば縄文時代の所産と考えられる。

(2) 打製石器 (第19図12~14)

剥片が多く出土しているが、特徴的なもののみ3点図示した。12は刀器状の剥片であるが、先土器時代の石器とは考えにくい。13は横長の剥片で鋭利な刃部を持つ。14は縦長剥片である。これらの不定形な剥片石器は板山地方においては弥生中期の遺跡より出土することが多い。これは、縄文的石器製作技術のシステムが崩れ、画一的な石器製作が行われなくなった現象として理解したい。

(3) 磨製石斧 (第19図15~19)

15は弥生中期の大形蛤刃石斧で、SK7の底より珠洲系陶器片とともに出土したものである。中世に至って別の用途として再利用されたのであろうか。刃部が破損している。16は28H区出土で、大形蛤刃石斧の頭部である。17は29H区出土。18は長さ4.3cmの小形扁平片刀石斧である。小さいながら実に精巧にできており、研磨もゆきとどいている。弥生中期の所産であろう。27H区出土。19はSK7上層よりの出土である。一部に剥落部分があるものの丁寧な作りである。現存長7cm。縄文後期の所産であろう。

(4) くぼみ石 (第19図20)

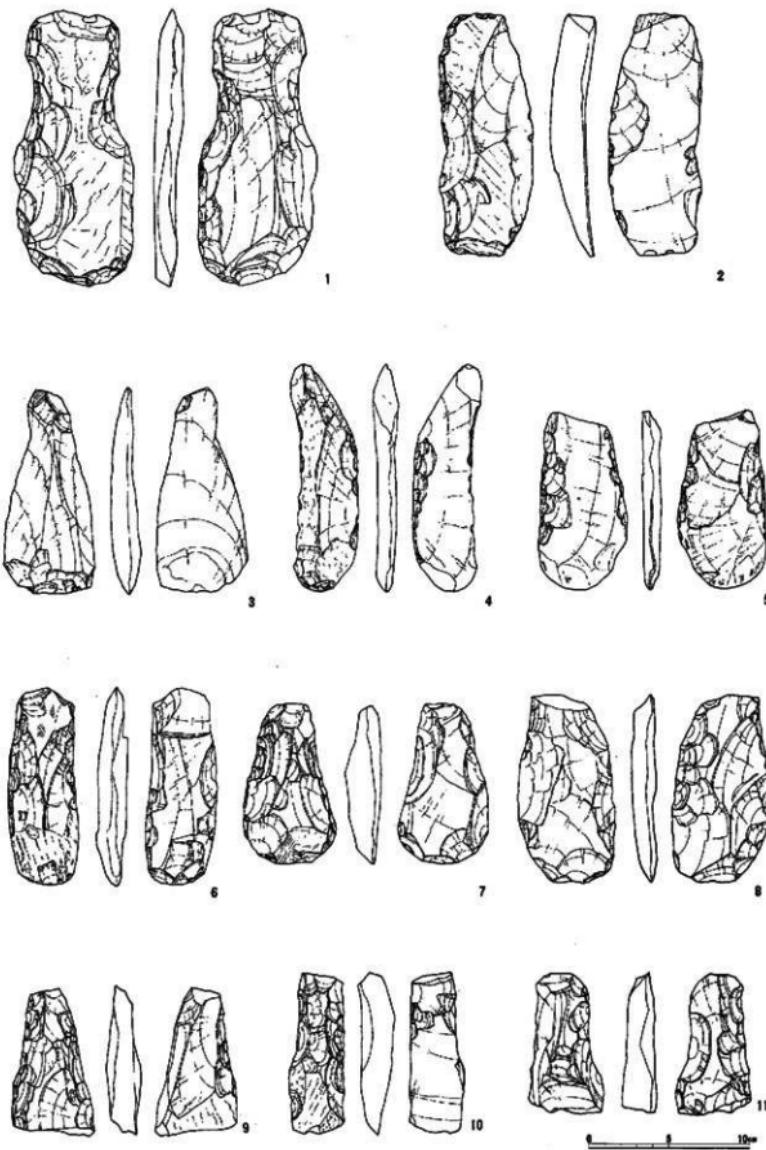
たまご形の一面に浅い凹を有するもので、くぼみ石としてよいのか躊躇する。

(5) 石皿 (第19図21)

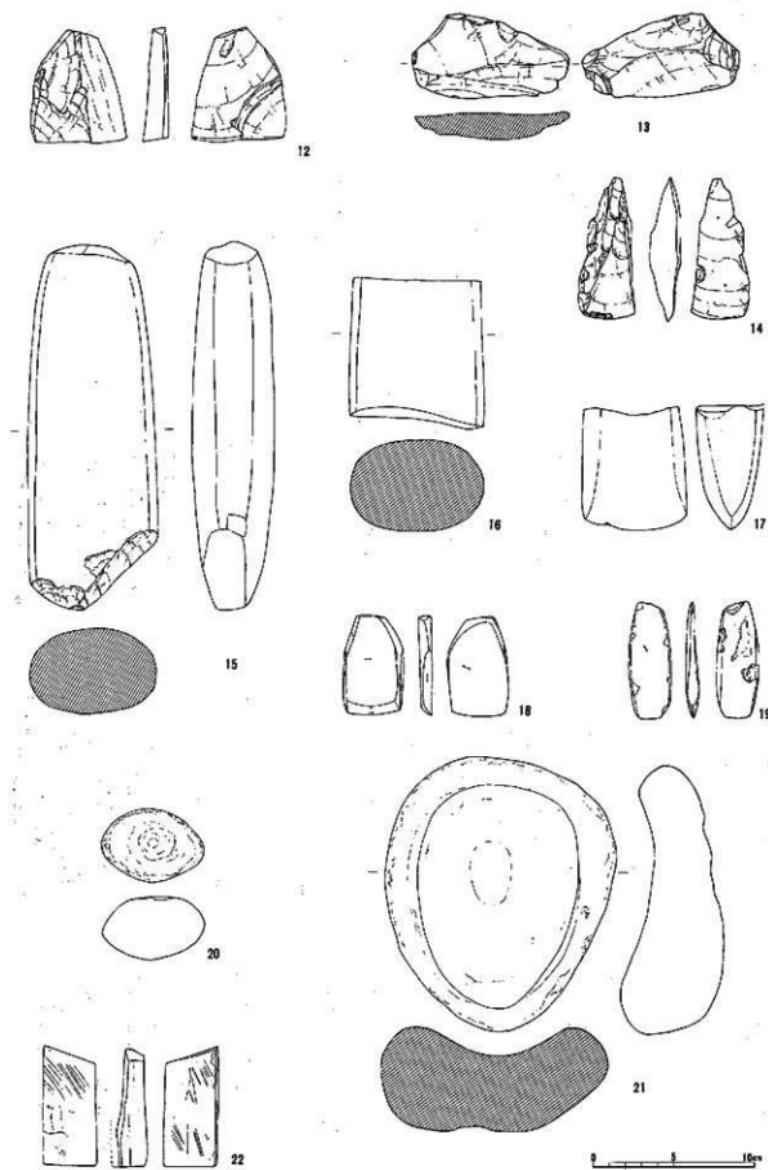
P25区内の出土で丸のおさえとして転用されたものと考えられる。裏面にも若干のくぼみが数ヶ所あり、石皿・蜂の巣石の二用途に用いられたものであろう。縄文期。

(6) 砥石 (第19図22)

表裏面に線条痕が認められる。仕上砥であろう。平安時代以降と思われる。



第18図 石器実測図1 (1:3)



第19圖 石器實測圖2 (1:8)

第2節 弥生時代

1. 土器（第20・21図、図版十五・十六）

弥生土器は、SK4からまとまって出土したほかに、調査地区内含層（黒色土層）より小破片が少量（コンテナ1箱）出土している。

(1) SK4出土弥生土器（第20図）

SK4は弥生時代の土器であり、平安時代の土壌SK5に切られているが、SK5から出土した弥生土器（11-16）もここに含めておいた。また、SK5の底から石鐵が1点出土しているが、土器洗浄の段階で粉失している。SK4出土弥生土器は、図化できるものはすべて図化し、図示した。

壺（1～3） 1は口縁部をのぞいてほぼ定形である。下ぶくれの腹部から長く立ちあがる頸部をもつ。頸部にヘラ描直線文を数条（残っているのは3条）めぐらせ、その間に鋸歯文を入れる。腹部中央には縦文を施した後に直線文を5条めぐらせ、上から2段目に鋸歯文を入れる。腹部中央下半には弧状文を8～9本重ねたものを12単位めぐらす。調整は円外面ともにハケ。灰白色を呈し、胎土は砂を含まない。腹中央の相対する2ヶ所に黒斑がある。現存高30.0cm。

2・3は頸部片で、いずれもヘラ描直線文をめぐらし、3は縦文を施す。2・3ともに内外面とも磨滅がはげしく調整不明。2は灰白色を呈し、黒斑があり、胎土に砂を多く含む。3は淡褐色を呈し。

ミニチュア甕（4） ミニチュア甕4は完形品でSK4肩部より出土した。腹部下半に1ヶ所故意に穴をあけたと思われる（Killing）所がある。腹部に「コ」の字重ね文を6単位めぐらし、その間に円形浮文を配する。「コ」の字重ね文は几帳面でなくかなり難に描かれている。調整は内外面ともにナデ。暗灰色を呈し、胎土に砂を含む。口径8.2cm、高さ7.2cm。

壺（5～10・15・16） 壺は口縁部の形態から、単純に外反するもの（5）と、屈曲して受け口状をなすもの（6・8・9）とがある。屈曲して受け口状をなすものは前の口縁部とも考えたが、文様・口絆・および6と7が同一個体かもしれないという点から甕としておいた。

5は大型の甕で、口縁端面に縦文をめぐらし、頸部に横描波状文をめぐらす。内外面とも磨滅がはげしい。外面はハケ、明るい淡橙色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径35.6cm。

6も大型の甕の口縁部で、7と同一個体の可能性がある。口縁外面に縦文を施し、頸部に横描葉状文をめぐらし、頸部に横描平行線文を斜位に施す。調整は、内面はハケ、外面は不明。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径26.2cm。

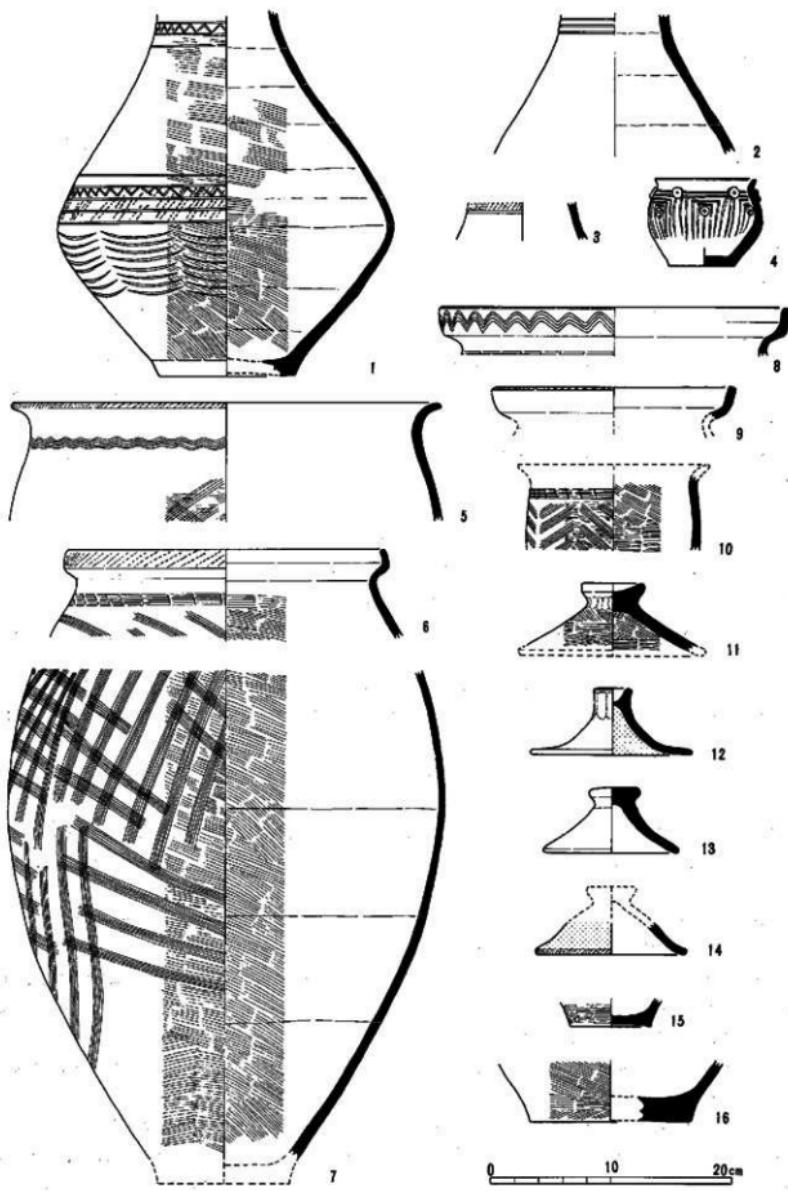
7は大型の甕部で、約1/4周が残っている。腹部外面に横描平行線文を斜格子状に施す。調整は内外面ともハケ。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。現存高40.0cm。

8・9は受け口状の口縁部をもつもので、ともに口縁端面に縦文をめぐらす。8は口縁部外面に横描波状文をめぐらし、頸部に横描葉状文を施す。調整は内外面とも横ナデ。茶褐色を呈し、胎土に砂を含む。口径29.0cm。9は調整は円外面とも横ナデ。淡褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。口径20.0cm。

10は小型の甕で、頸部に横描葉状文を施し、腹部に横描平行線文を交互の斜位でめぐらす。調整は内外面ともにハケ。淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

15・16は甕の底部で、いずれも調整は、外面はハケ、内面は不明。淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

蓋（11～14） 蓋は4点あり、11・13はほぼ完形品で、12は残20%、14は口縁部小片である。調整は、11が内外面ともハケ、12はナデあるいはミガキ、13は磨滅がはげしく不明、14はナデあるいはミガキ。いずれも淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。



第20図 SK 4 出土弥生式土器 (1:4)

なお、12の内面と、14の外面は赤彩の痕跡がある。また14は口縁端面に網文をめぐらす。

(2) 包含層出土弦生土器（第21図）

包含層からは、主として調査区南部の黒色土層が厚い所から散在的に出土している。小破片が多いが、断面等の磨滅の著しいものはない。

壺（17～21・37・38） 図示した17～21はいずれも頭部片だが、他に、胴部片で網文を地文としてその上にヘラ描直線文や孤状文・波状文をめぐらせたものも出土している。

17・18はいずれも頸部に網文を地文としてその上にヘラ描直線文をめぐらしている。調整は、17は内外面ともにナデで、18は外面にハケを施す。17は淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。18は灰白色を呈し、胎土に砂を含む。

19・20は太いヘラ描直線文をめぐらすもので、19はその間にヘラ刺突文を配する。20は網文を地文とする。いずれも淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

21は赤彩の壺で、外面をていねいにミガいている。淡褐色を呈し、胎土に砂を多く含む。

壺（22～29・32～36） 壺は図示したものの他に、胴部外面に横描平行線文を斜格子状に施したものなどの破片がある。

壺は口縁部の形態から、単純に外反するもの（22～27）と、肩曲して受け口状になるもの（29）があり、前者はさらに外反するもの（22～26）と、やや内湾するもの（27）がある。

文様は、27をのぞいて他はすべて口縁端面に網文をめぐらす。口縁部が肩曲して受け口状をなす29は、外面に網文を地文とし、その上にヘラ描山形重ね文をめぐらす。頭部には、横描波状文をめぐらすもの（22）、構描藤状文をめぐらすもの（25）と、無文のもの（23・24・26・27）がある。底部は不連続な横描波状文（中部高地型波状文）を施すもの（25）と、「コ」の字重ね文を施すもの（27・28）がある。

調整は、ナデおよびハケで、口縁部は内外面とも横ナデするものが多い。

底部は赤彩のないものを一応壺としておいた（32～36）。

色調は淡褐色～茶褐色を呈し、胎土は砂を含む。

壺（30・31） 30は薄手で、つまみ中央がへこむ蓋で、調整は内外面ともにハケ、淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。口径13.2cm。

31は、内外面ともにていねいなミガキを施された蓋で、暗灰色を呈し、胎土に砂を含む。口径14.2cm。

なお、蓋のつまみは、図示していないものを含めて、中央がへこむものがほとんどである。

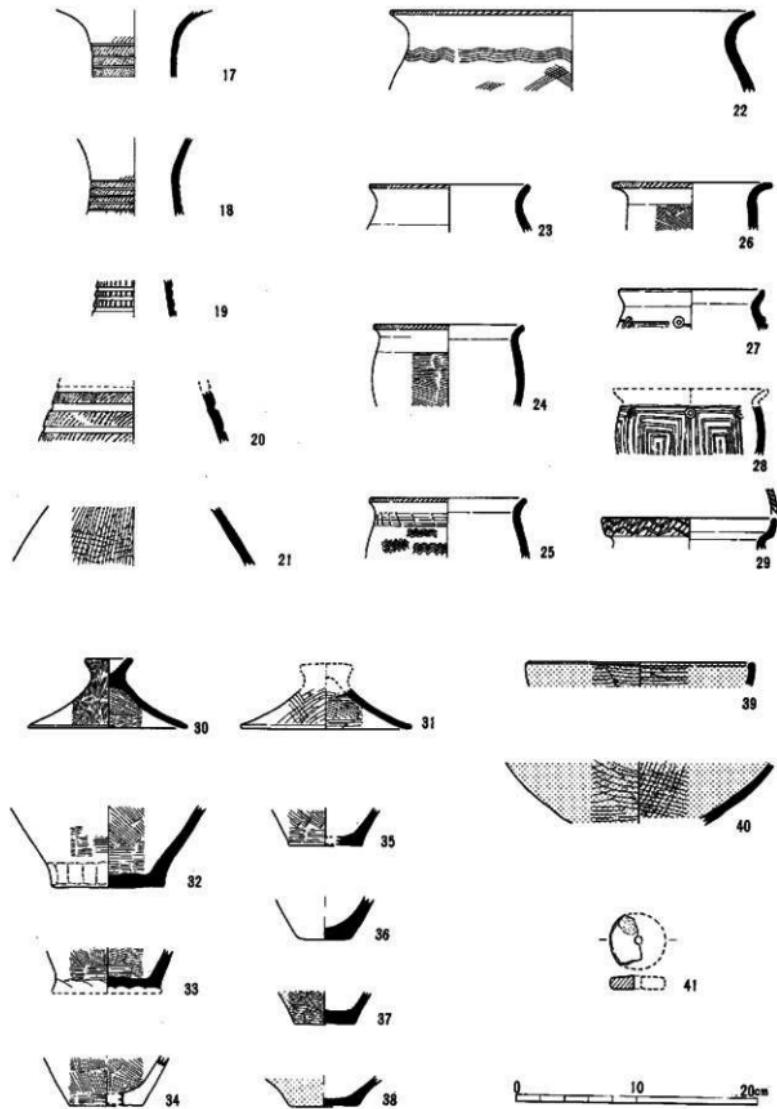
鉢・高杯（39・40） 出土したもので鉢か高杯か明瞭にわかる破片はない。39は口縁部小片、40は体部片である。両者ともに、内外面ともていねいなミガキが施され、赤色塗彩されている。39・40ともに淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。

訪鑑車（41） 弥生時代のものとは確定できないが、一応ここに載せておいた。41の1点のみである。円形・肩半の形態のもので、淡褐色を呈し、胎土に砂を含む。推定直径4.5cm。

2. 小 拙 ——出土土器の年代—

(1) 千曲川流域および飯山地方の弥生土器編年の概要

松本平を含む千曲川流域の弥生時代中期から後期の上器編年は、佐沢浩氏によって、新諏訪町III（荒山）→栗林I→栗林II→百瀬→吉田→箱清水→御置敷の編年案が示されている。（表2参照）。また飯山地方の弥生時代の土器編年も、佐沢編年に基づいて、高橋祐・大田文雄両氏によって、小境→鍛冶田D地点→鍛冶田C地点→田草川尻I→田草川尻IIの編年案が示されている。そして両編年の対応は表2に示したとおりであるが、両編年は年代的流れにおいて概ね対応しているものの、極めて画一性の強い箱清水式と田草川尻II式がよく対応するのをのぞけば、他はたとえば栗林II式土器がイコール鍛冶田D地点の土器ではなく、両者の間には形態的・技法的（文様）な面などに



第21図 包含層出土弥生式土器 (1:4)

おいて細かな違いがあり、若干の地域差・年代差があることを若沢・高橋・太田三氏ともに指摘されている。

今、この編年を大づかみにみてみると、中期後半は、中野市栗林遺跡出土土器を指標とする栗林式土器を編年の核とし、その特徴は①壺の形態が下ぶくれ長頸である、②壺におけるヘラなし棒状工具による沈線文（直線文・山形文・波状文・懸垂文など）の盛行、③文様帶の地文として、また口縁端部への繩文の施文、④口縁端部の指オサエの存在、⑤腹口縁部は短く外反し、体部最大径が上位にある、⑥「コ」字重ね文の存在、などがあげられる。

また、後期は、長野市猪清水遺跡出土土器を指標とする猪清水式土器を編年の核としており、その特徴は、①形態・技法とも画一化されていること、②壺は大きく朝顔状に聞く口縁部をもち、頭部に横幅T字文を施す、③高杯・鉢の盛行、④赤色塗彩の盛行、⑤壺における不連続な横描波状文（中部高地型横描波状文）（中部高地型横描文）の盛行、などがあげられる。

そしてこの両型式を中期・後期の核としてそれ自体の細分や、両者の間のギャップをうめる形で、中間型式が設定されている。その中間型式は、栗林式のもつ要素（中期的要素）と猪清水式のもつ要素（後期的要素）の多寡によって前後が設定されている。

また、汎日本的な併行関係は、畿内・本海・天流川流域そして関東地方のそれぞれの型式との比較によって推定されている。

飯山地方の編年は、鍛冶田遺跡においてD地区遺物集中箇所の土器群を一括資料として捉え、C地区1号竪穴・2号竪穴の資料と比較・検討して先の編年観が推定され、田草川尻遺跡1・2号住居址出土土器と3号住居址出土土器がそれぞれ田草川尻IとIIに比定され、先の編年観が推定されている。そして両遺跡の中では鍛冶田D→鍛冶田Cへの移行はスムーズであり、田草川尻I→IIへの移行もスムーズであるが、鍛冶田Cから田草川尻Iへの移行については若干のギャップがあるようと思える。今後の資料の増加・研究を待ちたい。

(2) 埋没遺跡出土土器の年代

当遺跡SK4および包含層出土土器の特徴を列記すれば、①下ぶくれ長頸の壺の形態、②ヘラ描沈線文の盛行③地文・口縁端部への繩文の施文、④指オサエによる波状口縁が壺・腹とともにみられない、⑤「コ」字重ね文の存在、⑥腹口縁部が短く外反する、⑦中部高地型横描文の存在（1点）、⑧赤色塗彩の土器の存在があげられる。

以上の特徴のうち①～⑥は中期的要素であり、⑦・⑧は後期的要素であるが、後期的要素はごく少なく、また⑥・⑦ともに栗林II式には出現している。④の指オサエは鍛冶田D地点には認められる。

以上の点から当遺跡出土土器は、栗林II式・鍛冶田D地点（中期後葉）の年代が与えられ、④の点で鍛冶田D地点よりやや新しい要素をもつ土器群といえる。

なお、当土器群は、栗林式にみられる懸垂文がないこと、ヘラ描沈線文が概して細いことが指摘できる。懸垂文は栗林II式に比定される鍛冶田D地点・北原遺跡でもみられない。地域的特色であろうか。

第2表 銀山地方の弥生土器編年表

| | 畿内 | 千曲川流域 | 銀山地方 |
|----|--------------|-----------------------|-----------------------|
| 前期 | 第1様式新 | (新諏訪町I) | |
| 中期 | 第2様式(新諏訪町II) | | |
| | 古 第3様式 | 新源訪町III(荒山) | |
| | 新 第4様式 | 栗林I 采林II | 小境 鍛冶田D地点 |
| 後期 | 第5様式 | 百瀬 吉正 精清 賀厘敷 | 田草川尻I 田草川尻II 柳町 |
| | ? | | |

注1 文獻 134号23ページ表1 および注2 文獻より作成

- 注1 無沢浩 1977「入門講座・弥生土器—中部高地1~3」『考古学ジャーナル』131・133・134
- 注2 銀山古教育委員会 1980「長野県銀山市旭町遺跡群—鍛冶田」
- 注3 銀山市教育委員会 1978「長野県銀山市田草川尻遺跡II」
- 注4 銀山市教育委員会 1985「長野県銀山市旭町遺跡群—北原遺跡IV」

第3節 平安時代

1. 土器

平安時代の土器は主にSK5から出土し、他は包含層から少量が散在的に出土している。

(1) SK5出土土器 (第22図1~15、図版十七)

SK5からは土師器碗・甕・須恵器口縁部が出土している。

土師器碗 (1~13) 瓢は約30点程あるがすべてロクロ成形されるものである。内面が黒色処理される所謂黒色土器 (1~4・12) と、そうでないもの (7~11・13) があり、黒色処理されないものが多い。

形態的には、高台をもつものは図示した2点 (12・13) のみで、他はすべて高台をもたないものである。高台をもたないものは、底部をやや突出させるものを含んでいる。なお、1・5・6は口縁が正円をなさないびつな。

また、体部が内湾し口縁部がやや外反するものが一般的であるが、体部が直線的に立ちあがるもの (7) もある。

法量は、口径14.4~15.0cm、高さ4.5~5cmの大形品 (1~5・9) と、口径11.0~13.0cm、高さ3.0~4.0cmの小型品 (6~8・10) があり、大型品は内面黒色処理されるものが目立つ。底径は大型が大きく小型品が小さいというわけではなく、全体として4.8~5.8cmである。

成形・調整手法は、底部はすべてロクロ糸切り技法をそのまま残し、ヘラケズリ等は加えられていない。黒色処理されるものはロクロナデの後、内面にヘラミガキを施す。黒色処理のなされないものも、内面にヘラミガキを施したもの (9・13) が若干ある。

高台は外にふんばる短いもので、ロクロ糸切りのあとに貼り付けられる。

色調は、明るい褐色を呈するものが多い。焼成は概してよく、表面が磨滅しているものが多いが、陶器のように堅く焼きしまっているものも数点ある。胎土は、茶褐色の軟粒を含み、細砂を多く含んでいる。

土師器・甕 (14) 1点のみ出土。短く屈曲する口縁部をもつ小型の甕で、ロクロ成形されている。茶褐色を呈し、胎土に茶軟粒および砂を含む。また、外面に多量の煤が付着している。口径11.2cm。

須恵器・甕 (15) 1点のみ出土。広口甕の口縁部と推定される。頸部が直線的に立ちあがり、口縁端部を肥厚させ、端面をつくる。内外面ともロクロナデが施され、内面に灰色を呈し、胎土に砂を含む。

(2) 包含層出土土器 (第22図16~25、図版十八)

上師器・須恵器・施釉陶器などがある。

土師器・碗 (16~25) 包含層出土の土師器碗もすべてロクロ成形のものである。SK5出土器同様に、内面が黒色処理されるもの (16~19・21) と、黒色処理されないもの (20~25) があり、高台をもつものは少なく、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残し、凝高台状を呈するものが多い。

ただ、SK5出土品に比べて口径・器高ともに小さい傾向があり、口縁が正円をなさないびつなもの (23) や高い高台をもつもの (22) 、体部が直線的に立ちあがる小型の杯状のもの (25) などやや後出的なものが見うけられる。

施釉陶器 いずれも小片のため図示していないが、尾北窯産の可能性がある綠釉陶器碗口縁片2片、猿投窯黒笠14~90号窯式の灰釉陶器碗1片、同瓶4片、東濃大原2号窯式の灰釉陶器碗2片が出土している。^(注1)

2. 小括 一出土土器の年代

飯山地方の平安時代の土器編年 飯山地方の平安時代の土器の編年作業はまだ途についたばかりであり、良好な資料も少なく、わずかに望月・高橋の編年案が示されているにすぎない。^(注2)

望月・高橋は、市内の北原遺跡、鎌治田遺跡A 2号土壙墓・同C 2号土壙墓、長者清水遺跡第1号住居跡の資料をもとに、土に土師器杯形土器の形態・底部調整技法と、共伴する灰陶陶器の年代観から次のように編年されている。

北原（9世紀後半～10世紀前半）→長者清水・鎌治田A（10世紀後半～11世紀代）→鎌治田C（11世紀代以降）

北原遺跡では、土師器杯の体部が内湾するもの（A・B類）が主体的であり、直線的なもの（C類）は極く少量である。内面黒色処理されるものと、されないものとがあり、黒色処理されるものが多い。底部はロクロ糸切りのち手持ちあるいはロクロヘラ削りが施されるものが主体的である。ロクロ糸切りの須恵器杯・須恵器甕・四耳壺が共伴し、須恵器杯は土師器杯と同程度の量がある。

長者清水遺跡第1号住居跡では、土師器杯の体部が内湾し、底部は手持ちヘラ削りされるものが若干あるものの、糸切り痕をそのまま残すものが主体的である。内面黒色処理されるものと、されないものとがあり、黒色処理されるものが多い。土師器甕・須恵器甕・東濃光ヶ丘I期および大原2号窯式の灰陶陶器が共伴する。

鎌治田A 2号土壙墓では、土師器杯完形品4点が出土し、体部は内湾ぎみで、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残すものである。内面黒色処理されるもの3点、されないもの1点である。

鎌治田C 2号土壙墓では、十師器杯完形品5点が出土し、体部は前3者に比べ直線的となり、底部はロクロ糸切り痕をそのまま残し、全体的な作りも机織となる。また、底部がやや突出し、凝高台状を呈すようになる。内面黒色処理されるもの2点、されないもの3点である。

土師器杯の法量は第3表に示したとおりであるが、新しくなるにつれて小さく扁平になる傾向があり、底径も小さくなる傾向がある。

S K 5出土土器の年代 S K 5出土土器の特徴は、①土師器碗はすべてロクロ成形のものである。②土師器碗の形態は、体部が内湾ぎみのものが主体的であるものの、作りが粗雑でいびつなものが多い。③土師器碗の底部調整は行われず、ロクロ糸切り痕をそのまま残すもののみである。④土師器碗の内面が黒色処理されるものと、されないものとがあり、されないものの方が多い。⑤土師器碗の法量は（第3表参照）小型品でみると口径は長者清水第1号住居跡とはほぼ同じだが、器高において、鎌治田C 2号土壙墓例より小さく、扁平な感じがある。⑥高台をもつ土師器碗が2点ある。⑦須恵器甕を共伴する。⑧当遺跡調査地内でまんべんなく出土する珠洲系陶器を含まない。などの諸点があげられる。

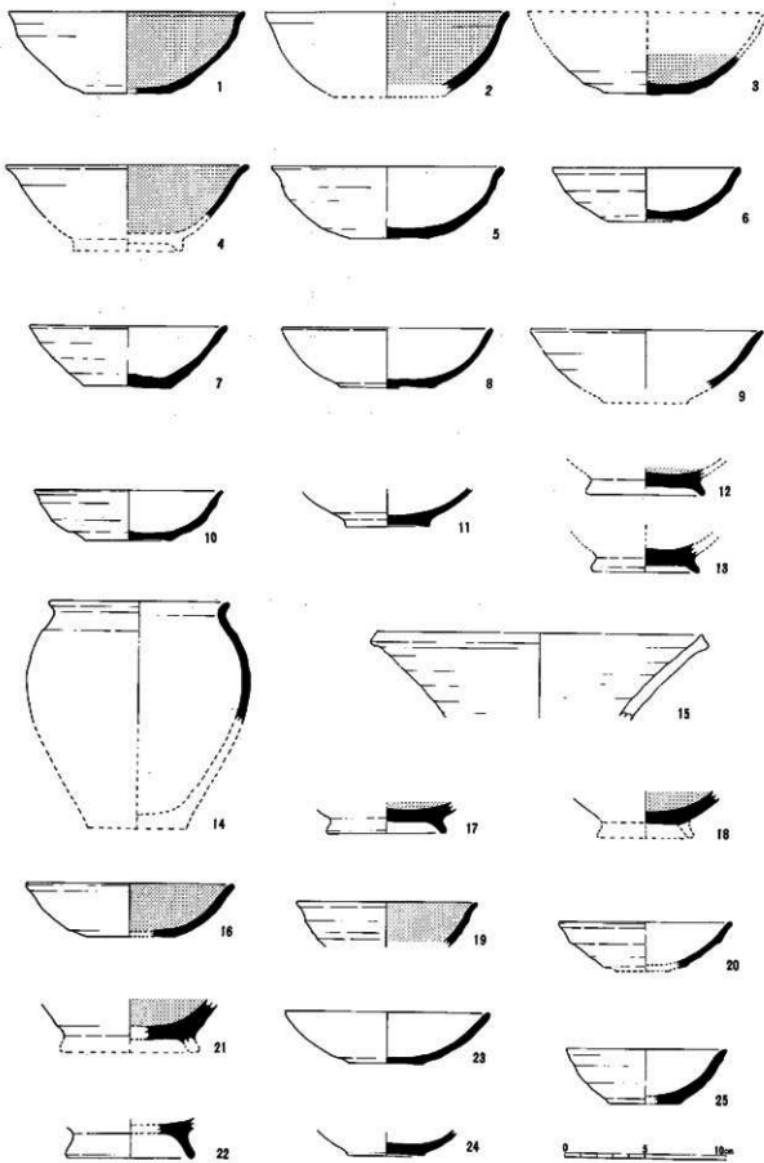
以上の諸点を先の編年観に対応すれば、鎌治田A 2号土壙墓・同C 2号土壙墓出土品の両者の特徴をそなえており、②・④・⑤の特徴はよりC 2号土壙墓例に近い。従ってここでは一応S K 5出土土器の年代を、鎌治田C 2号土壙墓併行期（11世紀代以降）としておく。

いずれにせよ頼山地方の平安期の土器編年は途についたばかりであり、良好な資料にまつところが大きい。

包含層出土土器の年代 包含層出土土器の中には東海産の施釉陶器が含まれており、尾北産と思われる綠釉陶器^(注4)は10～11世紀代に比定されており、灰陶陶器は猿投窯黒釜14～90号窯式と東濃大原2号窯式に比定され、それぞれ10世紀前半、10世紀後半の年代観が与えられている。

土師器碗についてはS K 5出土器と比べると、口径・器高とともに小さく扁平なものが目立ち、また、底部が突出し、底径がいっそう小さくなっている。これらの点はS K 4より後出の要素と考えられるので、11世紀代後半以降12世紀に入る可能性も指摘しておく。

従って包含層出土土器は、10・11世紀代を中心とし、一部12世紀にかかる可能性もあると考えている。



第22図 平安時代の土器 1~15: SK 5, 16~25: 包含層 (1:3) 白ヌキは領惠器

第3表 蔊山地方平安時代土器器杯 法量比較表

| 遺跡 | | 口径 | 器高 | 底径 |
|----------------|----|-------------|-----------|-----------|
| 北原 | A類 | 15.0 以上 | 5.0 以上 | 5.0 ~ 6.8 |
| | B類 | 12.0 ~ 13.5 | 3.0 ~ 4.5 | |
| | C類 | 13.3 | 3.3 | cm |
| 長者清水 第1号住居跡 | 大 | 14.3 | | 5.3 ~ 6.0 |
| | 小 | 11.7 ~ 13.0 | 4.1 ~ 5.1 | |
| 鐵治田A 2号土壙墓 | | 12.5 ~ 13.5 | 3.8 ~ 4.5 | 5.2 ~ 5.8 |
| 鐵治田C 2号土壙墓 | | 12.5 ~ 13.0 | 3.5 ~ 4.0 | 4.5 ~ 5.0 |
| 釜湖SK5 | 大 | 14.4 ~ 15.0 | 4.4 ~ 5.2 | 4.8 ~ 5.8 |
| | 小 | 11.6 ~ 13.0 | 3.1 ~ 3.9 | |

注1 縁ぬ・灰釉陶器については、愛知県陶磁資料館浅田員由・仲野泰裕氏、名古屋市見晴台考古資料館平出紀男氏に鑑定していただいた。

注2 望月静雄・高橋桂 1985 「平安時代の土器編年について」『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅱ』飯山市教育委員会

注3 当遺跡で碗としているものと同じ。杯と碗の名称は報告者によって異なり、両者を区別する確たる根拠はない。ここでは報告に従って杯としておく。

注4 注1と同じ。

注5 桜崎彰・齊藤孝正 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』愛知県教育委員会

第4節 中世

中世の遺物は本遺跡の主体をなすものと考えられるが遺物量はさほど多くない。遺物には陶磁器・木製品・錢貨がある。土師器については中世土師器と頭初考えた塊があるが、検討の結果這構外出土土師器塊は、中世の上部器として他の陶磁器類と同年代に位置づけられる貴重的な証拠ではなく、むしろ平安期SK5出土品例により近いと判断した。したがって、本遺跡出土土器・陶磁器類の中には中世土師器と認定される土器は含まれていない。

また木製品については、多くの製品が中世陶磁器等と伴出し、近世以降の擾乱を受けていない箇所からの出土品であることにより中世の一括品として把握することができた。以下にそれぞれの遺物について説明を加える。

1. 陶磁器（第23図、図版十八～二十）

(1) 中国陶磁（第23図1～6、図版十八 44）

白磁・青白磁・青磁がある。全体で11点出土しているが、微小破片が多く図示し得たのは5点である。出土状態については、各グリットより散在的に出土したもので、這構に伴うものは少ない。

白磁碗（第23図1） 1点のみである。口縁端が外反する器形を呈すが全形は不明である。器壁は非常に薄い。灰味をおびた白色を呈す。25D区出土。

青白磁碗（第23図2） やはり1点出土している。高台部から体部にかけての破片で、内面底部に沈線様の文様をもつ。外面体部下端から高台部は鋸歯型で、へら削りされる。地軸部分は青みがかった灰白色を呈す。21G区出土。

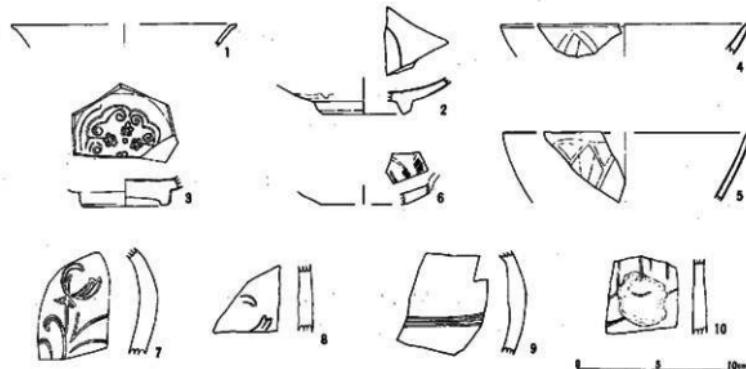
青磁碗（第23図3～5） 3点図示したが、この他にも青磁碗の微小片数点出土している。3は高台部分で、内底に花文が印刷される。4・5は蓮弁文碗で、4は薄緑色の釉調、5は青味が強い青白色を呈している。3は27K、4は21B、5は30J区出土。

青磁皿（第23図6） 1点出土した。細片のため器形は不明であるが、体部に至り屈折する器形をとるものと推定される。底部内面に備描文が配されている。オリーブ色を呈す。22H区出土。

(2) 古瀬戸（第23図7～10、図版十八 45）

点数は多くないが古瀬戸が出土している。図示したほかにおろし皿・花瓶・碗が出土しているが、微小のため図示し得なかった。

瓶子（7～10） 7・8は同一個体ではないが、ともに印花文で、花弁文様が同一である。9は3条1単位の横



第23図 中世の遺物1 中国陶磁・古瀬戸 (1:3)

描直線文がめぐる。灰粒は不均一で、淡褐色ないしオリーブ色を呈している。7は25G、8は26H、9は29K、10は30H区よりそれぞれ出土している。

(3) 珠洲系陶器（第24・25図、図版十九・二十）

中世に比定される陶器の中でもっと多いのが珠洲系陶器である。珠洲焼は能登半島の珠洲郡・市を中心として製作された須恵器系の中世陶器である。壺・壺・鉢を基本三種とした民間陶器であるが、その前期段階においては仏器類などの特殊な器形を製作しており、高級な施釉陶器を専門に焼いた瀬戸窯を兼ね合わせた生産体制の未分化な地域窯であったとされている。

本稿では胎土分析の結果待ちがあるので、「珠洲系陶器」とするが、基本的には珠洲窯で生産された珠洲焼と考えて記述を進めていきたい。本遺跡では、壺・壺・鉢の三種が出土したが、壺・壺は少量であった。

壺（第24図1～5） 1～3は口縁部分で、器壁はさほど厚くない。ほぼ直立ぎみに立ち上がる形態で、灰白色を呈し、きわめて堅微である。4・5は底部破片で、叩き成形の張丁種（吉岡分類）とされるものである。内面には円形押圧痕が認められる。1は28G、2はSK5、3は28C、4は27H、5は28H区よりそれぞれ出土している。

壺（第24図6～10） いずれも全体の器形がわかるものはない。6～9は底部破片で、外面はほぼ水平な叩き目で、内面は円形押圧痕である。10は短く外反する口縁部で、径44cmと推定される。31H区出土。

片口鉢（第24図11～17・第25図） 内面におろし目のあるすり鉢である。全体の器形が判明するものは少ないものの、口縁形態・おろし目など一様でない。

11は口径約32cmで、器壁は薄い。口縁端部は内削ぎであり、内面に9本1単位のおろし目で、全体では12条と推定される。青灰色を呈し堅微である。26D・27D・30I・28H各区より出土し、接合している。

12は口径約31cm、器高13.2cmで、全体の約1/2遺存している。口縁端は丸味をもち、外端が外下方へ引き出され内外面ともにロクロ痕が明瞭である。おろし目は幅2cm、7本1単位で全体では8条と推定される。下半部は使用による磨滅が著しい。青灰色を呈しやや軟質である。SK8出土。

13は底部破片で、おろし目が横目の波状文となっている。淡褐色を呈し、やや軟質である。SK7の壙底より出土。

14は器壁が薄く、口縁端は内削ぎとなっている。内面のおろし目は細密で1単位10本以上である。灰色で堅微。

15は青灰色を呈し堅微である。おろし目は太く浅い。

16は口縁端がほぼ水平である。内面のおろし目は、細く深い条線で、20本以上1単位となるものと思われる。灰色で堅微。

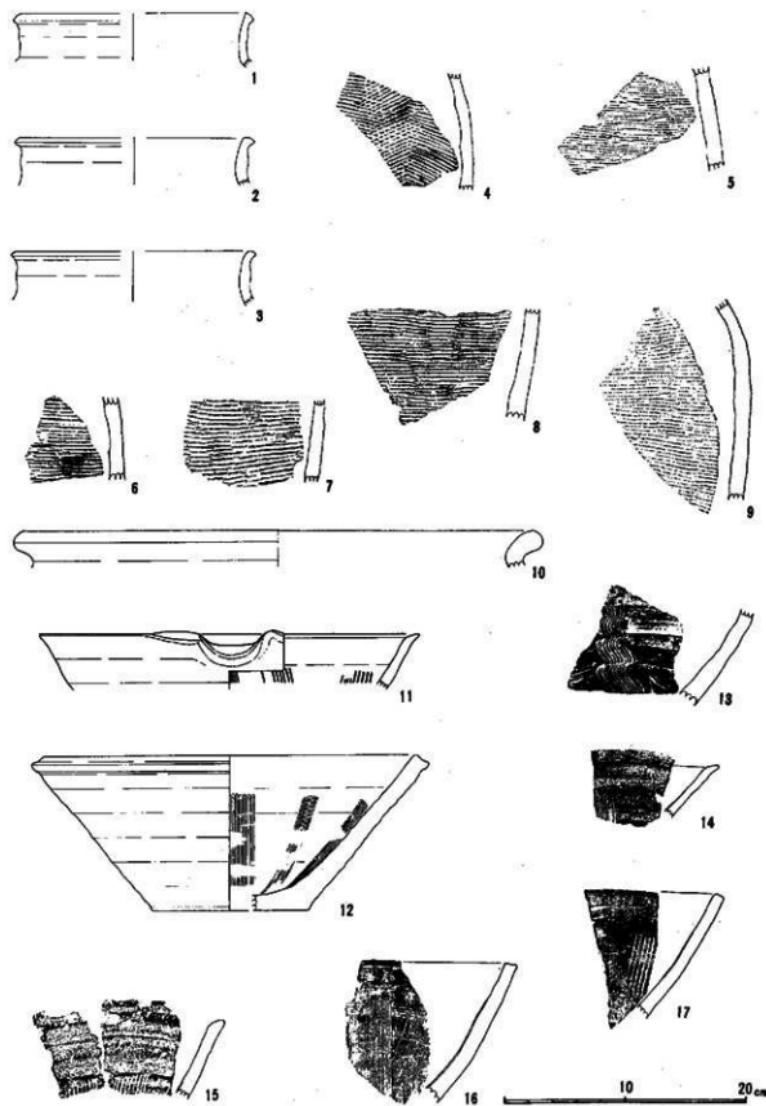
17は口縁端がやや外削ぎの面をもつ。おろし目は条線間隔が広く深い。青灰色を呈し堅微である。

18～21は底部で、いずれも灰色を呈し堅微である。18・20は体部が直線的に口縁に至るものと思われ、19はやや内削ぎみ、21はやや外反する器形を呈するものと思われる。底部にはいずれも静止糸切り痕をとどめる。

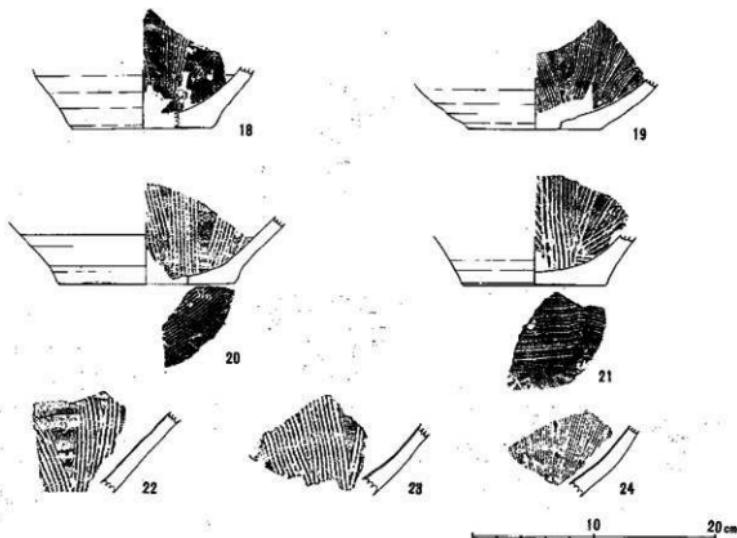
22～24は体部破片で、おろし目が施されている。22は太い条線が、24は細密な条線が密に施される。いずれも灰色を呈し堅微である。

2. 木製品（第26～35図、図版二十一～三十一）

本遺跡出土品で特に注目を集めた遺物に多量の木製品が挙げられる。多くは建築部材の柱棒であるが、鳥形・祝符木筒などの宗教的遺物や、曲物・漆椀などの生活用品も出土している。



第24図 中世の遺物2 珠洲系陶器1 (1:4)



第25図 中世の遺物3 珠系系陶器2 (1:4)

(1) 鳥形 (第26図1、図版二十三 52)

S K 6 の小堅穴造構より、木簡・漆碗などと共に出土したものである。押し込みの裏をもち、体長9.7cm、翼長10.3cm、厚さ2mmである。翼の押し込み部分は特に薄く仕上げ、裏面が透けている。体部は頭部を作出するとともに尾部も丁寧に加工して作出している。

(2) 木簡 (第26図2~5、図版二十一)

木簡状の3点を加えて説明する。

2はS K 6 の小堅穴造構より出土。全長14.8cm、幅2.5cm、厚さ1mmを測る。上端は主頭状をなし、その下の左右に二ヶ所の切り込みを加えている。下端は平端である。

祝文

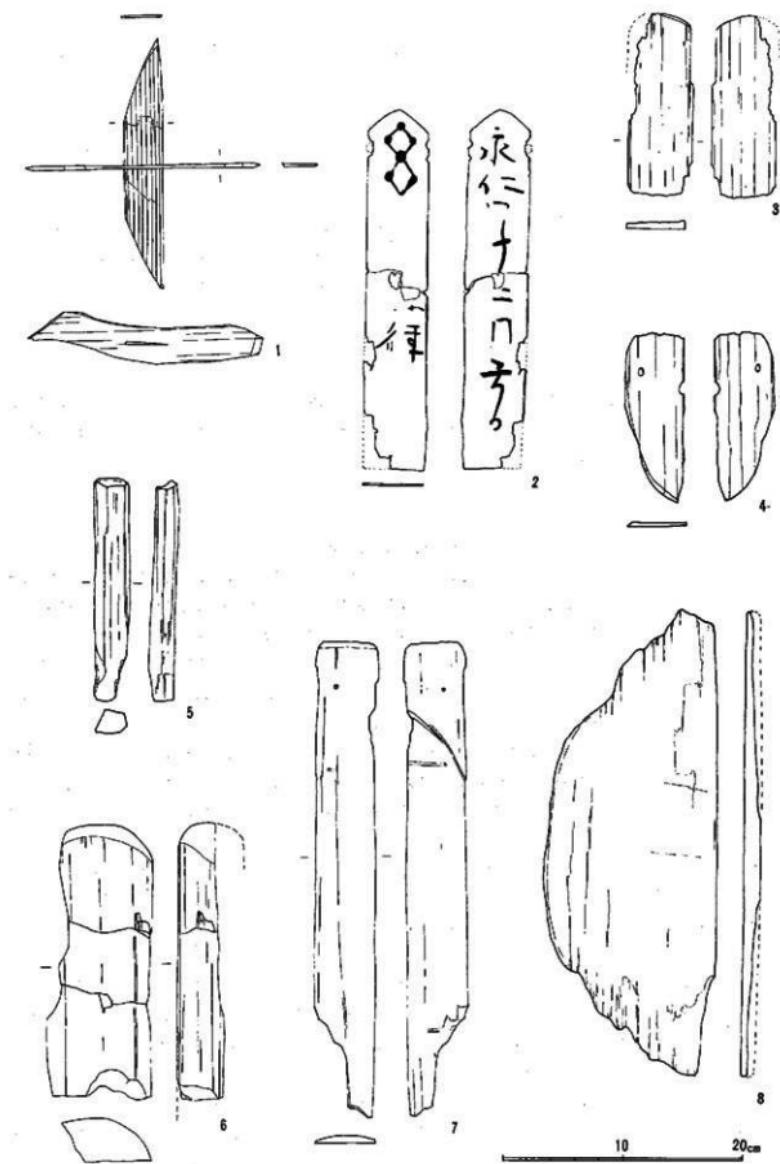
「く特錄、急々如律令」

「永仁四年四月四日」 (E.I.)

3~5は墨痕痕は確認されないものの木簡に類似するため加えた。3は一端が主頭状を呈している。4は下端が斜断されて尖頭状を呈す。孔と思われる部分があるが意識的なものかどうかはっきりしない。3は29G区、4は29F区、5はS K 6 より出土している。

(3) S K 6 出土不明木製品 (第26図6、図版二十三 53)

製品名を特定できないが、S K 6 の鳥形に近接して出土したものである。現存長11.2cmを測る。一見すりこぎ棒とも考えられるが、上端側面を観察するに棒状になるとも思われず、遺構の性格を考えるために特殊な製品である可能性も棄てきれない。



第26図 中世の遺物4 木製品 (1 : 2)

(4) 不明木製品（第26図7）

本例も具体的な品名を特定できない。3ヶ所に木クギ痕が認められることから、箱物の木片とも考えられる。

(5) 曲物（第26図8、図版二十三・五十五）

28H区出土。推定径約21cmで円形底板と考えられる。

(6) 杖（第27図・28図11～13、図版二十四・二十五）

すべてSK6の出土で、木簡出土地点の東北側に集中して打ち込まれていたものである。大半は径3cm前後の小枝をそのまま利用し、杖先を尖頭状に仕上げている。なお3・4・10は直接杖先に関係しない部分において、平坦な面を作出している点は注意される。また5・7・12は太い木を分割して作り出したものである。12は北端に打ち込まれていたもので、他と比べてすいぶん太い。

(7) 加工痕のある木製品（第28図14～17、図版二十五）

加工痕のある木製品を一括した。14はSK8底面より出土し、先端が二方に分かれた棒状具である。15はSB1ビット内より出土したものである。16・17は現存する中ほどに向面より切り込みを入れたものであるが、品名はわからない。16はP45、17はP44区内の出土である。

(8) 柱根・棟板（第29図～第34図、図版二十七～三十一）

調査によって多くの柱根が出土したが、遺存状態の良好な例を中心に図示した。

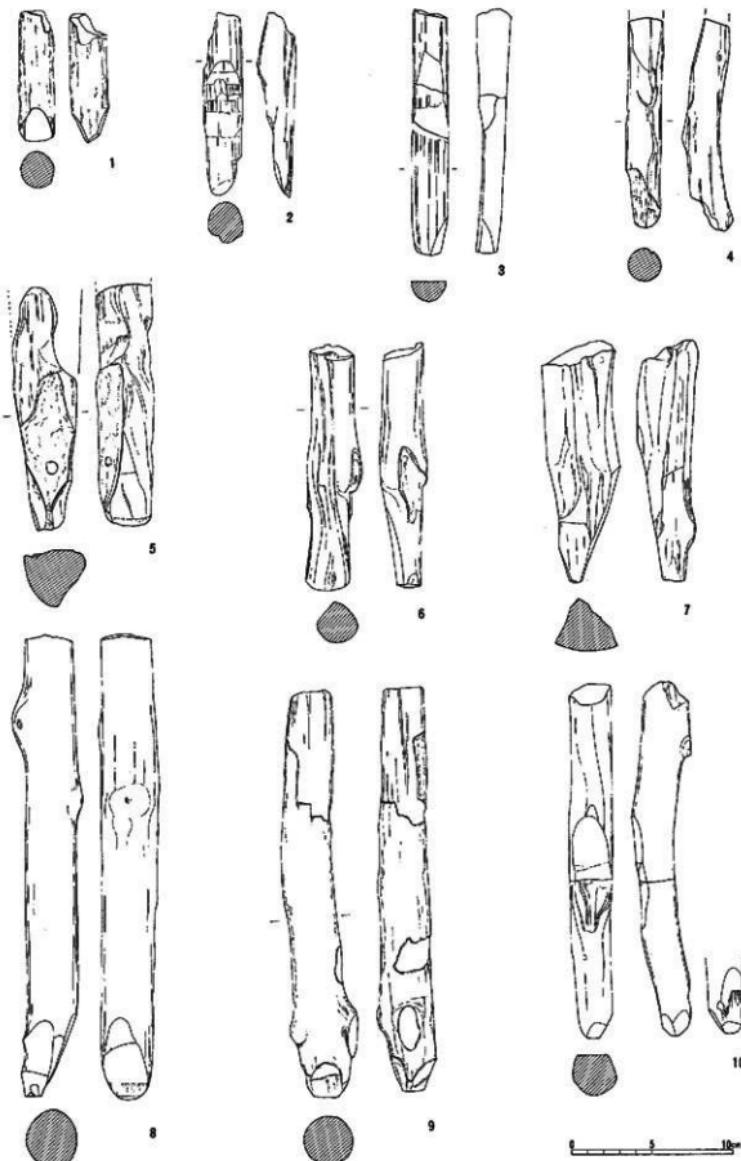
1～7は建物址に含まれない部材であるが、大半は掘立柱建物の柱根と思われる。1は現存長52cmで、22×13cm角の二方柱で面取りされている。底面より30cmおよび22cm上に正面と側面に深さ6cmほどの正方形の孔が穿たれている。2は径15cmの丸太材をそのまま使用している。底面は周囲より削られ尖頭状をなす。底面より12cm上位に全周の約3/4の範囲に切り込みを入れている。3は丸太材をほぼ半剖したものである。5は面取りされた部材で、三方より角度をもって底面へ削り込んでいる。そのため底面は尖頭状をなす。底面より14cm上位に一ヶ所の深い切り込みがある。7は7×6cmの角材で、底面はほぼ水平に切断されている。

8～10はSB4の建築部材である。8は二方柱の面取り材で、両側面の削りの角度が異なる。底面より11cm上位に一面を除き切り込みが加えられている。9は径11cmの丸太材をそのまま使用している。底面はほぼ平坦に削られている。10は二方柱で17×14cmの多面体を呈している。底面は下方から切り込まれるが、側面形態ではほぼ平坦となっている。

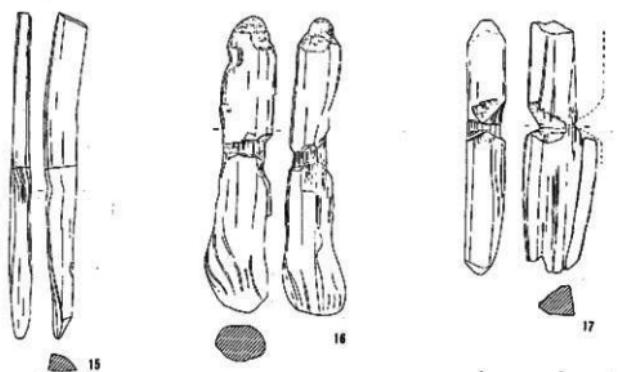
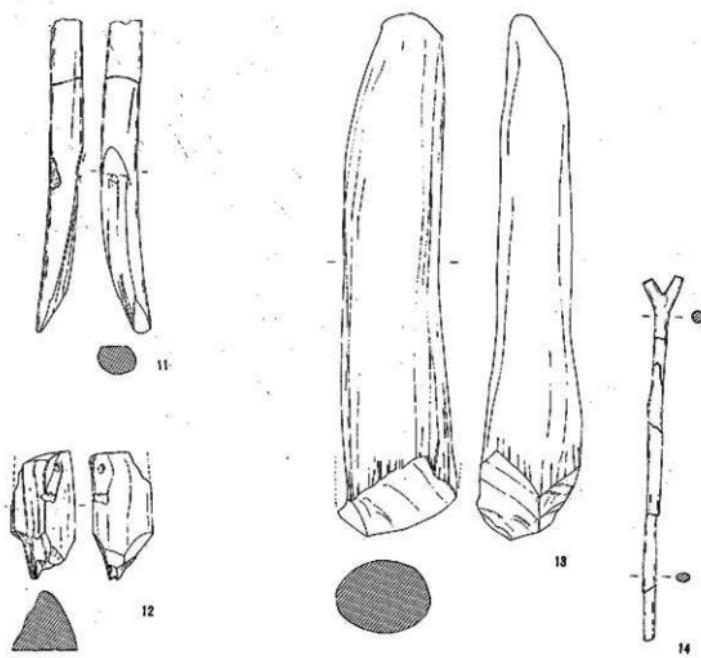
11～14はSB5の建築部材である。11は芯持ち材の丸太を面取りしたもので、底面はほぼ平坦に削られている。底面より7cm上位に全周に丁寧な切り込みが加えられる。12は多面体を呈するもので、断面はほぼ長方形である。底面は両端より角度が浅い削り込みで尖頭状の底面となる。13は芯持ちの丸太材と思われる。14は丸太材を三分割したものと思われる。形態は11と同様である。

15は芯持ちの丸太材を面取りしたものである。底面は浅い角度を持って尖頭状を呈する。16は断面三角形を呈し底面より14cm上位に深さ5cmの正方形の孔が穿たれている。17は面取りされた部材で、底面は一方向よりやや角度をもって平坦な面となっている。18は手法・形態ともに17に似る。19は芯持ちの丸太材を面取りしたもの。底面はほぼ平坦である。

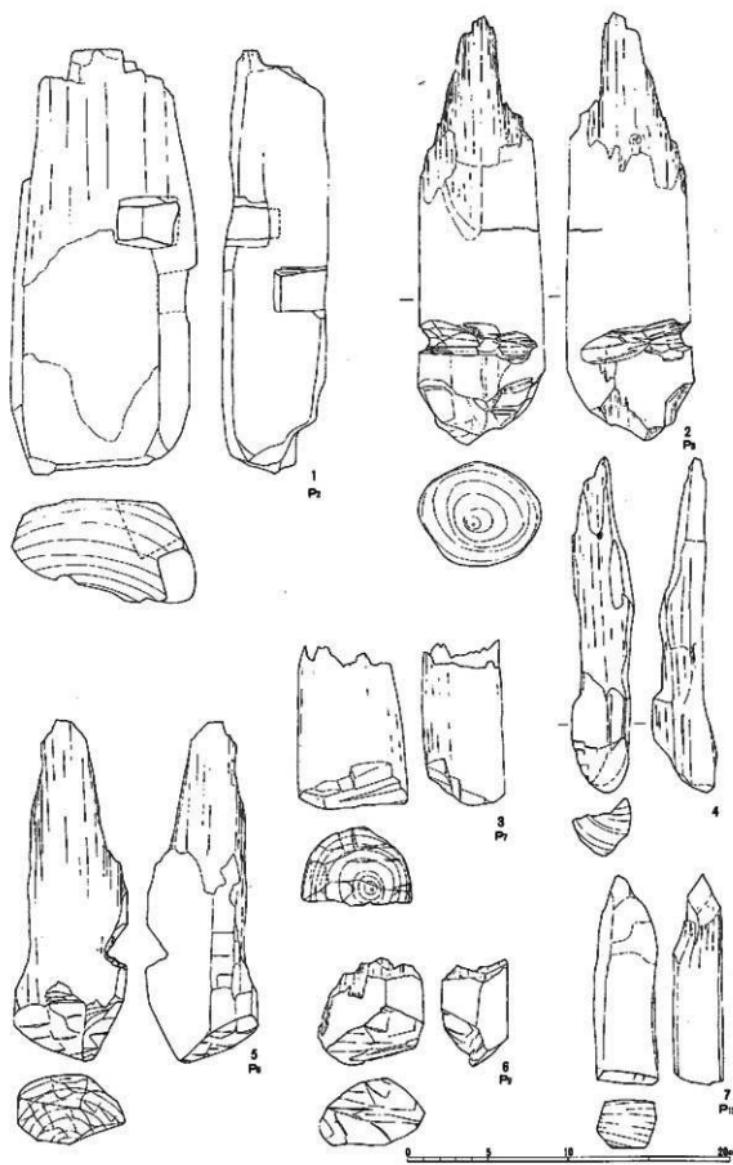
20は芯取り材の多面は斜断されている。21も芯取り材で、ミカン削りしたような部材で多面柱となっている。下端部は切り込みを入れるとともに、入念な加工を施してやや丸味をもった底面となっている。22は芯持ち材で、丸太の一面のみ平坦な面取りを行っている。底面はほぼ平坦であるが、上位9cmの部位には、一面を除いた丸太部分に切り込みが入念になされている。26は形態・手法ともに21に似る。



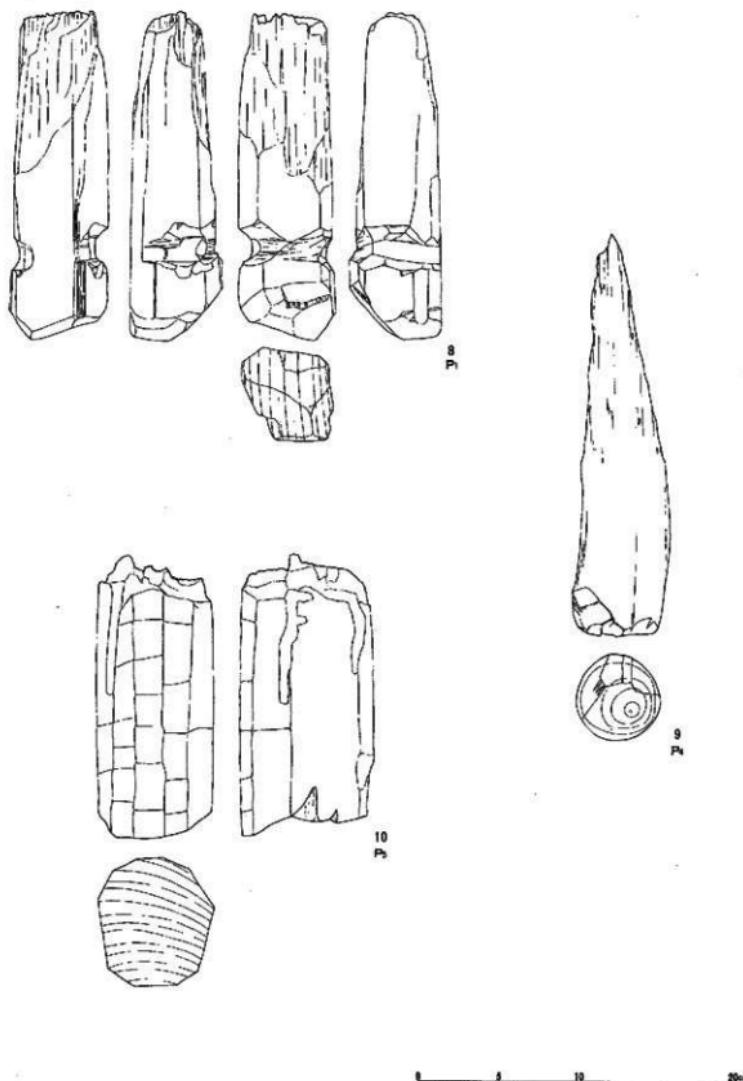
第27図 中世の遺物5 杖1 1~10:SK 6 (1:2)



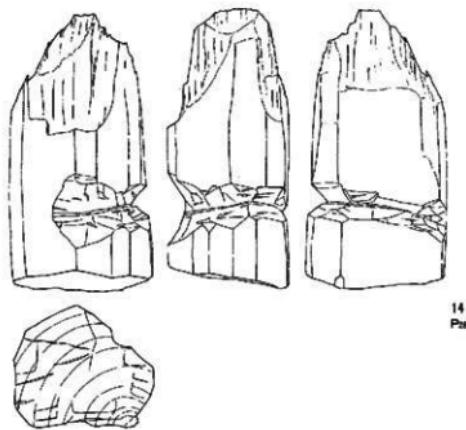
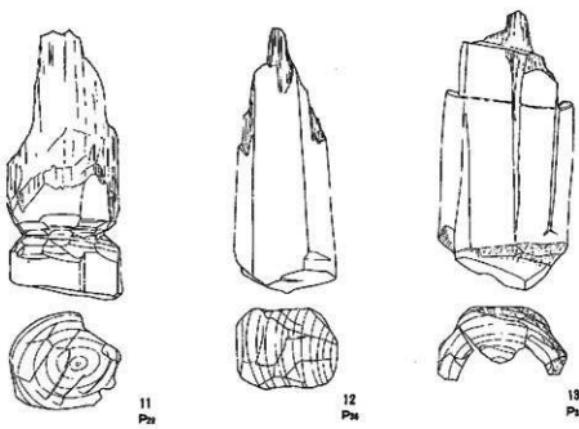
第28図 中世の遺物 6 桁2 11~13: SK6, 14: SK8, 15~17:ビット (1:3)



第29図 中世の遺物7 柱根1 (1:6)

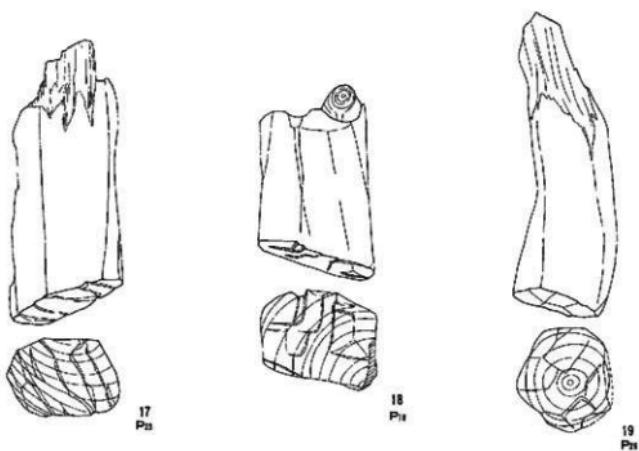
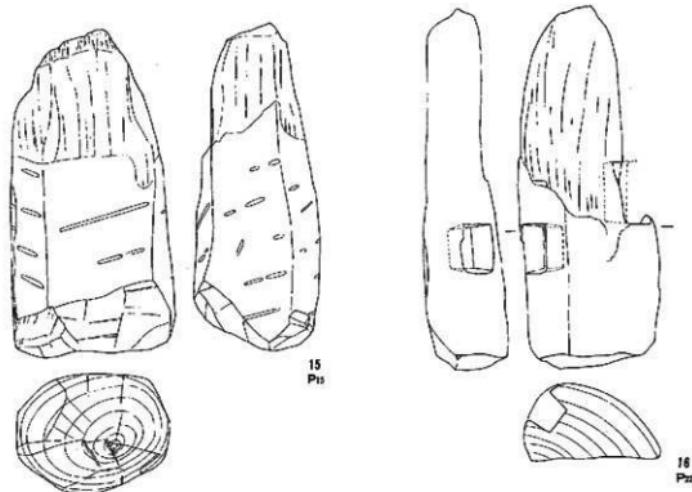


第30図 中世の遺物 8 株根 2 (1 : 6)

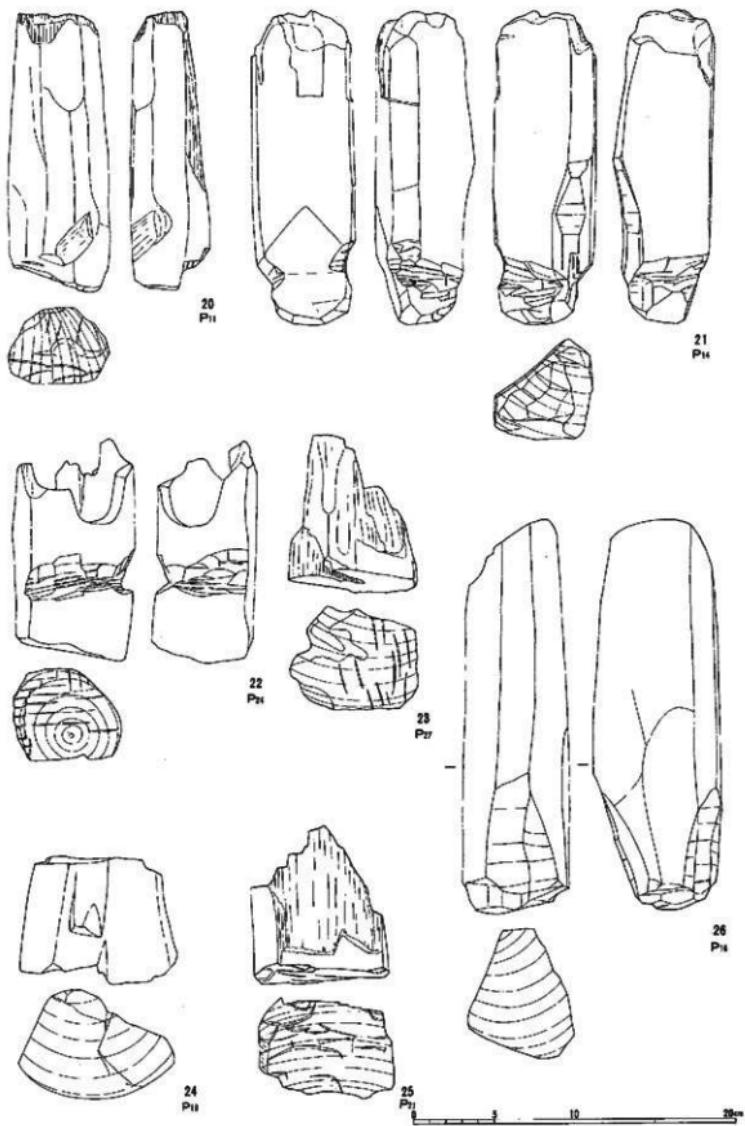


0 5 10 20cm

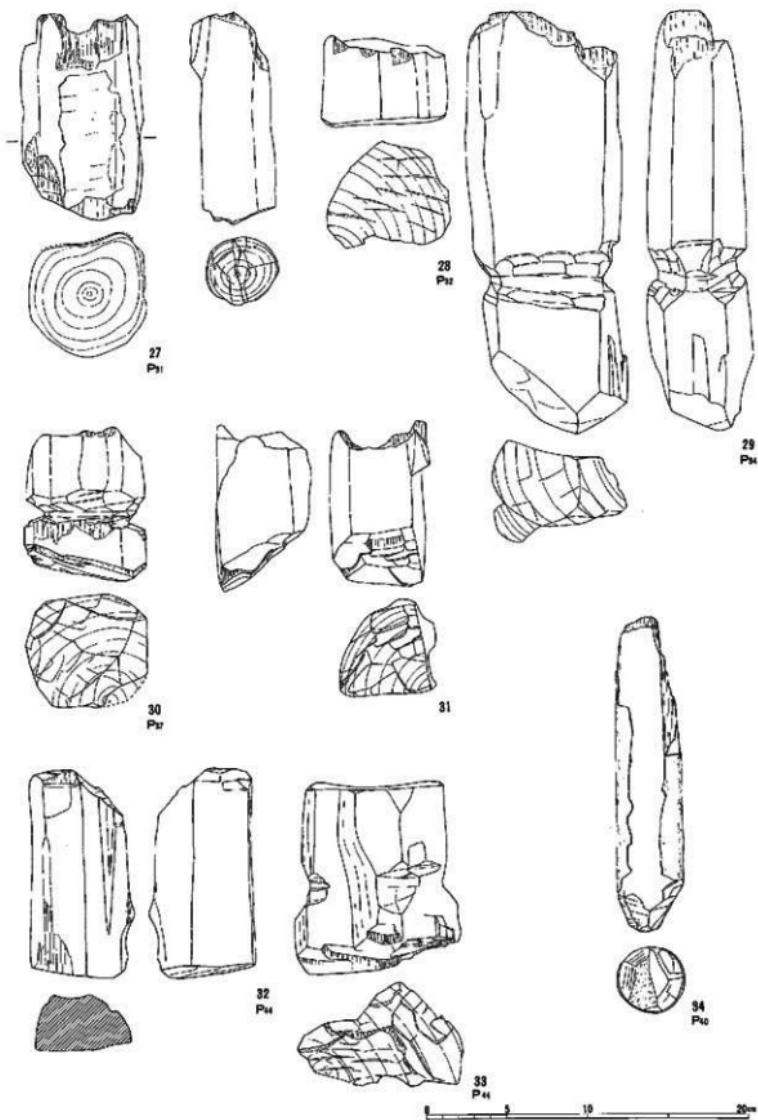
第31図 中世の遺物9 柱模3 (1:6)



第32図 中世の遺物10 杖根4 (1:6)



第33図 中世の遺物11 柱根5 (1 : 6)



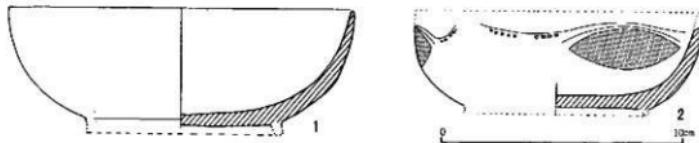
第34図 中世の遺物12 杖根6 (1:6)

27は丸太材を加工することなく、表皮のついたまま利用している。28はP32において2本検出されたもので、Aは補助柱と考えられる。29は現在長51cmで、19×12cmの多面柱である。下端は両側より削り込み尖頭状となる。底面より19cm上位に幅広い切り込みを施している。手法・形態は8に似る。30は芯持ち材の多面柱で、下端より上位7cmの部位に全面にわたり切り込みが施される。11・14と同形態である。32・33はP44内出土した檻板である。両方とも上端は切断されているが、柱の転用材と考えられる。34は柱根というより杭かと思われる。

(9) 漆器椀 (第35図、図版二十二)

1はSK6出土で、口径14.1cm、器高5.4cm、底径7.8cmと推定される。高台部のみ欠失しているが、他はほぼ完品である。器厚は5~7mmで、木地仕上げ・塗りも丁寧である。内面・外面ともに黒漆で、文様はない。

2は26B区で単独に出土したものである。口径11.8cm、器高4.4cm、底径7.8cmと推定される。口径と高台を欠く。木地仕上げ・塗りは1よりさらに丁寧で、器面には光沢がある。内面は朱漆が塗られ、外面は黒漆である。文様は外面のみで、黒漆の上へ朱漆で三單位に凸レンズ状の文様が描かれ、その上部へ二本の長短の波状文と花弁状の文様が並列される。



第35図 中世の遺物13 漆器椀 1:SK6 2:26B (1:2)

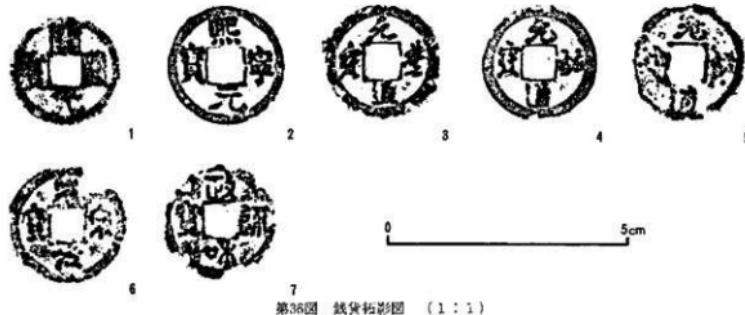
(10) 種子 (図版二十六 62)

種類鑑定を行っていないので特定できないが、梅の種子によく似た種子がSK6・7より多量に出土している。

3. 錢貨 (第36図、図版三十一 68)

渡来銭が7点出土している。本製品とは逆に水分の多い土中に埋れていたため遺存状態は悪い。すべてグリット・拮品であり、遺構内より出土したものはない。

当土銭貨で最も初鋳年の古いものは「開通元寶」で、背面に「洛」の文字のある紀地銭と呼称されるものである。他は初鋳年1068年の「熙寧元寶」から1111年の「政和通寶」までの北宋銭が計6点出土している。



第36図 錢貨及び影図 (1:1)

第4表 出土古鉄一覧表

| | 銭貨名 | 初鋳年 | 書体 | 出土地区 | 備考 |
|---|------|------|----|------|----------|
| 1 | 開通元寶 | 845 | 隸 | 29 K | 背面右部に「洛」 |
| 2 | 熙寧元寶 | 1068 | 楷 | 26 I | |
| 3 | 元豐通寶 | 1078 | 行 | 28 C | |
| 4 | 元祐通寶 | 1086 | 行 | 22 C | S D 1 |
| 5 | 元祐通寶 | | 行 | 25 C | |
| 6 | 聖宋元寶 | 1094 | 篆 | 表 | |
| 7 | 政和通寶 | 1111 | 篆 | 26 I | |

4. 小括

(1) 陶磁器

中世の陶磁器の出土量は決して多くはないが、県内でも比較的調査されることの少ない時期であるだけに貴重な資料を提供した。^(注3)

船載陶磁、白磁、青白磁、青磁がある。白磁碗(第23図1)は12世紀。

青白磁碗(23-2)はヘラによる文様がみられ、同様に12世紀に比定される。青磁碗は、内底に花文の碗(23-3)、蓮弁文碗(23-4-5)、模描文皿(23-6)があり、3は14世紀、4-5は13世紀頃に比定される。

以上、出土した船載陶磁は少量ではあるが、すべて明代以前の南宋元代の所産と把握でき、12-14世紀に位置づけられる。

国内陶磁 古瀬戸灰釉瓶子が出土しているが(23-6-10)、印花文(7-8)や体部上半に横目文のある(9)は、古瀬戸前期～中期にみられ、13世紀中葉～14世紀前葉に比定される。

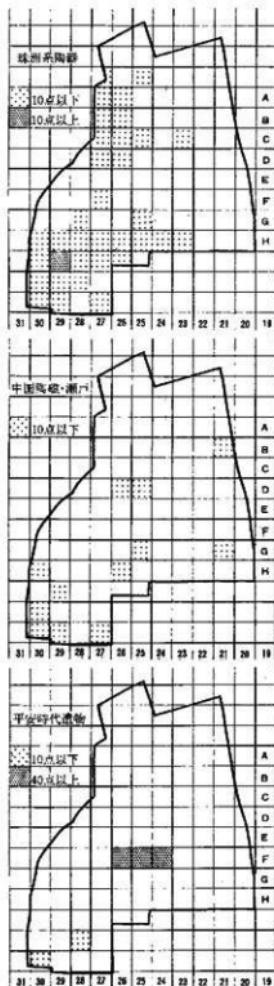
珠洲系陶器 出土陶磁の中で最も出土量が多い。珠洲系陶器については遺物の項でも説明したとおり、基本的には珠洲窯で焼かれた珠洲焼と考えている。

珠洲焼の編年は吉岡康晴氏によって12世紀中葉～16世紀を三段階7期に細分している。I期は12世紀中葉～13世紀初頭、II期は13世紀前半～中葉、III期は13世紀後半、IV期は14世紀、V期15世紀前半、VI期15世紀後半、VII期16世紀前半とし、I・II期を創成期、III～VII期を発展期、VI・VII期を終焉期とされている。

本遺跡出土例については、片口鉢が多いものの壺・甕が少量であり全体として器形のわかるものは少ない。

小形壺は口縁がやや聞き気味で口縁端が外側に張り出し、断面三角形を呈する例(24-1～3)、多面体となる特徴的な壺T種(23-4)が存在している。こうした点は、吉岡氏編年のIII期珠洲窯およびIV期法住寺3号窯に近似するものと思われ、およそ13世紀後半～14世紀前半期に比定される。^(注4)

次に片口鉢は、遺物の項で説明したとおり口縁端を外側に張り出す例、内削ぎの例、ほぼ水平な例とバラエティーに富み、内面のおろし目についてもそれぞれ相違している。ここで特徴的な二・三の鉢についてみたい。24-1は



第37図 中世陶磁器及び平安時代遺物分布図

珠洲法住寺3号窯片口鉢ⅠA類とした曲線文で、珠洲窯II期に比定されているように前期段階のものである。24-12は口縁端が丸味をもち、外端が外下方へ引き出されてしっかり面を取っており、器形もほぼ直線である点は、法住寺3号窯片口鉢ⅡA類に比定され、Ⅳ期の14世紀前半に位置づけられよう。また、24-11は口縁端が内削ぎに面をとった例で後出的な様相ではあるが、Ⅷ期以降にみられる例は丸味をもっておりやや細な作りになる。本例は器壁も薄く、シャープに内削ぎに面をとっている。また整形も丁寧である。こうした点を考慮するならば、Ⅲ期馬縫窯にも内削ぎする例も存在することから該期に位置づけられないだろうか。

以上簡単に陶磁器の編年について触れてきた。確実に15世紀と考えられる遺物は認められなく、その中心は13世纪～14世纪前半におくことができよう。

(2) 鳥形と木簡

S K 6より出土した鳥形木製品・木簡・漆椀などのセットは、中世民間信仰の祭祀形態を知る上で貴重な資料となった。

鳥形木製品 中世の鳥形の出土は、石川県西川島遺跡群御館遺跡・同白山橋遺跡・散田ムロノ遺跡・新潟県馬場星敷遺跡・静岡県小川城遺跡等で出土しているが、県内では初見と思われる。四柳氏によれば、^(注5)鳥形は井戸庵座に伴う祭り及び井戸以外の祭祀行為においても「引遣役」をになっていたのではないかとされている。本遺跡出土例も呪符木簡が同一遺構より出土していることから、何らかの祭祀行為を行ったことは確かであろう。

木簡 呪符木簡については和田翠氏の論文に詳しい。それによれば「急急如律令」の祝句を記す呪符木簡は、道教的信仰の浸透により奈良時代～平安時代初期には出現し、中世まじないの世界において一般庶民の間で盛行した。「急急如律令」という祝文は「すみやかに律令（正しい）の如く去れ」との意で、「速やかに鬼よ去れ」「凶時に去を期待している」と解釈され、特に中世に至っては葬祭的な物忌の形態が加わり、浄土信仰と呪術的要素を持つ密教信仰との混然とした形へと変化する。^(注6)

裏面にある「永仁四年□月□日」の紀年銘により1296年の□月□日に行方が行われたと推定でき、遺跡の年代も13世纪末前後に存続期間をおくことができる。

さて、鳥形・木簡等の出土したS K 5ではどのような祭祀行為が行われていたのであろうか。この場合、木簡とあたかも壙をなすように地中に突き立てられた木杭が注目される。多くは径3cm前後の小枝を利用したもので、杭としては貧弱なものも存在している。これを具体的な機能を持つものとして特定は出来ないが、少なくとも木簡と他との空間を隔てていることは明白である。そしてそれと対応するように鳥形が出土している。鳥形の北側で出土した不明木製品を祭祀に伴う木製品とすると、西に木簡、北に不明木製品、東に鳥形、南に漆椀が位置していると概念化することができる。こうした配置に注意された造構には、石川県西川島遺跡群白山橋遺跡の祭祀遺物埋納造構がある。それによれば「北に惡疫災禍を払う靈獸獅子頭と刀形・矢形、南の火きり臼と陽物の配置は陰陽五行思想にいう火陽のの理にかない、「東に鳥形が位置するのは古代以来の神や神靈のおもむく方角」にあたるとされている。いまこの例をS K 6と対比させると、東端に位置する鳥形は同様であり、この神や神靈のおもむく方角に相対する西側に呪符木簡が位置することになる。南端で出土した漆椀もこうした配置意図があるものと考えたい。また多數出土した梅の実と思われる種子も関係するものであろう。

おそらく、杭状木製品によって仕切られた木簡に向って、種々の災厄（特定できない）を祓い流す行為の結果ではないだろうか。

出土木製品についてはまだ多くの調査が残っている。樹種の同定・漆器椀の塗膜層構成・柱柵の年輪年代測定等である。今後の課題とし、報告すべく努力してゆきたい。

注

- 注1 玉島美術館の竹内順一氏より高麗青磁ではないかとの指導をいただいた。今後の検討を要する。
- 注2 奈良国立文化財研究所の綾村宏氏に御配慮いただき赤外線テレビより判読していただいた。
- 注3 船載陶磁・古瀬戸については、愛知県陶磁資料館の浅田真由・仲野泰裕両氏並び名古屋市見晴考古資料館平出紀男氏に御教示をいただいたが、誤りがあれば筆者の責任である。
- 注4 吉岡康暢・平田天秋 1976「珠洲古窯跡」 珠洲市史所有
- 注5 高堀勝彦・猪木勝夫・平田天秋・吉岡康暢等 1977 「珠洲法住寺3号窯」 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会
- 注6 四柳巣草 1987 「中世村落における信仰の諸形態」 西川島所有 石川県・穴水町教育委員会
- 注7 和田幸 1982 「脱符木簡の系譜」 木簡研究 4号 木簡学会
- 注8 水野正好氏より御教示を受けた。
- 注9 奥野義雄 1978 「物忌札とその世界」 どるめん No18 J I C C 出版局
- 注10 四柳巣草 1987 「西川島」 石川県・穴水町教育委員会

第V章 総括

関田山脈の一角—黒岩山はギフチョウ、ヒメギフチョウの混棲地として国の天然記念物に指定されている。この黒岩山の山麓に発達した集落が飯山市顔戸である。顔戸地域は、往時より、先史時代の各種の遺物が出土している。従って、今回の面積整備事業が施行されるにあたって、当初から並渕調査は発掘調査の対象とされていたのである。

調査開始期は、第Ⅳ章遺構の項に記述してあるとおり、当該地域が傾斜地の水田地帯であり、段階上に地形が改変されていて遺跡の破壊度が著しく調査は難渋をきわめたのである。しかしながら、地元作業員の皆さんの献身的な御協力、御努力により大きな成果をあげて発掘調査は終了した。改めて作業に従事された皆さんに感謝の意をさせたいと思う。

調査の結果、本遺跡は縄文、弥生、平安、中世の各時期にわたっていることはすでに記述してあるとおりである。それ故に古い時代の遺構ほど破壊の度合いは著しいことはいうまでもないことがある。それ故に、縄文時代に関しては、遺構は殆ど探し出しえなかった。今回の調査で出土した縄文土器、石器は、主として縄文後期前半のものが主体となっている。飯山地方では、後期の良好な遺跡は数少なく、飯山市東原、同宮中、野沢温泉村岡ノ峯、同東大塚の各遺跡を除けば、断片的に遺物の出土が知られているのみである。特に、後期初頭の出土はきわめて稀であって、数量的にも僅かである。従ってこの調査で得た資料は、飯山地方の縄文後期前半の土器型式のあり方を知る上で貴重なものとなるであろう。本報告では、時間的制約があつてごく一部しか紹介し得なかつたことはすでに記述したとおりである。しかしながら整理した資料から飯山地方の縄文後期前半期は、越後の後期文化の浸透があつたことをよく物語っている。今後、当地方の後期前半期の土器研究に本遺跡の果す役割は大きい。なお、蛇足ながら周辺には、縄文中期後半、晩期前半の遺跡が数ヶ所存在しており、当地域が縄文中期後半から晩期にかけて居住するに格好の場所であったといえよう。

弥生文化についてみれば、関田山脈の山麓地帯、等高線で350~370mの範囲内に大部の弥生式遺跡が分布する。そして、現在の集落立地と重なり合っている。この範囲は、丁度涌水帯にあたっており、かつ外様平の肥沃な湿地帯を臨む所でもある。本遺跡もこの地帯に立地している。今回の調査では、先記したように弥生時代の遺構はほとんど後世に破壊されていた。ただ幸いなことに上器窯跡一ヶ所が、平安時代の上着に一部こわされながらも存在していた。この土器窯跡から検出した土器は、小結の項に記してあるように千曲川下流域—飯山地方弥生時代中期後半に所属する良好な資料であった。飯山地方の弥生中期の編年は、昭和53年に調査した鐵治田遺跡D地点、C地点出土土器を指標として小堀—鐵治田D地点—鐵治田C地点と推移変遷する編年案を私達は組立てた。その後、当地方においては弥生文化期の調査は行われず、歴史的編年案を改変するにいたるだけの資料もなく現在にいたるのである。今回の調査の結果得た資料は、上記した編年案を補強化するとともに鐵治田D地点出土土器の新しい要素について一つの重要な認識を私達にあたえてくれた。今後とも飯山地方の弥生中期の究明に努力し、一日も早く弥生中期の編年を確立したい。

平安時代については、飯山地方では北原—長者清水—鐵治田A—鐵治田Cと推移する編年試案を用意しているが今回の資料は鐵治田Cならびにそれよりも若干新しい地位にあたるものである。

以上、今回の調査で得た資料にもとづき、縄文時代、弥生時代、平安時代について述べた。そして、これらの各時代の遺物は当地方の考古学研究上いずれも重要なものであることはいうまでもない。しかし、今回の調査のハイライトは何といっても中世所属の遺構及び遺物であろう。特に年号を記した木簡、鳥形木製品、漆器瓶、杭状木製品等が出土した遺構は貴重である。年号を記した木簡、鳥形木製品は県内では初めての出土である。この遺構、遺物については望月が第4節中世の項で詳述しているので今更ここで記す必要はあるまい。ただこれらの所属年代は木簡に記された年号、その他から鎌倉末期としてよいであろう。この時期外様平の支配者として、常岩氏があげ

られる。この木簡に記された年から20数年後に飯山市太田北条に本拠を有したとされる「常岩勢六宗家」なる人物が歴史の舞台に登場する。このことについては、故江口善次氏が「外様村史」「太田村史」の中で詳細に記述しておられる。氏は岡村史の中で、鎌倉を通じて外様半の支配者は、常岩氏と明言されている。

望月が触れているように、今回出土した木簡をはじめとする遺物が呪符的なものであるとすれば、外様半の支配の中で大きな災厄と考えられる事象が起っていたと考えてよいであろう。それは、いったい何であったのかは今後の重要な研究課題といえよう。いずれにしても、鎌倉時代末期に所属する木簡、鳥形木製品等の呪符の遺物が出土したことは、市河文書以外に当方中世の歴史的軌跡を知る手掛りをもたなかった私達に一条の光明をあたえてくれたといってよいであろう。因みに常岩氏の本拠地とされる北条城は、建武2(1335)年、市河氏等に攻略されて城は破却され、常岩氏の消息が絶えたとされている。

ところで船載の陶磁器（白磁、青磁、青白磁）や古瀬戸、珠洲系の陶器等が出土したことは、この当時すでにこのような製品を入手するに足りる経済力を保有した小領主層がこの地域に成長していたことを証明する資料であるとともに当時の物資交流の有様を如実に示している。当時の貴重品であるこれらの品々を入手できた人々は、外様半の支配者とされる常岩氏とどのような関係を有していたかは不明である。ただ、木簡をはじめとして各種の陶磁器を保有するに足りるだけの勢力をもった小領主と考えてよい人物が額戸地区を基盤として成長していたと考えられよう。

珠洲系陶器については、昭和59年の沼井長者清水遺跡調査を契機として、北信濃を中心としてその分布情況を私達は追求してきた。そして、今回の調査を通して更に資料を集積し、その分布の有様をはば把握するにいたった。このことについては、近い内に望月が紹介するであろう。

今回の調査は多くの問題点を私達に投げかけた。特に中世一鎌倉期の重要な資料を得たことは、今後当方の中世研究に一筋の光明をあたえたといえよう。

終りにあたって、本調査に種々と指導下さった筆沢浩氏（文化課指導主事）、協力頂いた両場整備実行委員会、作業員の皆さんに心より感謝の念を捧げたい。

第2編 北顏戸遺跡

第Ⅰ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置

第1編蓋測道跡の項で詳しく述べているので簡単に触れておきたい。

第三紀水成層を基盤とする関田山系は、信濃側においてその後の断層活動により1000m内外の低山地でありながら、比較的急峻な山容を示している。遺跡の位置する頬戸地区は、黒岩山(938m)の山麓にあり、比較的新しい扇状地上に位置している。この扇状地は近世の山地からの押出によりさらに厚く堆積し、丘陵状の地貌を呈している。遺跡は、この扇状地の右端に立地しており、東側の広井川が形成した肥沃な低湿地帯に接している。

第2節 歴史的環境

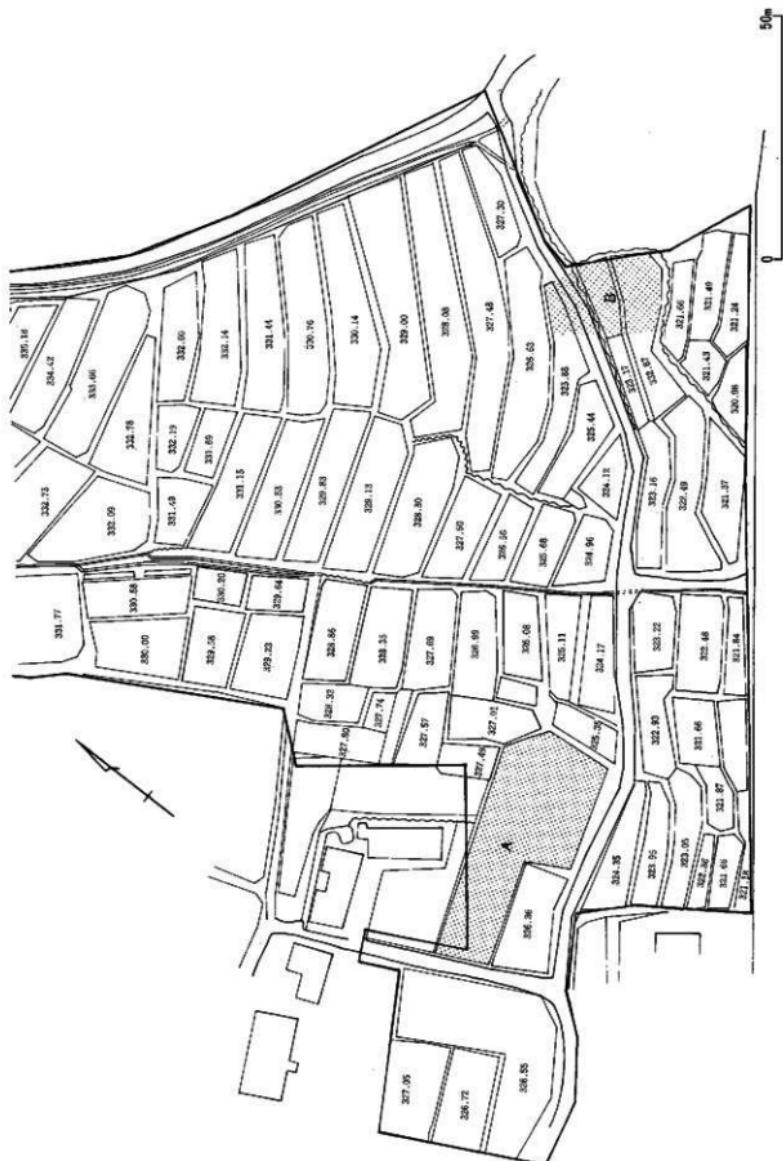
本遺跡の立地する関田山脈の山麓および低湿地を挟んだ東側の長峰丘陵上には多くの遺跡が確認されている。この関田山系と長峰丘陵によって狭められた外様平は、広井川の肥沃な低湿地帯を形成し飯山市内でも有数の穀倉地帯となっている。

外様平周辺における考古学研究は明治時代に測り、頬戸出身の北沢量平や宮沢甚三郎などによって遺物の報告がなされている。その後、やはり頬戸出身の郷土史家栗岩英治が郷土の古代史について多くの論文を残している。しかし、学術的調査がほとんど行われず、遺跡も現集落内に存することにもより、部分的な報告にとどまっていた。

その後の基盤整備事業などの実施により、遺跡の宝庫でありながら飯山市内でも不明瞭な地域となっている。現在までに判明している事は関田山系山麓の頬戸地区から北側の小境・北条方面にかけて弥生中期の大集落があったろうと予想されること。それ以前の縄文時代の遺跡は、小規模集落が点在し、大規模な遺跡は確認されていないこと。長峰丘陵上には、弥生中・後期・古墳時代の遺跡が多くあり、おそらく小首長の存在するような地域を形成していたであろうということ。平安～中世に至っては、「常岩牧」の中心地帯と推測されるように、開拓が本格的に始まっていたであろうということ。さらに、戦国時代の館・山城が多く存在し、いわゆる上杉謙信の「外様衆」の中心地帯であることなどが挙げられる。



栗岩英治翁の碑



第II章 調査

第1節 経過

調査は塩沢遺跡と併せて行なった。これは両場整備事業の施行が年度内に終了するためには、11月の降雪時までに完了させなければならず、また梅雨時までに土砂の移動を行いたいとの要請のため止むを得ない方法であった。

調査地区は現況が水田であり、扇状地に段階的に並ぶ。したがって地形変化が著しく、調査区の選定には苦慮した。そのため事前に地点を選定して試掘を行ったが、対象地区上半部はかなり削平されていた。そのため下半部の比較的地形変化が加えられていないと考えられる地点を選定した（A地区）。

A地区は、標高327mを測り、南側へは急斜面で低湿地に接する部分で、一枚田である。東側の半分程はすでに削平されており、耕作土下は黄褐色粘土層の地山であった。遺構等は全く確認されず、さらに遺物も出土しなかった。西側部分は、逆に黒色土層が厚く堆積しており、約1mを調査したが地表面には達しなかった。

地表下約50cmのレベルに弥生中期土器片の出土する面があったものの、細片であり生活面も探し得なかった。

なお、A地区的調査によって遺構等の検出がないまま、差別の調査も継続しているため、北頭戸遺跡の調査は終了することとした。

8月中旬に入り、圃場整備が急ピッチで進められていたが、A地区東側90mの地点で多量の土器片が出土しているのを、現地観察をしていた田村調査員によって発見された（B地区）。

遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器で時代的には、弥生・古墳・平安の各期に亘っていた。

B地区は、上方（西）より一段下った面で、重機もぬかり込むほどの湿地であった。状況から居住空間とは考えられず、周辺部分であろうと考えられる。

第2節 遺物

1. A地区出土遺物（第39図、図版三十四 72）

A地区からは、遺物包含層（黒色土層）より、ボリ袋半分（数点）などの土器片が出土している。土器は磨滅したもののは少なく残りは良い。

出土品は弥生土器がほとんどだが、他に、平安ないし中世と思われる甕の小片がある。

(1) 弥生土器（第39図1～8）

弥生土器は、壺・甕がある。

壺（1～6） 壺は、いずれもヘラないし棒状工具による沈線文と、地文としての横文をもつ。なお、4～6は同一個体と思われる。調整は、外面はいずれもヘラミガキで、内面は1・3がナデ、2・4～6は横ハケである。色調は、1・2が淡茶褐色、4～6は黒灰色を呈する。

甕（7・8） 甕はいずれも横描波状文をもち、内面はナデ、淡褐色を呈する。

小縁 以上の弥生土器は、壺が中期秦式的であり、甕は後期的である。

2. B地区出土遺物（第39～41図、図版三十四 73～三十五）

B地区からは、遺物包含層（黒色土層）より、弥生土器・古墳時代の土器・平安時代の土器が、コンテナ1箱分出土している。A地区同様に磨滅したものは少なく、土器の残りは良い。

(1) 弥生土器 (第39図9~19、第40図20・21)

弥生土器は、壺・甕・高杯がある。

壺 (9~15) 壺はいずれも、へらないし棒状工具による沈線文と、地文としての縄文をもち、11・13は沈線間に刺突文を加え、12は横描平行文を加えている。

内面の調整は、9~11・15がナデ、12~14が横ハケ。

色調は、9~15が淡褐色、10が茶褐色、13が暗茶褐色、11・12・14が淡褐色を呈する。

なお、11は外面に赤色塗彩されている。また、図示していない出土品の中に赤色塗彩された壺破片が目立つ。

甕 (16~19) 16~17は横描の慈垂横帯文をもつもので、16は縄文を地文とし、17は横描波状文を地文とする。16は鐵治田C地点に通有の甕である。18は横描平行線文をもつ。

19は小型ないしミニチュアと思われる甕の口縁部で、頸部に横描平行線文をめぐらし、口縁部に横描波状文をめぐらす。

内面の調整は、16は口縁から頸部にかけては横ナデ、体部は横ハケ。17は横ハケ。18・19はナデ。

色調は、16・17が茶褐色。18・19が淡黄褐色を呈する。

高杯 (18~19) 18は赤色塗彩された口縁部片で、口縁部が一部突出する。内外面ともにていねいなミガキが施され、胎色は淡褐色を呈する。口径約22.0cm。

19は脚縁部で、赤色塗彩されていないが、赤橙色を呈している。外面はていねいなミガキ、内面縁部は横ナデ、同脚部はハケののちナデを加えている。口径15.4cm。

小説 以上の弥生土器は、中期的なものと後期的なものの両方を含んでいる。そして、赤色塗彩されたものが目立つことや、中期末に編年される鐵治田C地点に通有の甕 (16) がみられることなどから、並列遺跡と異なり、中期後葉～後期にわたっていることが推定される。

(2) 古墳時代の土器 (第40図20~24)

古墳時代の土器は、二重口縁壺 (20)、壺 (21)、低脚杯 (22)、高杯 (23・24)などの土器が少量あり、須恵器はない。

二重口縁壺 (20) 口縁部小片である。古式の二重口縁壺は頸部が直角に近く、かつ長く立ちあがり、口縁部も大きく開くが、本例は、短く外方に開く新しい様相を呈している。

内外面とも須ナデで、淡黄褐色を呈する。

壺 (21) 大型の壺と思われるが、上下逆にすれば、弥生後期の壺の可能性もある。外面はていねいな縦ヘラミガキで、赤色塗彩が施される。内面はハケののちナデ。赤橙色を呈する。

低脚杯 (22) 一定低脚杯としておいたが、上下逆にすれば、弥生上器の蓋かもしれない。低脚杯杯とすれば、浅く大きく開く杯部と、短い脚部をもつものとなる。外面はナデ。内面はヘラケズリ。淡黄褐色を呈する。

高杯 (23・24) 23は脚部小片で、薄手のものである。外面はミガキ。内面は横ナデ。淡黄褐色を呈する。

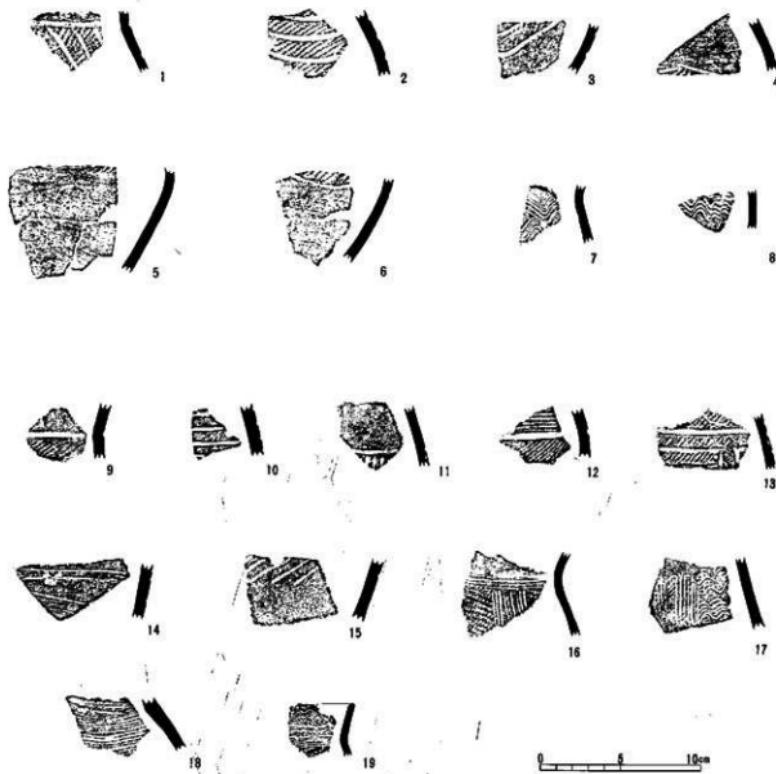
24は脚部で、やや中ぶくらみの脚部から、段をもたずに脚部へ続く形態のものである。杯部との接合は、杯部にはぞを設ける型式のものと推定される。外面はヘラミガキ、内面は一部にハケを施す。赤橙色を呈する。

小説 以上の古墳時代の土器は、二重口縁壺や高杯の形態から、概ね和泉期後半のものと思われる。

(3) 平安時代の土器 (第40・41図)

平安時代の土器は、完成品で出土した2点(第40図35・36)の他、土師器杯・甕・須恵器杯・壺などがある。

土師器杯 (25・26) 25・26ともに内面が黒色処理される所謂黒色七器で、図示していない杯の破片も黒色土器がほとんどである。25は大型で深い形態のもので、外面はクロナデ、内面はていねいなヘラミガキを施す。淡褐色を呈する。口径15.0cm、器高5.5cm。



第39図 出土遺物 1～8：A地区 9～19：B地区 (1:3)

26は底部片で、底部は手持ちヘラケズリが施される。なお、図示していない杯片で底部調整の確認できたものは2点あり、1点は手持ちヘラケズリ、1点はロクロヘラケズリである。

土器器型 (27～29・36) 瓢は口縁部の形態から、外反するもの(27)、直線的に外傾し口縁端面をもつもの(28)、縁部をつまみ上げるもの(29)、内湾ぎみで頸部がやや凹むもの(36)のイタイプがあり、内湾ぎみで頸部が凹むものが多い。

いずれもロクロ成形されており、全体にロクロナデの痕跡がよく残っている。36は体部下半および底部にヘラケズリを加えている。

色調はいずれも淡褐色系統で、27・36は炭化物の付着が著しい。

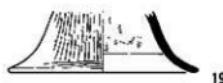
完形の36は口径17.0cm、胴最大径18.6cm、器高17.2cmである。

須恵器杯 (30～32) 全形のわかるものは30のみで、小さな底部から直線的に外に立ちあがる形態のものである。いずれもロクロ成形で、底部の切りはなしは、30・31がロクロ糸切り、31は静止糸切りと推定される。

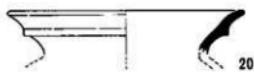
焼成は、31が青灰色で堅微である他は、焼きが概してあく、淡灰色を呈するものが多い。30は口径12.2cm、器高



18



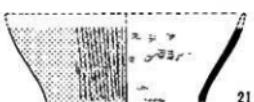
19



20



22



21



23



24



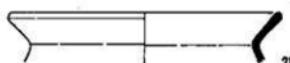
25



27



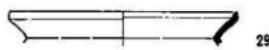
26



28



30



29



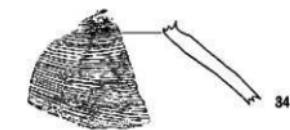
31



33



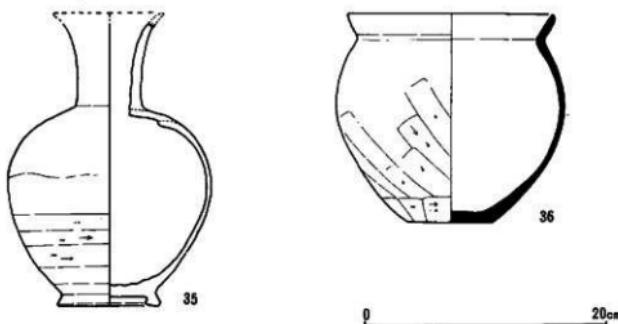
32



34

0 20cm

第40圖 出土遺物2 B地區 (1:4)



第41図 北頬戸出土遺物3 B地区 (1:4)

3.8cm。

なお、32の底部外面にはヘラ記号「+」がある。

須恵器壺（33・34） いずれも頸がすぼまり、肩の張る形態のものと推定される。体部外面には平行叩きが施されるが、34は叩き板の木目に対して斜めに叩き目をケズり込んだのか、あるいは叩き板に縄をまいたのか、所謂叩き状を呈している。

色調は、両者とも表面は灰色だが、断面内側は赤味を帯びている。

須恵器壺（35） 口縁端部を欠くほかは完形である。腹部が球形に近い形態のもので、底部下半が直線的にならない。ログロナデの後、腹部外面下半にロクロケズリを加える。高台は貼り付け高台で、底部の切りはなしは静止糸切りと推定される痕跡がかすかに残る。

また、上半部には緑灰色の自然釉がかかる。

小結 以上の平安時代の土器は、上部器杯の形態・底部調整方法、須恵器杯の多くあること、須恵器壺の形態などから、飯山市旭町遺跡群北原遺跡出土品に類似しており、9世紀後半～10世紀前半の年代があてられる。

第3章 まとめ

今回の北原遺跡の調査は、調査体制が不充分であったことに加え、調査地が階段状の水田でかつ谷状地のため明確な遺構等が検出できず、充分な成果を得ることができなかつた。

しかし、今回の発掘によって以下の知見を得ることができた。

弥生時代には、関田山脈東麓の扇状地に遺跡が密集してあることがこれまでの分布調査等で知られていたが、今回の調査で、現況では人々の居住地に適さないと思われる地点から、残りの良好な弥生時代中・後期の土器が出士したことから、関田山脈東麓の扇状地にはさらに濃密な遺跡が分布することが推定されるようになった。外様平の弥生時代の開拓は、きびしい冬期の自然条件にありながら、私達の予想を越えて盛んであったのだろう。

また、居住地に適さない所という私達の先入観に左右されず、努めて発掘を行るべきであることを痛感している。古墳時代前半期（和泉期後半）の土器の出土は、少量ながらも、当地における集落の存在を予想させることとなった。これまで外様平を始め飯山地方の古墳時代の生活跡は、類例が少なく、未だ調査・研究の途についたばかりの段階であり、今回の前半期土器の出土は少量ながらも、外様平ひいては北信濃の古墳文化の解明的良好な資料になるとを考えている。

平安時代中期（9世紀後半～10世紀代）は、都では藤原摂関家が榮華を極めた時代であり、地方は「荘園」が相ついで設置された時代と言われている。

飯山地方の平安時代における遺跡の急増は、この「荘園」にかかる可能性が高いと指摘されているが、今回の調査で出土した土器はまさにこの時期にあたり、しかも、飯山地方の編年では今のところ最も古い北原遺跡段階（9世紀後半～10世紀前半）にあたり、当地の平安時代の開発が飯山でも早い段階であることを物語っている。^(註1)

なお、調査員田村が採集した須恵器の壺と土師器の甕は、重機による圃場整備作業中にもかかわらず、ほぼ完形に復元された優品であり、貴重な文化財となつた。

また、今回の調査では明確な遺物は出土しなかつたが、当遺跡の北側には「藤戸館」と呼ばれる館跡が良好に残されている。中心地および周辺部の調査が今後重要となろう。

以上、今回の発掘の成果を簡単に述べてきた。限られた調査体制・期間の中で、一定の成果が得られたように思う。しかし、今後の調査体制・調査方法の再検討がなされなければならないことを痛感している。

註1 飯山市教育委員会 1980 「長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査報告書」

飯山市埋蔵文化財調査報告 第16集

釜淵・北顔戸 遺跡

昭和63年 3月25日 印刷

昭和63年 3月31日 発行

編集・発行 飯山市教育委員会

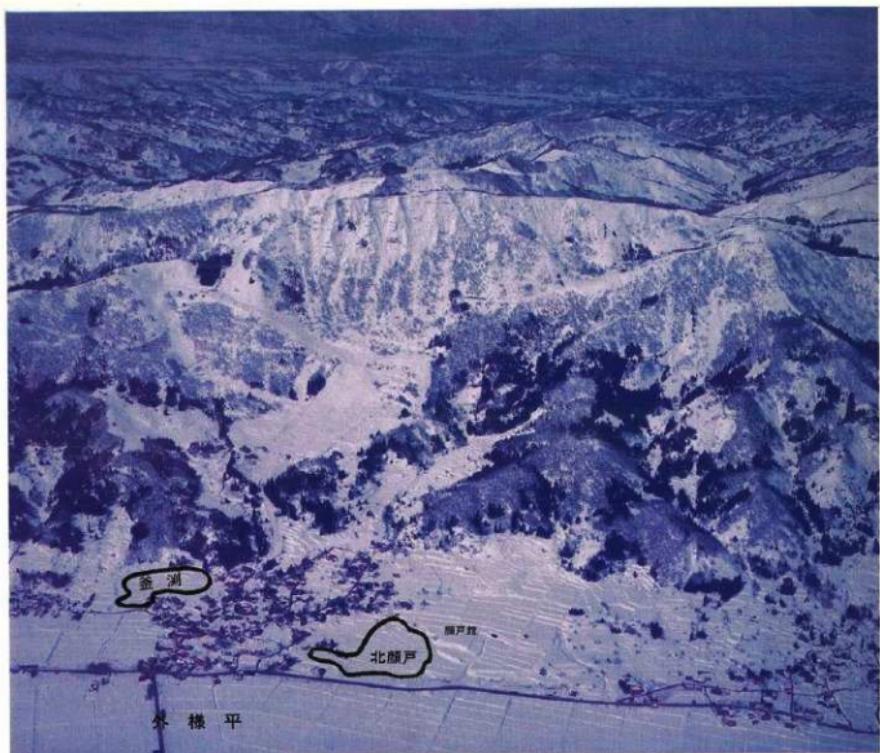
長野県飯山市大字飯山1110-1

印 刷 手 岸田孔版印刷所

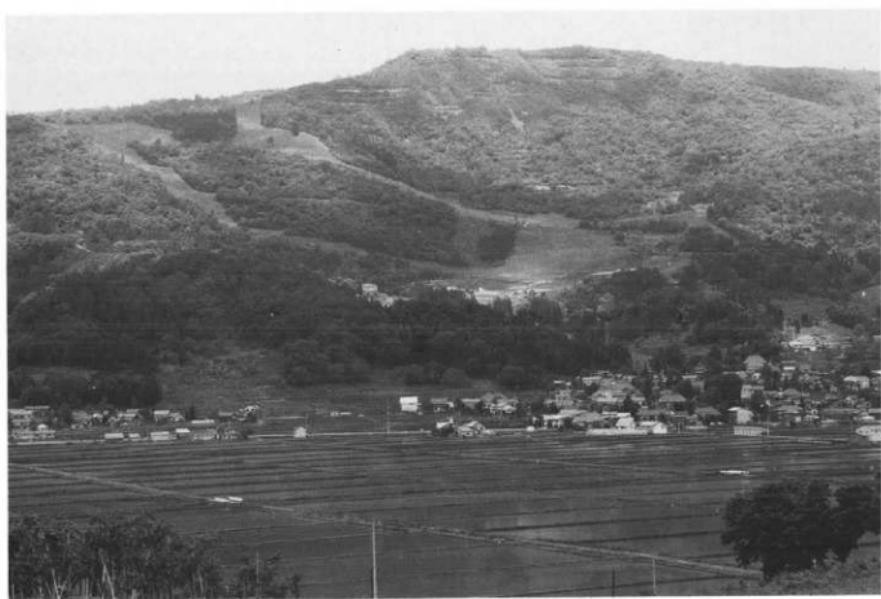
長野県飯山市大字常盤5733-1

PLATE

釜湧遺跡



1 遺跡付近の航空写真



2 遠 景



3 近 景



4 調査開始式



5 I区調査風景



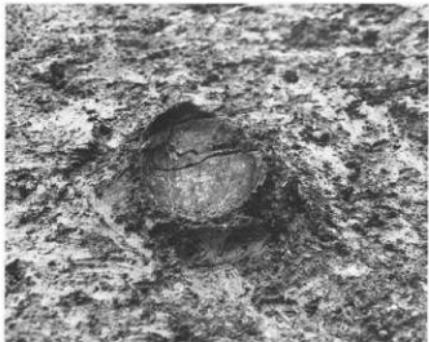
6 II区調査風景



7 打製石斧出土狀態



8 打製石斧出土狀態



9 漆柶出土狀態



10 木筒狀木製品出土狀態



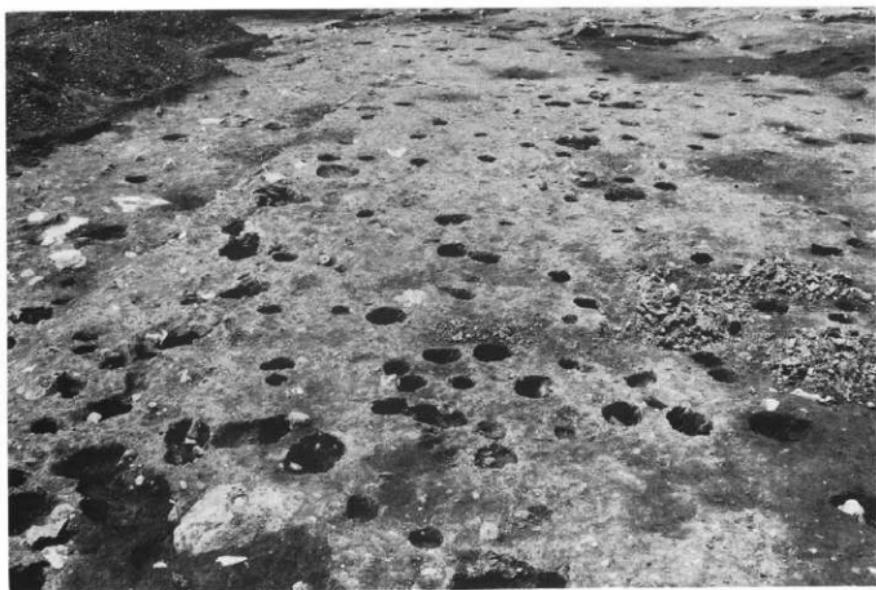
11 柱根出土狀態



12 P44礎板出土狀態



13 道 橋



14 S B 2



15 SK1



16 SK2



17 SK3

SK4 (弥生)



18 遺物出土状態



19 遺物出土状態



20 遺物出土状態

S K 5 (平安)



21 遺物出土状態



22 遺物出土状態



23 調査風景

SK 6 (中世)



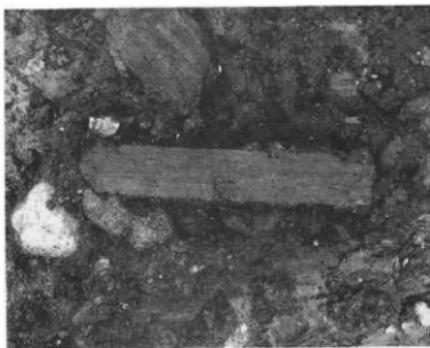
24 鳥形・不明木製品出土状態



25 鳥形出土状態



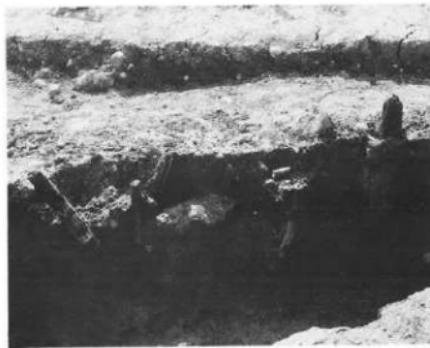
26 木製品出土状態



27 木筒出土状態



28 漆椀出土状態



29 杭打ち込み状態

S K 7 (中世)



30 遺構



31 珠洲系陶器片・
大型蛤刃石斧出土狀態



32 小型磨製石斧出土狀態



33 SK 8 (中世)
珠洲系陶器(鉢)出土状態



34 SK 8 遺物出土状態



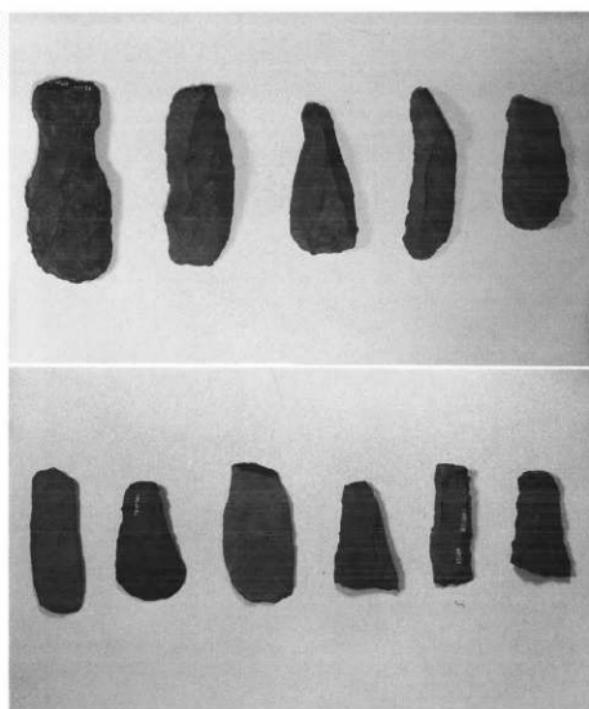
35 SK 9 (中世)



36 竖構全體圖



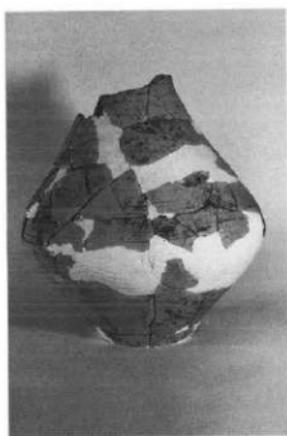
37 遺構全体図



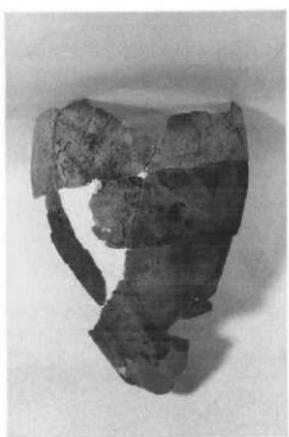
38 打製石斧



39 打製・磨製石器



20-1



20-7



20-4



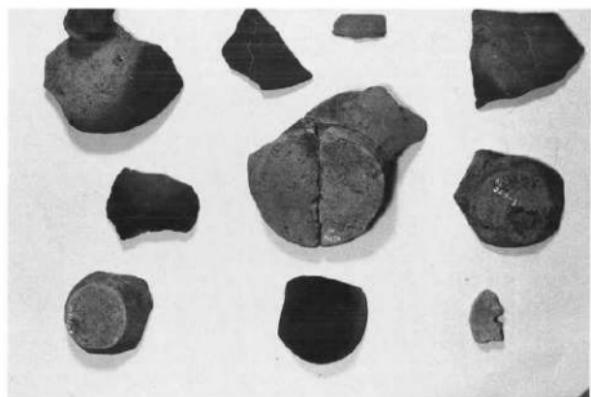
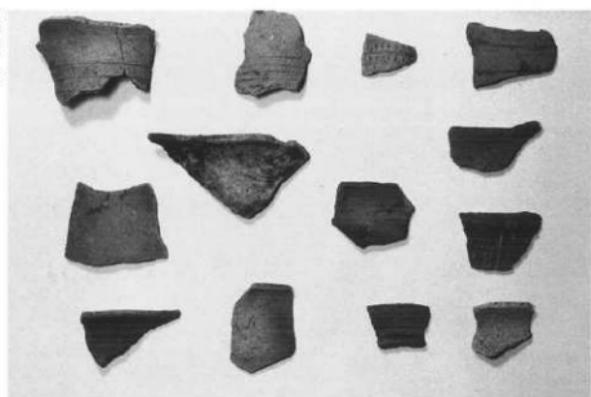
20-13



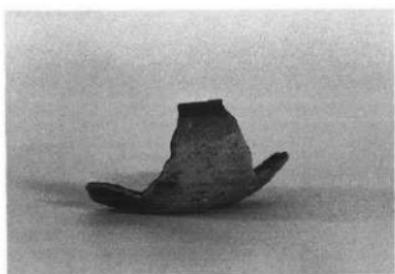
20-12



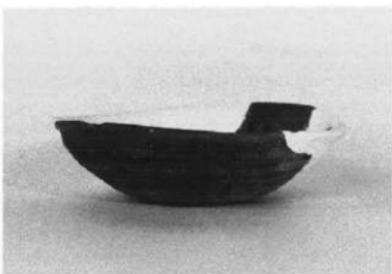
20-11



41 造構外出土弥生式土器 (20-17~38)



22- 1



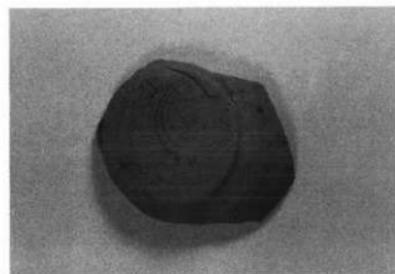
22- 5



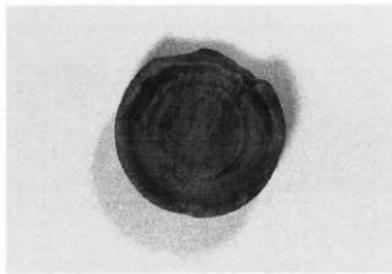
22- 6



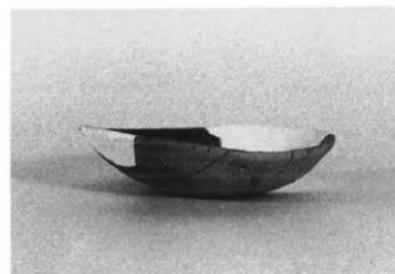
22- 7



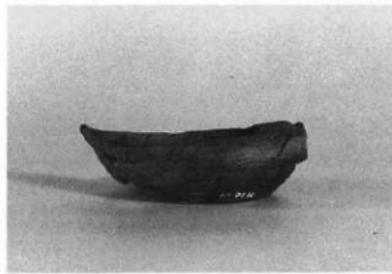
22- 11



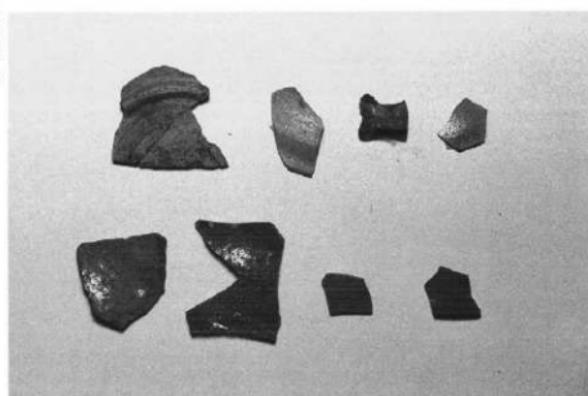
22- 13



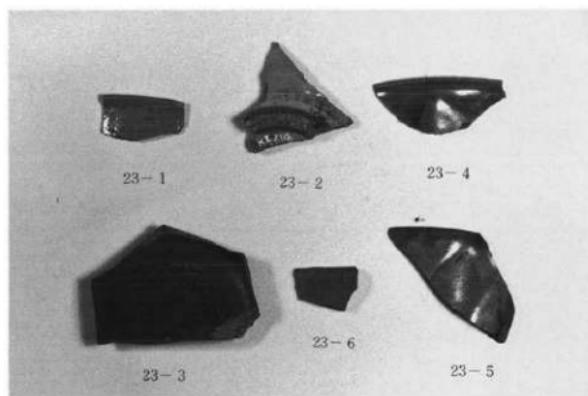
22- 22



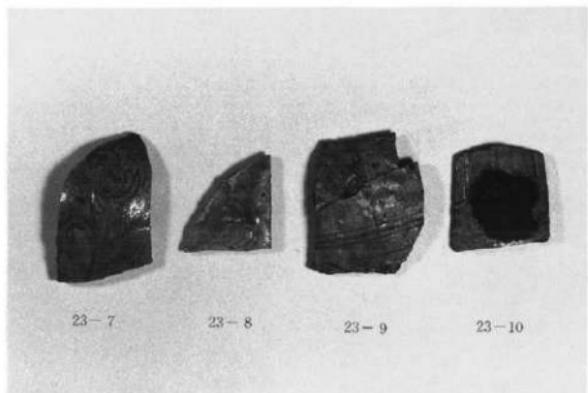
22- 23



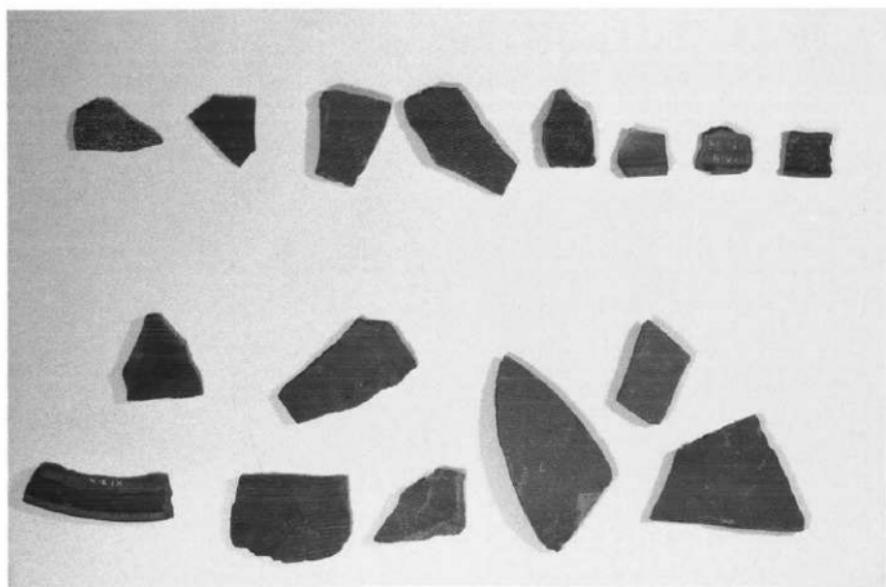
43 平安時代の陶器（灰釉・綠釉陶器）



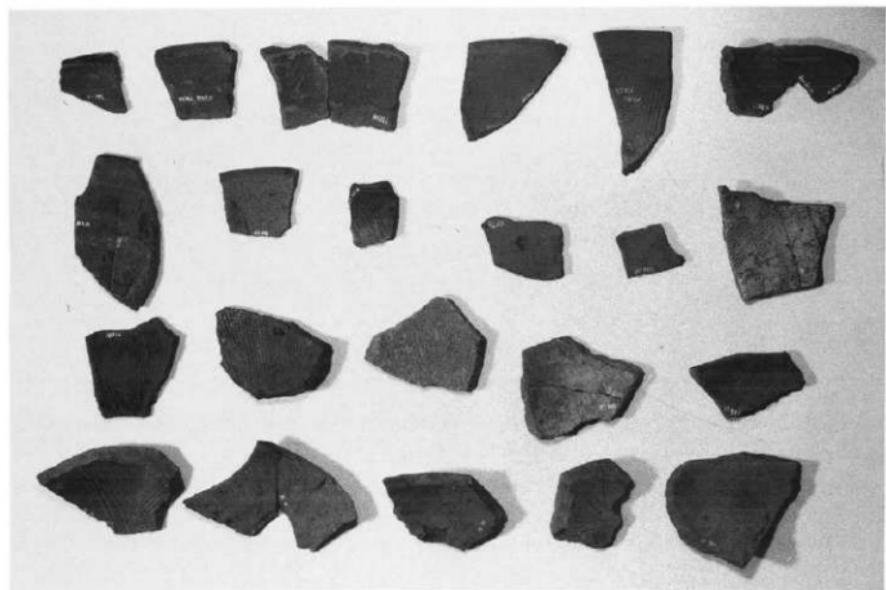
44 中世の中国陶磁



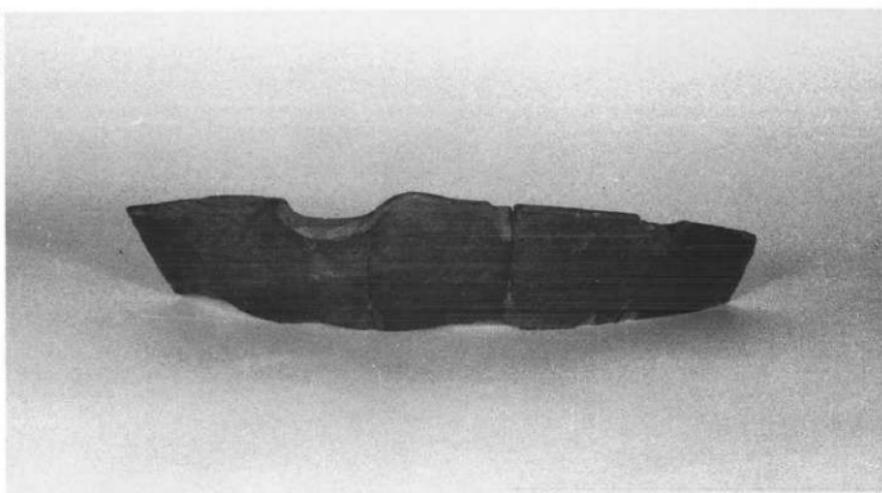
45 古瀬戸



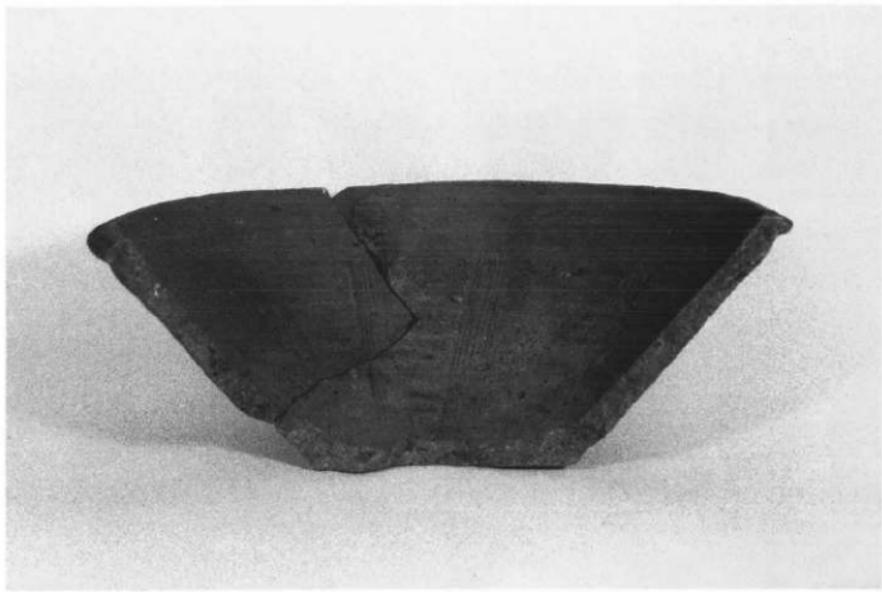
46 珠洲系陶器（甌·壺）



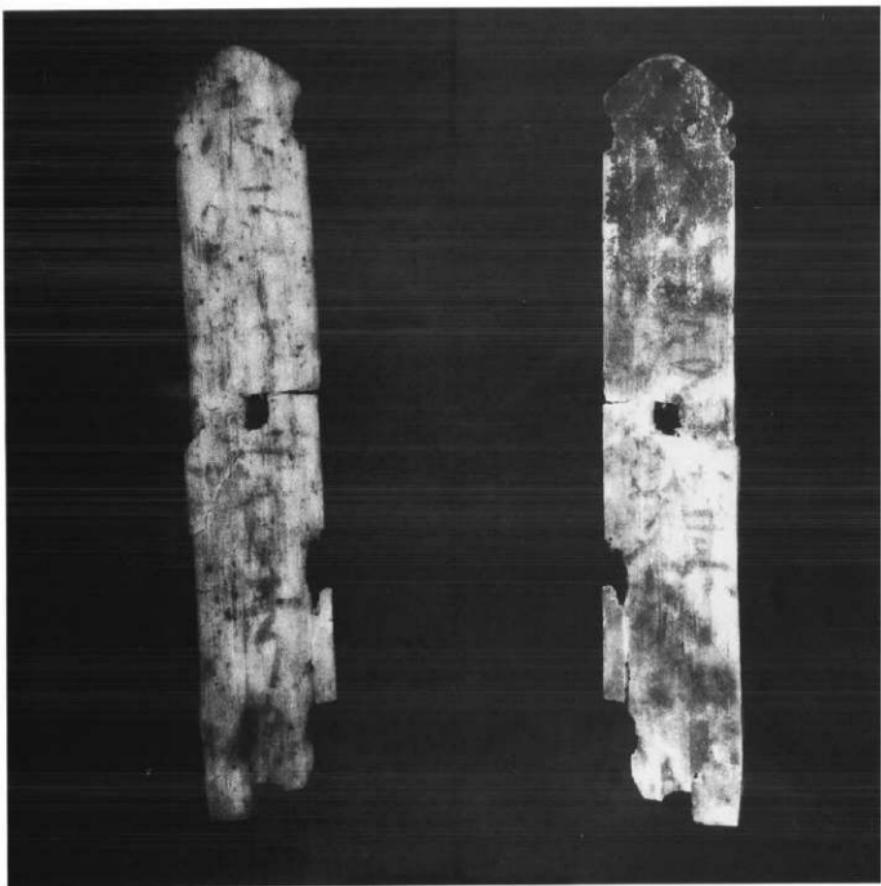
47 珠洲系陶器（片口鉢）



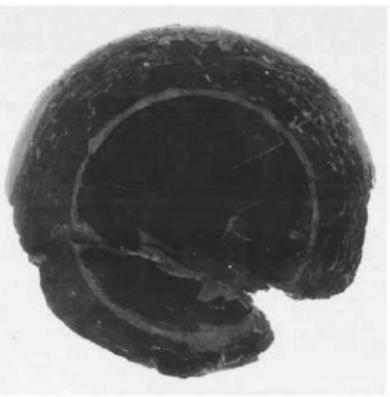
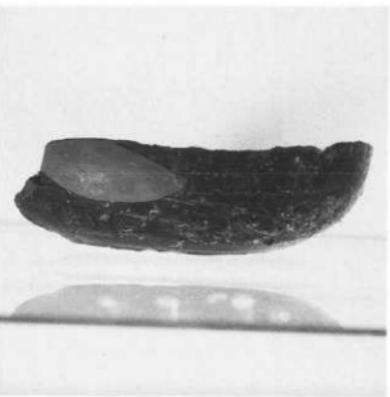
24-11



24-13



49 SK 6 出土木簡



50 SK 6 出土漆器椀

51 26 E 出土漆器椀



26-1

52 SK 6 出土鳥形



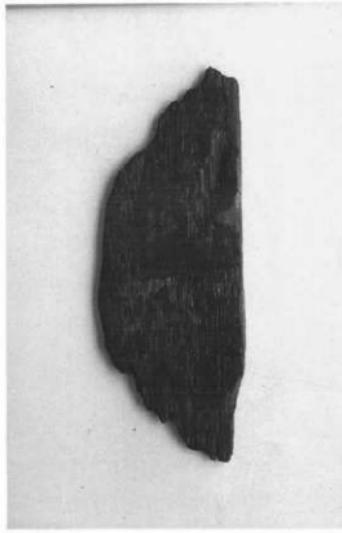
26-6

53 SK 6 出土木製品



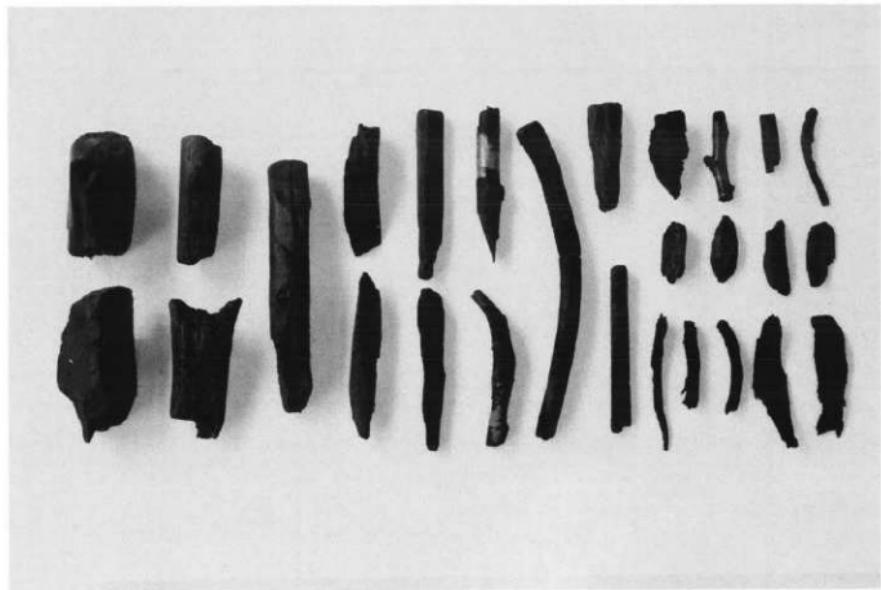
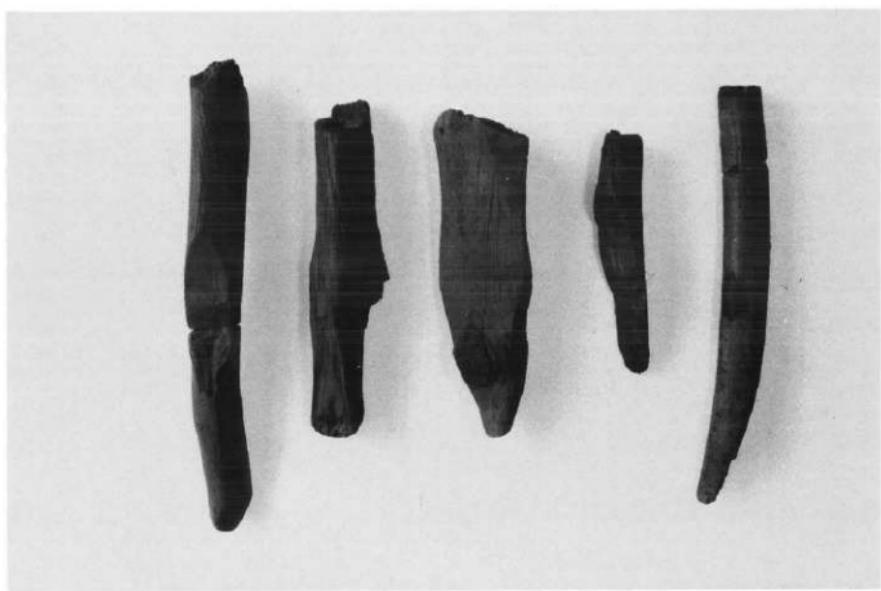
26-3・4・7

54 木製品



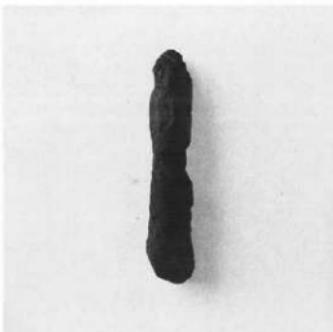
26-8

55 曲物

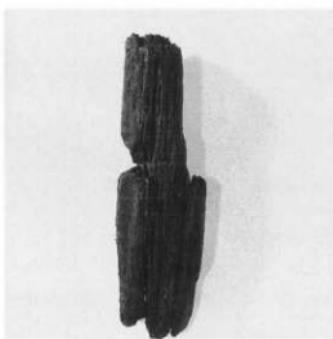




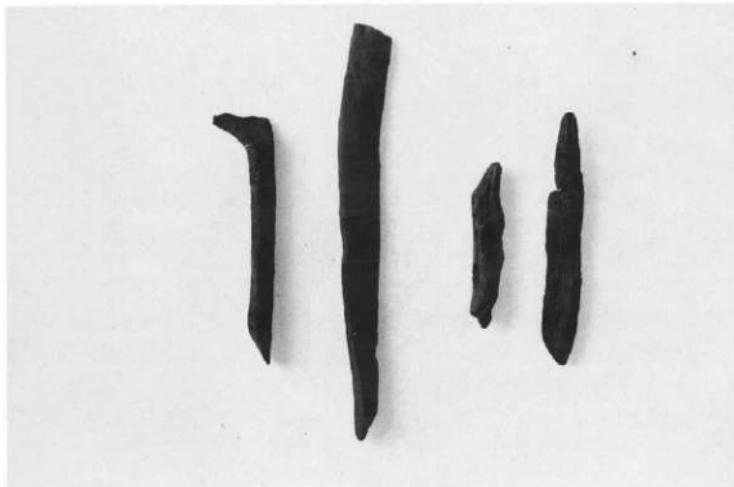
57 SK 6 出土杖



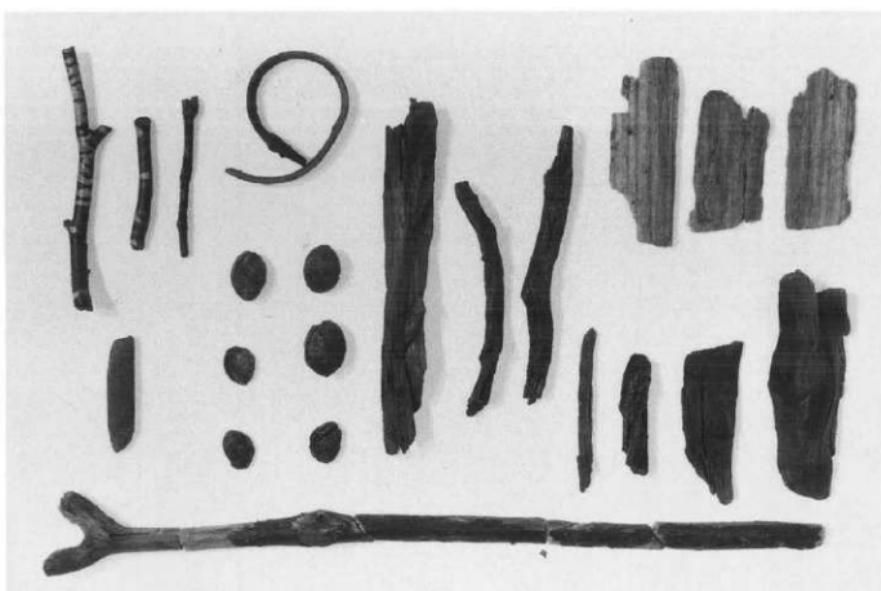
58 木製品



59 木製品



60 木製品



61 SK 8 出土木製品



62 SK 6・8 出土種子



30-1



31-8



32-14



35-15



33-16



33-17



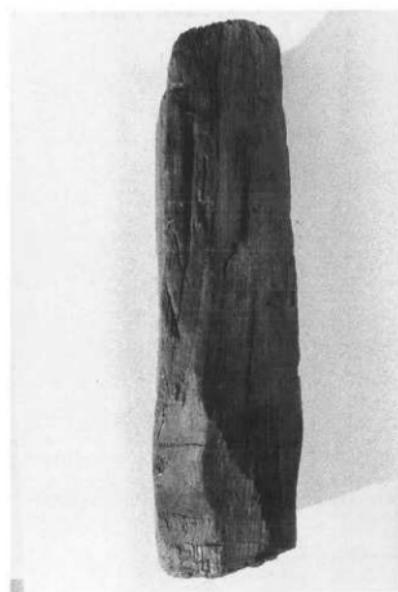
33-18



34-22



34-24



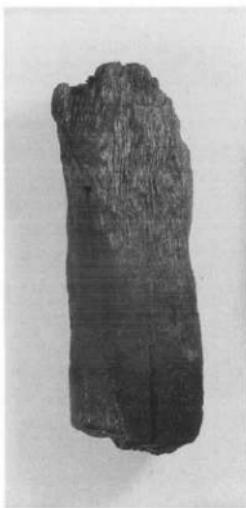
34-26



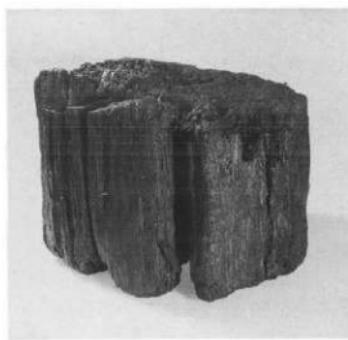
34-25



35-27



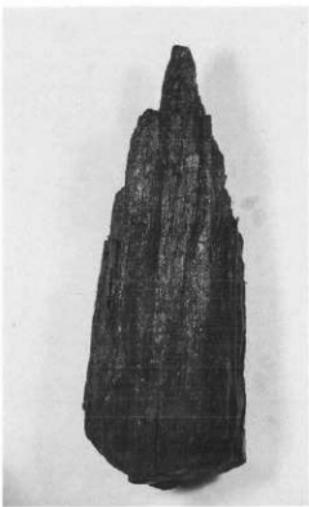
35-28



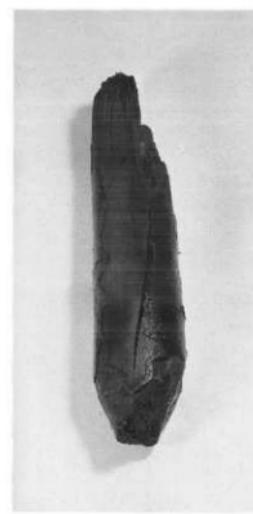
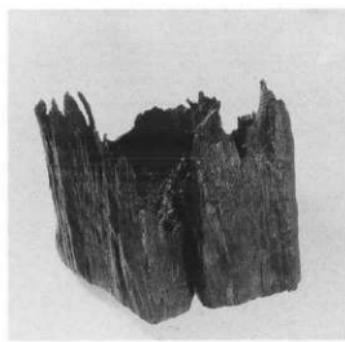
35-29



35-29



32-12



35-34



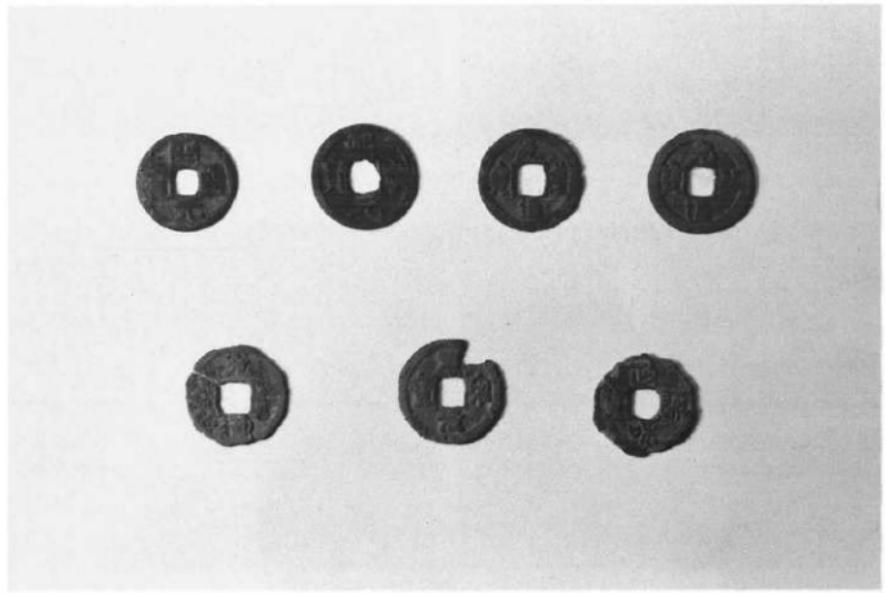
35-33



35-32



67 柱根



68 錢貨



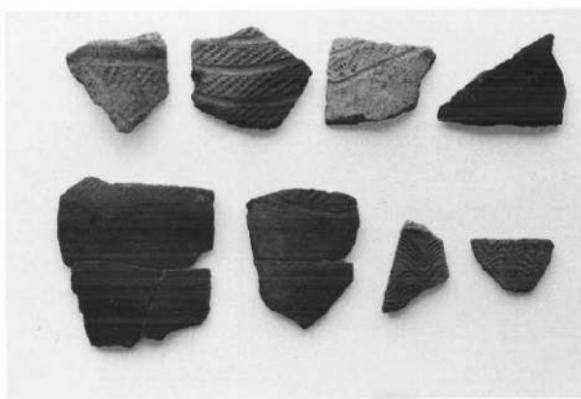
北顏戶遺跡



70 遠 景



71 近 景



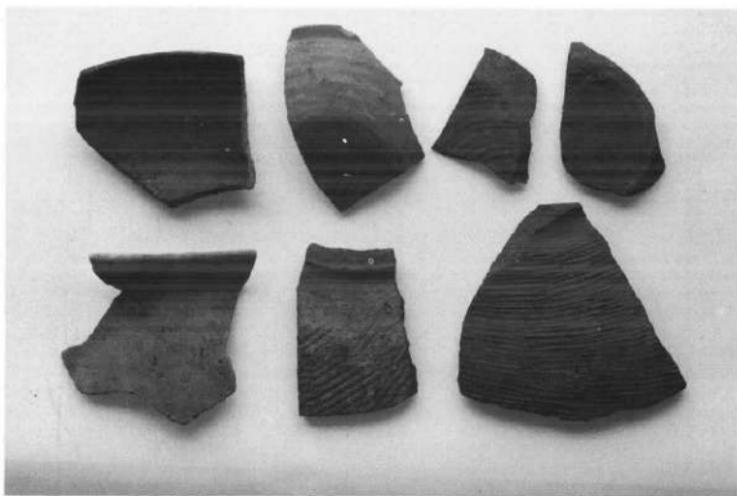
72 A 地區（發生式土器）



73 B 地區（發生式土器）



74 B 地區（古式土陶器）



75 B地区（平安時代の土器）



76 B地区（須恵器長颈壺）



77 B地区（土師器甕）

